北　塚　遺　跡

第13次発掘調査報告書

金沢西警察署古府派出所建設工事に係る
緊　急　発　掘　調　査　報　告　書

1994

石川県立埋蔵文化財センター

北　塚　遺　跡

第13次発掘調査報告書

金沢西警察署古府派出所建設工事に係る
緊　急　発　掘　調　査　報　告　書

1994

石川県立埋蔵文化財センター

例　　言

1．本書は、石川県金沢市北塚町地内に所在する北塚遺跡第13次発掘調査の報告書である。

2．本調査は、金沢西警察署古府派出署建設工事に先立ち、石川県警察本部会計課の委託を受け、石川県立埋蔵文化財センターが発掘調査を実施したものである。

3．発掘期間は、平成５年５月13日～同年６月11日であった。調査面積は約64㎡であった。発掘終了後、平成６年３月31日まで遺物整理、および報告書作成を行った。

4．調査は石川県立埋蔵文化財センター調査第一課主事沢田まさ子、同木立雅朗、嘱託白田義彦が担当した。

5．遺物整理・実測・図版作成は、池村ひとみ、越田純子、山本澄美子の協力を得て、縄文・弥生時代を沢田が、古代以降を白田が担当して行った。

6．本書は木立雅朗が編集し、木立、沢田、白田が分担執筆した。執筆者名は目次と各文末に記した。

　また、自然科学の分析については、金沢大学教育学部藤則雄教授、同教養部鈴木三男助教授、石川考古学研究会川端敦子氏に玉稿を頂いた。

7．出土した遺物や調査記録などは石川県立埋蔵文化財センターで一括保管している。

8．本調査にあたっては石川県警察本部会計課、金沢西警察署、西部緑地公園のお世話になった。

　また、本書の作成にあたっては、山田昌久、南久和、出越茂和、田嶋明人、および石川県立埋蔵文化財センター職員のご教授、ご指導を受けた。記して感謝の意を表したい。

目　　次

第1章　調査に至る経緯と経過

第1節　経　　緯　（木立　雅朗）…… 1

第2節　経　　過　（白田　義彦）…… 1

第2章　遺跡の環境

第1節　位置と地形　（沢田まさ子）…… 3

第2節　周辺の遺跡　（　〃　）…… 4

第3章　遺　　構

第1節　発掘調査の位置と地区割り　（木立　雅朗）…… 8

第2節　層　　位　（　〃　）…… 10

第3節　自然河川　（　〃　）…… 12

第4節　そ の 他　（　〃　）…… 16

第4章　遺　　物

第1節　縄文時代の出土遺物　（沢田まさ子）…… 18

第2節　弥生・古墳時代の出土遺物　（　〃　）…… 38

第3節　古代～近世の遺物　（白田　義彦）…… 39

第4節　出土土器の計測　（木立　雅朗）…… 57

第5章　自然科学的調査

第1節　金沢市北塚遺跡から出土した木材の樹種　（鈴木　三男）（西尾　典子）（能城　修一）…… 60

第2節　金沢市北塚遺跡の花粉分析に基づく古環境解析　（藤　則雄）…… 64

第3節　北塚遺跡第13次調査出土のオニグルミについて　（川端　敦子）…… 68

第6章　ま　と　め　（木立　雅朗）…… 74

第１章　調査に至る経緯と経過

第１節　経　　緯

北塚遺跡は古くから縄紋時代の遺跡として注目され、調査されてきた遺跡である。その調査経過については『北塚遺跡群第11・12次発掘調査報告書』（石川県立埋蔵文化財センター）に詳しい。

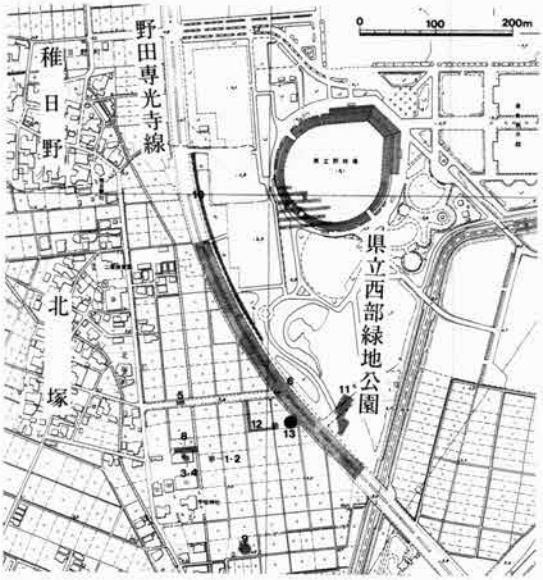
北塚遺跡の名称は『石川県遺跡地図』（1980）では北塚Ａ～Ｃ遺跡と細分されており、総称して北塚遺跡群と呼称されてきたが、『石川県遺跡地図』（1992）から「北塚遺跡」とされている。

金沢西警察署古府派出所を当遺跡内に建設するため、平成４年度に試掘調査を行った結果、溝もしくは川状の落ち込みと遺物を確認し、発掘調査が必要であることが判明した。そのため、平成５年度に発掘調査を行うことになった。この発掘調査は第13次目となる。

発掘地点は駐車場となっており、駐車場造成のために１～1.5m程度盛土されていた。そのため、遺構面は現地表下から約２ｍ、川状の落ち込みは同３ｍ以上とかなり深い。発掘作業にあたっては危険を伴うため、２段掘りにするなど壁面が崩壊しないような配慮が必要であるため、県警察本部と協議し十分な安全策をとった上で調査を行うこととした。　　（木立　雅朗）

第２節　経　　過

今回の調査は北塚遺跡群では13回目の調査である。発掘調査に先だつ分布調査で溝跡がある可能性が指摘されていた。また野田・専光寺線の建設に係る発掘調査（第６次調査）で、弥生時代の大溝が検出されており、それが当調査地点まで延びるのではないかという指摘もあった。発掘調査ではそれらのデータをふまえて、分層発掘を行うように留意した。結果的には縄文時代から平安時代まで存続していたと推定される河川跡の発掘調査となった。河川跡の調査のため層位が多くなり、層の名称変更もあったためこの節では調査経過のなかでも層位の序列を確定していく過程について詳細に記したい。５月13～14日、重機にて駐車場造成時の盛土と駐車場になる前の耕土とその床土を掘削した。旧耕土とその床土を掘削した時点で土器片が目立つ



第１図　北塚遺跡の発掘調査位置
（Ｓ＝１／10,000。数字は調査次数。）

ようになったので、重機の掘削を止めて人力の調査に移った。５月17日の時点で、盛り土、旧耕土、その床土、褐灰色シルト層、暗灰色シルト層の分層ができた。層位順に褐灰色シルト層、暗灰色シルト層と掘り下げを行った。褐灰色シルト層、暗灰色シルト層の掘り下げ中で、調査区の南東から北西へかけて緩やかに傾斜して下がるのを確認した。当初の予想どうり大溝跡があると確認できた。以後層位を観察しながら分層発掘した。５月19日までは遺物を褐灰色シルト、暗灰色シルトとして取り上げた。５月19日に褐灰色シルトから越前焼きが出土したので、褐灰色シルトは中世以後の遺物包含層と認識した。５月20日からは褐灰色シルトをＡ層、暗灰色シルトをＢ層として取り上げた。またその日の北西断面観察により、Ａ層、Ｂ層の下層にＣ層（Ｂ層より暗い暗灰色シルト層）、Ｄ層（黒褐色シルト層）があることが判明した。但し、Ｂ層とＣ層はよく似ていてその判別は難しかった。そのＤ層掘り下げ中に弥生時代末の土器片が出土したことにより、Ｄ層は弥生時代末になると認識した。５月21日、Ｂ層掘り下げ中に近世の遺物が出土したことにより、Ａ、Ｂ層は近世まで遡ることが判明した。５月24日、北西壁になかった黄灰色砂層（Ｅ層）が存在することが判明し、その砂層をＥａ、Ｅｂ、Ｅｃ層と分層したが、Ｅａ、Ｅｂ層は漸移的に変化している箇所があり、Ｅａ、Ｅｂの判別が難しいところの遺物はＥ層として取り上げた。Ｅ層中から平安時代末の土師器が出土したので、Ｅ層を平安時代末と認識した。５月25日、Ｂ層とＥ層の漸移的な層を新たに検出したので、Ｂ・Ｅ層として遺物を取り上げた。Ｂ・Ｅ層からはＥ層とほぼ同年代の遺物が出土した。５月26日、Ｂ・Ｅ層をＢｂ層と層名を変更した。５月27日、１号土坑の掘り下げを行ったが、その覆土の大部分はＥｂ層とよく似ていた。そのＥｂ層と似ている覆土はＰ１－ａ（上層）、Ｐ１－ｂ（下層）とした。１号土坑から出土した遺物の大部分はそのＰ１－ａ、Ｐ１－ｂに含まれる。Ｆ層（(暗）乳灰色シルト）から弥生時代の土器片が数点出土した。Ｇ層（茶褐色腐蝕土層）から出土した土器は少なかったが、トチの実等の腐食した植物を多く出土した。Ｇ層の断面の色が数十分間で大気に触れて変色する程、大量に腐食物を含むものであった。５月28日、Ｇ層の下層のＨ層からは縄文時代後期の遺物が出土した。５月31日、Ｉ層より大量の縄文土器が出土したが、発掘期間の制約上丁寧な掘り下げができず、スコップで急いで掘り下げたものだった。６月11日、Ｉ層の下層を調査するため短いトレンチを入れた結果、灰色シルト層、黒色シルト層等を検出したが、遺物は出土しなかった。

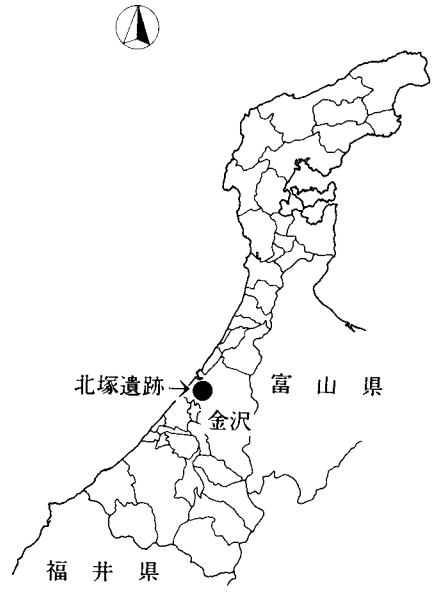
（白田　義彦）

第2章　遺　跡　の　環　境

第1節　位置と地形

北塚遺跡は、石川県金沢市の西部地区北塚町地内に所在する縄文～中世にまたがる複合遺跡である。今回の調査で13次を数える県内でも古くより周知された遺跡である。

日本海に突出した雄々しい能登半島、その基部には一見単調ともいえるなだらかな景観をみせる日本海側でも最大規模の砂丘地、内灘砂丘が発達している。後背の低地には犀川、浅野川による沖積世平野金沢平野が広がり、扇状地からなる広義の金沢平野が南西に続き加賀を形作る。



第2図　北塚遺跡の位置

金沢市は北は内灘町・津幡町と、南は松任市・野々市町・鶴来町と隣接する、加賀の北端に立地する。金沢市の市街地は河成段丘より成る高低差の著しい立地であり他大都市と異なる景観をかもしだしている。名勝兼六園は河岸段丘のひとつ小立野台の先端に所在し、当遺跡はその北西約6kmに位置する。内灘砂丘の南西に連なる安原砂丘から東に約3km、北陸自動車道金沢西インターから北に約3kmの地点に所在する。

本遺跡は富山県境の大門山奈良岳の麓から流れを発する長さ約42kmの犀川と標高2,702mの霊峰白山に源を発する手取川の複合扇状地の扇端部に位置する。手取川は白山山系から流れ出る尾添川・瀬波川・大日川・直海川の支流を合せて北流し扇頂の鶴来町から美川町で日本海に注ぐ全長約80kmの川であり金沢平野の主要部を占める手取扇状地を形作っている。

本遺跡は、手取扇状地の扇端部にあたり、扇状地に大小点在する「島」状の微高地に立地する。また、遺跡の北東1kmには犀川・伏見川・十人川の合流地点も所在する。犀川は、かつて河口付近で大きく蛇行し、屢々氾濫源となり冠水した。西1kmには安原川も流れ周辺部は「島」状地形を除いては低湿地帯であり「フルカワ」とよばれる旧河道も同地内に所在した。またこのあたりはよく知られた伏流水の自噴地帯でもある。周辺の地名に残る「野」とよばれる地所は、微高地になっていたと思われ雑木林が生い茂っていた地点であったことも知られている。

現在は生産緑地として落ち着いたたたずまいをみせる周辺ではあるが、先進的な耕地造成がされ、早くより様々の整備事業等により遺跡ならびに環境の破壊がされてきたことは、否めない。

県内でも屈指の遺跡密集地にあたり、数々の歴史的遺産が姿を消してきたが本遺跡が今後も存続し続ける事を希求する。

（沢田まさ子）

第２節　周辺の遺跡

１節で述べた位置と地形を念頭におき、遺物の２期のまとまり（縄文、平安）に焦点をおきながら周辺の遺跡の分布に言及したい。

周辺は、第４図からも解るようにもとより遺跡の密集地にあたり、人間の生活環境として好適所と言えよう。周辺３km以内のサークルをとっても80を優に越える遺跡が点在する。この範囲内では旧石器遺跡は未だ発見されておらず、縄文前期の土器片が下安原海岸遺跡から採集されているものが最古である。但し、縄文海進を考慮におけば、汀線下の集落となり局所的地殻変動も考えられ、今後の検討を要する。[1]

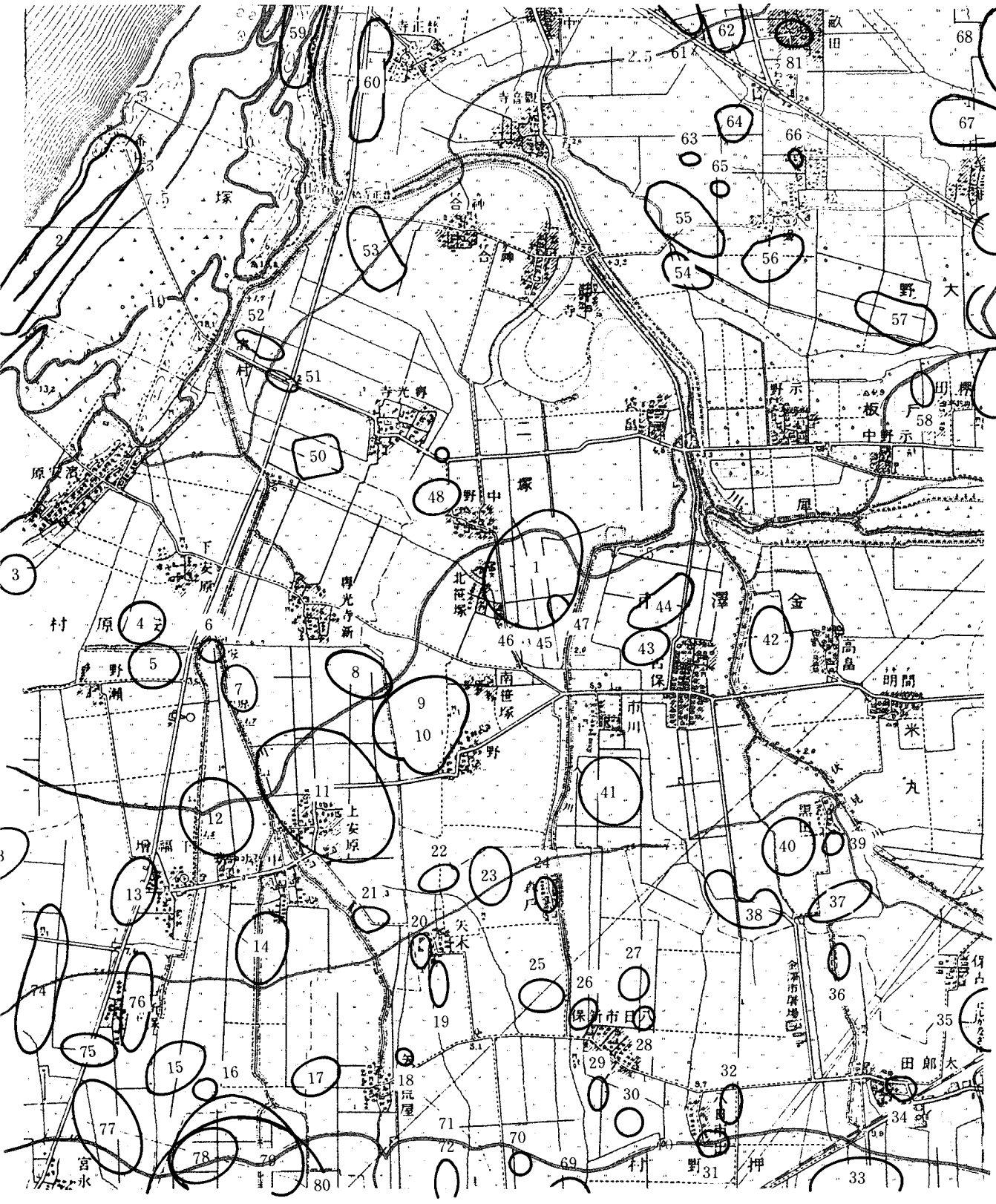
現在の標高2.5m～10mにあたるこの地域に足跡を残す遺跡「ムラ」は海水面がほぼ現在と同じとなる縄文中期にはいってから出現する標高約５mの本遺跡（１）と1.5kmはなれた標高約７mの古府遺跡（38）があげられる。扇状地の島状の微高地に立地し伏流水や河川の水、川のもたらす資源並びに広葉樹を中心にした森林資源もふんだんに活用して４～５棟単位の集落が営まれた。後晩期になると海退期にはいり冷涼期となるが、扇状地上の遺跡は増加傾向となる。隣接する南塚遺跡（９）、ほぼ11.5km内外の距離をおいて、井口式期の御経塚遺跡（71）八日市新保式期の新保本町チカモリ遺跡〔国指定〕（27)、中屋式期の中屋遺跡（14）等が標高7.5m前後（当時は10m前後）の扇状地の尾根上地に僅かの盛期のずれをもちながら「ムラ」を構成した、貴重なフィールドである。犀川を挟んで位置する松村Ａ・Ｂ遺跡（55. 56）は上記の諸遺跡とは性格を異にする沖積平野上の遺跡である。いずれの遺跡も、生態系の年間総生産量の一番高い汽水域からも５km以内にあたり当地の縄文人の生活圏が肥沃な生物圏に属することも解る。またこの時期、冷涼な期間が長期にわたり生態系の年間総生産量の一番高い汽水域の生態系に大きな変化が起り、稲作の伝播流布が起ったことは確実であろう。

これらの遺跡の殆どと弥生中期に形成された集落が、弥生時代末～古墳前期にかけての海進の再来で衰退廃絶の方向を辿る。その後、農業生産力を経済基盤とした新たな古代集落の形成がある。この周辺に於いても、標高2.5m～５mの低湿地に多くの遺跡の立地をみるようになる。

越前国加賀郡大野郷を経、加賀国加賀郡、石川郡となったこの地は、生産性の高い地域であるとともに、河川、海をも利用した交通の要所であり上荒屋遺跡（17）黒田町遺跡（40)、横江

１．縄文中期以前　２．縄文後期～弥生　３．古墳時代　４．古　　代

第３図　周辺の遺跡分布図



第４図　周辺の遺跡（１／25,000）

第１表　周辺の遺跡

番号	遺跡番号	名　　称	所　在　地	種　別	現　　状	時　　代	出　　土　　品
1	01088	北塚遺跡	金沢市北塚町	集落跡	田・宅地公園	縄文・弥生 平安・中世	縄文土器、石器、弥生土器、須恵器
2	01038	専光寺海岸遺跡	金沢市専光寺町	散布地	砂丘	奈良・平安	弥生土器、土師器
3	01038	下安原遺跡	金沢市下安原町	集落跡	田	縄文・古墳 中世・近世	縄文土器、弥生土器、打製石斧、土師器、須恵器、陶器、珠文鏡
4	01040	安原工業団地Ｂ遺跡	金沢市下安原町	包含地	田	弥生～平安	弥生土器、土師器
5	01041	安原工業団地Ａ遺跡	金沢市福増町打木町	集落跡	田	弥生・平安	弥生土器、須恵器、土師器
6	01042	緑団地下水処理場遺跡	金沢市中屋町	包含地	宅地	弥生・室町	弥生土器、石鏃、五輪塔、磨製石斧、灯明皿、人骨
7	01043	緑団地公園遺跡	金沢市上安原町	包含地	公園	古墳・平安	土師器、須恵器
8	01044	上安原緑団地遺跡	金沢市上安原町	包含地	田・宅地	弥生・古墳	弥生土器、土師器
9	01045	南塚遺跡	金沢市南塚町	包含地	田	縄文・古墳	縄文土器、土師器
10	01046	びわ塚古墳	金沢市南塚町	古墳	社地	古墳	管玉、勾玉、金具
11	01047	上安原遺跡	金沢市上安原町	包含地	田	古墳～平安	土師器、須恵器
12	01048	中屋ヘシタ遺跡	金沢市中屋町	包含地	田	奈良～中世	土師器、須恵器、珠洲焼、越前焼
13	01049	福増遺跡	金沢市福増町	包含地	田	不詳	土師器
14	01050	中屋遺跡	金沢市中屋町	包含地	田	縄文晩期	土器、打製石斧、磨製石斧、石鏃
15	01051	下福増遺跡	金沢市福増町	包含地	田	縄文～古墳	縄文土器、打製石斧、弥生土器、土師器
16	01052	中屋サワ遺跡	金沢市中屋町	集落跡	田・造成地	縄文・中世	縄文土器、土師質土器
17	01053	上荒屋遺跡	金沢市上荒屋６丁目	集落跡 荘園跡	田	縄文～平安	縄文土器、打製石斧、須恵器、土師器、木製品
18	01055	上荒屋住宅遺跡	金沢市上荒屋町	包含地	宅地	弥生	抉入片刃石斧
19	01056	矢木マツノキダ遺跡	金沢市矢木	集落跡	田・宅地	弥生・古墳	弥生土器、打製石斧、土師器
20	01057	矢木ヒガシウラ遺跡	金沢市矢木	包含地	宅地	弥生・古墳	打製石斧
21	01058	上安原陸橋遺跡	金沢市上安原町	包含地	道路・田	弥生・古墳	弥生土器、土師器、木器
22	01059	矢木ジワリ遺跡	金沢矢木	包含地	田・宅地	弥生・古墳	弥生土器、土師器、石器
23	01060	森戸バイパス遺跡	金沢市森戸	包含地	宅地	古墳	土師器
24	01061	森戸本町遺跡	金沢市森戸	包含地	宅地	縄文	磨製石斧
25	01062	森戸住宅遺跡	金沢市森戸	包含地	田・宅地	縄文	打製石斧
26	01063	新保本町西遺跡	金沢市新保本	集落跡	田・宅地	弥生・古墳	弥生土器、土師器
27	01064	新保本町チカモリ遺跡	金沢市新保本	集落跡	田・公園 宅地	縄文後晩期	縄文土器、土偶、凹石、打製石斧、磨製石斧、石剣、石刀、石鏃、独鈷石
28	01065	新保本町東遺跡	金沢市新保本	集落跡	田・畑	縄文・古墳	弥生土器、磨製石斧
29	01066	新保本町ツカダ遺跡	金沢市新保本	包含地	田	弥生	土器
30	01067	新保本町南遺跡	金沢市新保本	包含地	宅地	中世	
31	01069	八日市サカイマツ遺跡	金沢市八日市５丁目	集落跡	畑・宅地	縄文・奈良 平安	縄文土器、須恵器、土師器
32	01070	八日市ヤスマル遺跡	金沢市八日市５丁目	包含地	田	弥生・奈良 平安	弥生土器
33	01072	押野西遺跡	金沢市押野町	集落跡	宅地・田	縄文・弥生 奈良・平安	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、磨製石斧
34	01074	西金沢新町遺跡	金沢市西金沢新町	包含地	宅地	古墳	土師器
35	01075	日本たばこ金沢工場遺跡	金沢市米泉町10丁目	包含地	工場敷地	奈良・平安	須恵器・土師器
36	01076	保古町遺跡	金沢市保古	集落跡	田・宅地	奈良・平安	須恵器
37	01077	黒田Ｂ遺跡	金沢市黒田	集落跡	田・宅地	平安	須恵器、墨書土器
38	01078	古府遺跡	金沢市古府	集落跡	宅地	縄文中期	縄文土器、磨製石斧、打製石斧、石鏃、石錘、石皿、凹石、磨石
39	01079	黒田町三角点遺跡	金沢市黒田	集落跡	田・宅地	古墳	須恵器、土師器
40	01080	黒田町遺跡	金沢市黒田	集落跡	田・畑・宅地	平安	縄文土器、須恵器、墨書土器、人形、斎串、曲物、瓦
41	01081	松島ナカオサ遺跡	金沢市松島	包含地	田	平安～中世	土師器、須恵器、珠洲焼
42	01082	高畠遺跡	金沢市高畠	集落跡	田・宅地	弥生・古墳	弥生土器、土師器、石釧、管玉、鉄製工具
43	01083	古府Ｂ遺跡	金沢市古府	包含地	田	不詳	
44	01084	古府クルビ遺跡	金沢市古府	集落跡	宅地道路	弥生～平安	弥生土器、土師器、銅焼、須恵器、石製紡錘車
45	01085	おまる塚古墳	金沢市北塚町	古墳	社地	古墳	
46	01086	宇佐神社古墳	金沢市北塚町	古墳	社地	古墳	
47	01087	北塚古墳群	金沢市北塚町	古墳	道路・公園	古墳	須恵器
48	01089	稚日野遺跡	金沢市稚日野町	包含地	田	縄文・古墳	打製石斧、須恵器、勾玉
49	01090	御館前遺跡	金沢市専光寺町	包含地	田	不詳	陶磁器、土師質土器、土錘

番号	遺跡番号	名　　称	所　在　地	種　別	現　　状	時　　代	出　　土　　品
50	01091	吉藤専光寺町遺跡	金沢市専光寺町	寺院跡	田	室町	
51	01092	専光寺養魚場跡遺跡	金沢市専光寺町	包含地	田・養魚場	古墳～平安	土師器
52	01093	専光寺染色団地遺跡	金沢市専光寺町	包含地	田・宅地	古墳	土師器
53	01094	佐奇森遺跡	金沢市佐奇森町	集落跡	田・流通施設	弥生 平安～近世	弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器
54	01095	松村どのまえ遺跡	金沢市松村	包含地	田・宅地	弥生中期	弥生土器、石鏃
55	01096	松村A遺跡	金沢市松村	包含地	田	縄文後晩期 古墳・中世	縄文土器、打製石斧、磨製石斧、土師器、桃種子、石鏃
56	01097	松村B遺跡	金沢市松村	包含地	田・宅地	縄文晩期 弥生・江戸	縄文土器、石斧、石鏃 弥生土器、近世陶磁器
57	01098	松村高見遺跡	金沢市松村	包含地	田	弥生中後期	弥生土器、石斧、管玉、同未製品
58	01099	桜田・示野中遺跡	金沢市桜田金町、示野中町	集落跡	田・道路・宅地	弥生・平安	弥生土器、須恵器、土師器、玉類
59	01254	普正寺遺跡	金沢市普正寺町	集落跡墓地	砂丘	鎌倉・室町	越前焼、珠洲焼、常滑焼、木器、銅銭、懸仏、石碑、五輪塔
60	01255	普正寺高畠遺跡	金沢市普正寺町	集落跡	平地	古墳後期室町	須恵器、土師器、鉄鏃、土製支脚、中世陶器、漆珠
61	01260	畝田・寺中遺跡	金沢市畝田西	散布地	田	古墳～中世	須恵器、土師器
62	01264	畝田御台場遺跡	金沢市畝田	堡跡	宅地	江戸	
63	01268	観音堂遺跡	金沢市観音堂町	散布地	校地・宅地	不詳	
64	01269	松村西の城遺跡	金沢市松村	散布地	田・宅地	古墳・平安	須恵器、土師器
65	01270	松村平田遺跡	金沢市松村	散布地	田・宅地	弥生中期	弥生土器、石斧、石鏃
66	01271	松村寺の前遺跡	金沢市松村	散布地	宅地	室町	五輪塔（空輪部）
67	01272	藤江C遺跡	金沢市藤江	集落跡	田	弥生～中世	弥生土器、須恵器、土師器、石器、木器
68	01274	戸水B遺跡	金沢市戸水町	散布地	田・校地	弥生・平安	弥生土器、砥石、自然遺物、須恵器、土師器
69	16027	御経塚遺跡	野々市町御経塚	集落跡	宅地・道路・田・公園	縄文後晩期 弥生 奈良～中世	縄文土器、石器、御物石器、弥生土器、須恵器、土師器、青磁、白磁、珠洲焼、石臼
70	16028	御経塚C遺跡	野々市町御経塚	包含地	田・宅地	古墳	土師器
71	16030	御経塚シンデン遺跡	野々市町御経塚	包含地	田・道路	縄文後晩期 弥生・古墳	縄文土器、弥生土器、土師器
72	16031	御経塚シンデン古墳群	野々市町御経塚	古墳	田・道路	古墳	土師器
73	0829	八田中中村遺跡	松任市八田中町	集落跡	田・近世		
74	08130	八田中ヒエモンダ遺跡	松任市八田中町、旭丘1	集落跡	田	縄文・弥生、中近世	土器、陶磁器、管玉、勾玉、漆器、木器
75	08131	八田中アレチ遺跡	松任市八田中町、中新保町	包含地	田	縄文・弥生	土器
76	08132	中新保遺跡	松任市中新保町	包含地	田	不詳	
77	08133	下福増遺跡	松任市中新保町、宮永新町	包含地	田	縄文・弥生 奈良・平安	土器
78	08134	横江荘々家跡	松任市横江町	荘園荘家	史跡公園工場	平安	須恵器（坏、蓋墨書土器）、土師器（椀、丹塗土器）、木器（下駄、櫛、火錐臼）、木簡
79	08135	横江荘遺跡	松任市横江町	荘園	田・工場・宅地	奈良・平安	
80	08138	横江A遺跡	松任市横江町	包含地	田・工場・宅地	縄文・弥生	石硬、石斧、土器
81	01264	畝田御台場跡	金沢市畝田町	堡地	田	江戸	

荘々家跡（86）等、官衙、荘園遺跡が標高7.5mに立地する。中世に入り更に整備され流通網の要所として発達した宮腰湊に近接する臨海集落遺跡、普正寺遺跡（59）標高2.5～10mもある。もとより自然条件のみから遺跡の消長をとらえることには、無理があるが今後とも後世の開墾や、近現代の圃場整備の削平等をも考えた遺跡の古環境の復元に努める必要があろう。（沢田まさ子）

［註］

(1)　藤1975。「北陸の海岸砂丘」。藤・四柳1971。等の論考による。

［参考文献］

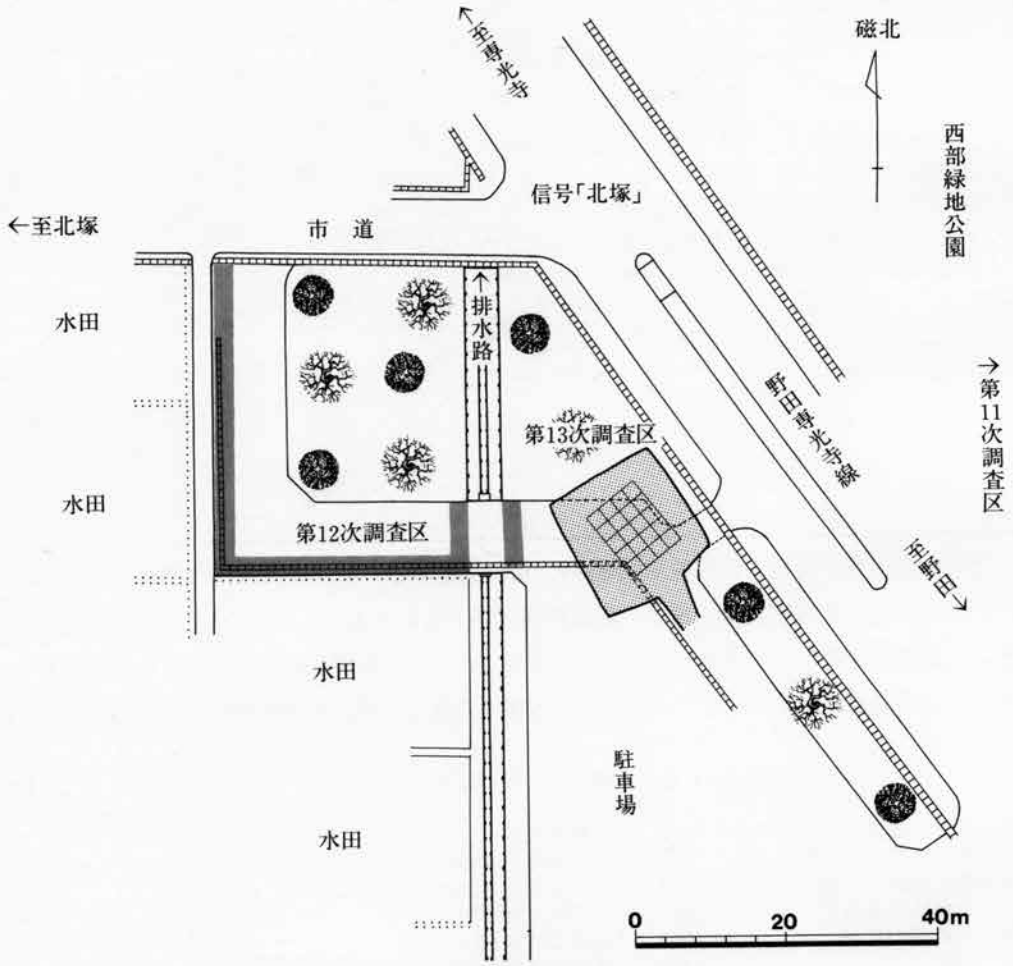
石川県立埋蔵文化財センター　1985　『北塚遺跡群』
石川県立埋蔵文化財センター　1988　『下安原海岸遺跡』
石川県立埋蔵文化財センター　1991　『金沢市寺中B遺跡』
金沢市教育委員会　1973　『金沢市北塚遺跡』
金沢市教育委員会　1993　『身近な地域』
藤　則雄　1975　「北陸の海岸砂丘」
藤　則雄・丹羽千枝子　1983　「石川県縄文後・晩期御経塚遺跡の古環境解析」『野々市町御経塚遺跡』
藤　則雄　1985　「石川の地形・地質案内」

第３章　遺　　構

第１節　発掘調査の位置と地区割り

調査地点は西部緑地公園の駐車場内に位置しており、厚い盛土がなされていた。この駐車場を造成するために、擁壁をたてる部分の発掘調査をかつて行っている。これが第12次調査区で、今回の調査区に隣接している。第11次調査区も野田・専光寺線を挟んだ地点に近接している。

現地表の標高は約5.8mであり、盛土以前の旧地表の標高はおおよそ4.7mであった。盛土が１m余りあり、遺構面まで掘り下げるとかなり深くなることは試掘調査で明らかであった。さらに、野田・専光寺線の建設に係る発掘調査（第６次調査）で、弥生時代末頃の大溝が検出されており、それが当調査地点へ延びるのではないかと言う指摘もあった（ただし、かなり以前の調査である

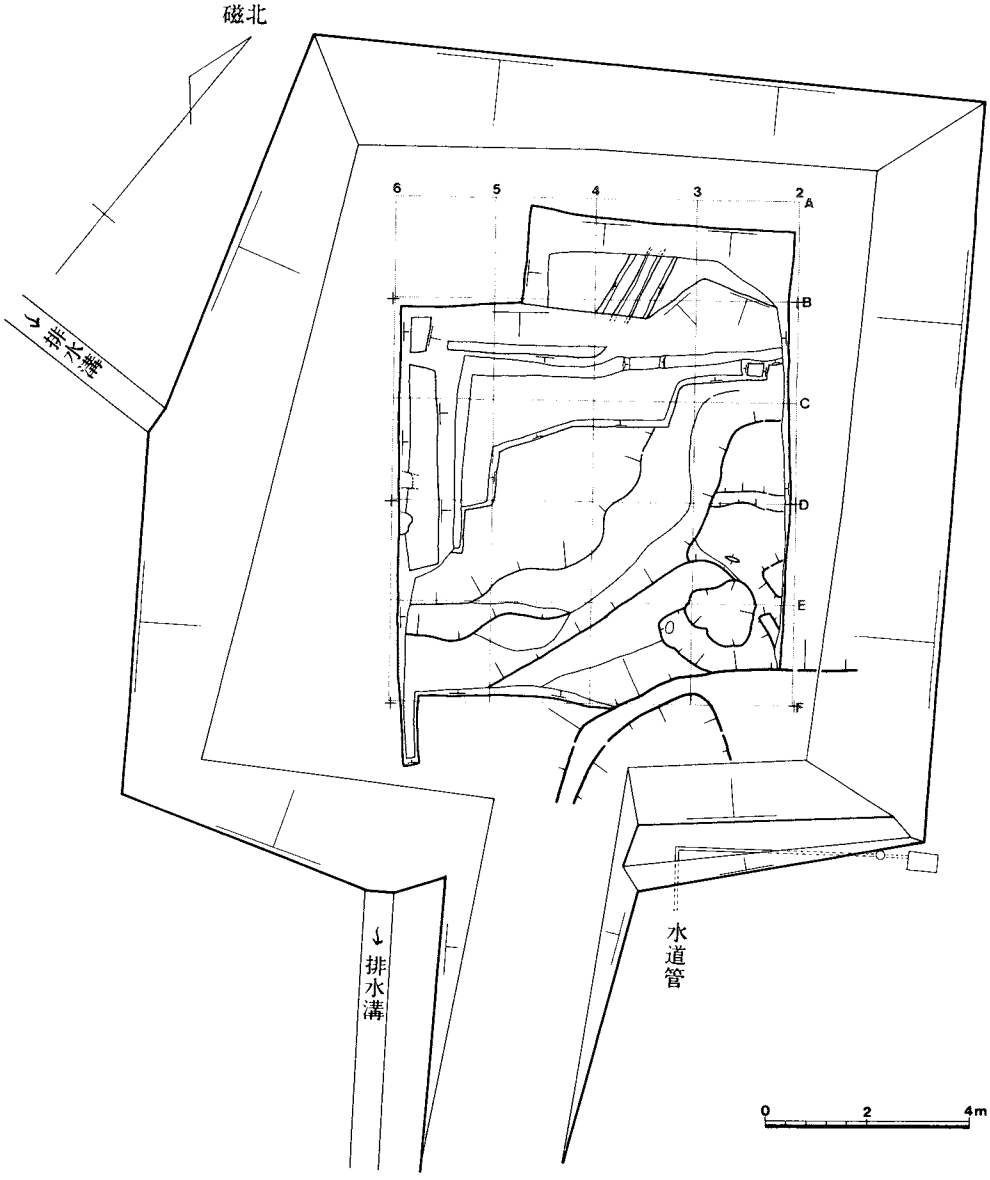


第５図　北塚遺跡第13次発掘調査の位置（Ｓ＝１／1000）

ことと未報告であるため、地図上に厳密におとすことができない)。そのため、厚い盛土と深い大溝の発掘を想定して、調査区全体を2段掘とし、法面の勾配もできるだけ緩くした。

調査区掘り方の上場は16m四方であったが、実際に発掘調査した部分は8m四方の狭いものであった。調査の結果、その調査区の大半が自然河川で占められていることが確認された。A・B層付近まで重機で掘削し、そのあとはすべて人力で掘り下げた。掘り下げに際しては、層位ごとに取り上げることに極力注意を払った。

地区杭は調査区の形にあわせて任意に設定した。2mごとに北から南へアルファベットを、東から西へ数字をふった。北東方向の杭名をグリッド名とした。



第6図　調査区全体図と地区割り（S＝1／150）

第2節　層　　位

調査区がほぼ自然河川の中に含まれるため、ここでふれる層位も自然河川の覆土が大半をしめる。基本土層は第7図のとおりである。

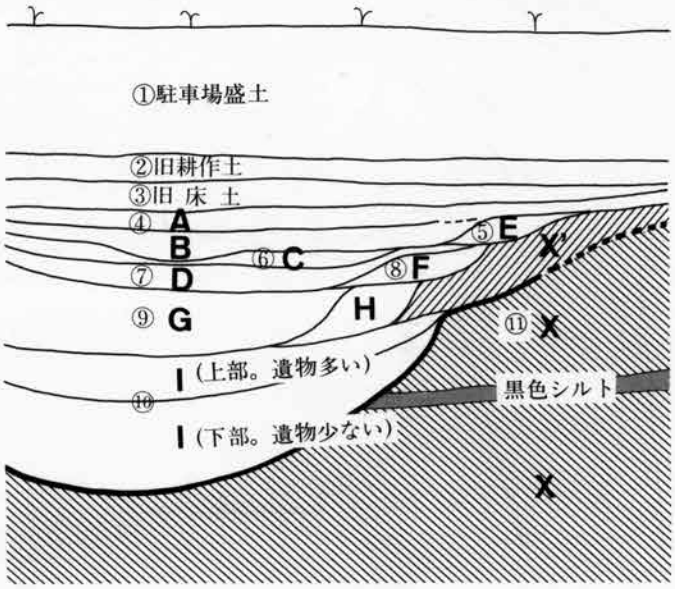
なお、E層より下層は明らかに自然河川の覆土であり、A・B層は自然河川が埋まった跡の窪みに堆積した土層、もしくは自然河川の最終段階の土層である。A・B層より出土した土器から、自然河川の最終段階は近世まで下る可能性がある。

E層は自然河川の右岸の岸辺に堆積した中～粗砂の砂層で、川底までは延びていなかった。この層から土師器が大量に出土している。右岸から投棄したものと推定される。

G層は腐蝕土層で土器はほとんど出土していない。しかし、多量の「自然木」とともにクルミやトチの実が若干出土している。

I層もG層と同じく腐食土層であるが、粗砂を互層状、若しくはブロック状に含んでいる。湧き水に悩まされたこと、調査区がかなり深くなったこと、時間的制約などのため、I層の掘り下げはかなり乱雑な方法にならざるを得なかった。そのため、砂層と腐蝕土との関係を十分に吟味できなかったが、その上部は、基本的に目まぐるしいほどの互層であったと推定している。

I層の掘り下げは土器の出土がなくなるところで断念した。ただし、調査区内のI層上部を全掘出来ず、若干掘り残し部分があったと推定される。下部は断ち割りしか実施できなかったが、砂と腐蝕土の整然とした互層であった。上部からは多量の縄文土器を出土している。また、クルミ、トチの実、骨も出土し、「自然木」も多い。木製容器の未製品も出土している。下部からは狭い範囲の断ち割りであるため、土器の出土は確認できなかった。しかし、クルミが若干出土している。全面的に発掘すれば詳細な検討ができたであろうが、もっとも人間活動が盛んであった時期に堆積した土層がI層上部であることは確実であろう。



①盛土
②旧耕作土
③旧床土
④A・B層（中世～近世）
⑤E層（平安末の砂層）
⑥C層（弥生末以降～平安末以前）
⑦D層（弥生末）
⑧F層（弥生末以前）
⑨G・H層（縄文後期以降～弥生末以前）
⑩I層（縄文中期～後期）
⑪X層（縄文中期～後期以前。地山か）。

第7図　基本土層模式図

トレンチが深くなったため、Ⅰ層の下面まで掘り下げることは出来なかったが、ボーリング調査によって標高0.9m付近に地山状の土層（X層か）を確認している。

なお、Ⅰ層上部の土層が砂と腐蝕土と言う堆積環境が矛盾する２つの地質が含まれることは上下の地層の堆積に比べて特異である。これ以外の土層は砂とシルトが互層状に整然と堆積しているが、Ⅰ層上部のみこのような攪乱とも思えるような混合状態を示しているのは、堆積環境が余

1. 灰褐色極細砂質シルト（赤褐色酸化粒多い）　Aa層
2. 〃（1よりやや暗く、粘性強い。赤褐色酸化粒多い）　Aa層
3. 暗（褐）灰色極細砂質シルト（1・2より暗い。赤褐色酸化粒多い）　Ab層
4. 暗灰色細砂質シルト（ややオリーブ色がかる。南ほど砂質強い）　B 層
5. 黄灰色細砂多量混入褐灰色シルト（6より黄色っぽい）
6. 暗灰色質細砂（炭含む）　E 層か
6'. (黄)灰色細砂多量混入暗灰色シルト　B 層に連続
（5より灰色っぽい。南端ではほとんど細～中砂）
7. 黒色シルト細粒多量混入暗灰色シルト(4・8より暗い。炭含む)　Ca層
8. 黒色・乳灰色シルト細粒混入暗灰色シルト　Cb層
（7よりやや淡い。炭含む）
9. 黒色・乳灰色シルト細粒多量混入暗灰色シルト　D 層
（7・8より黒っぽく暗い）
9'. 暗灰色シルト
（9よりやや淡く、黒色・乳灰色シルト細粒少ない、比較的純粋な層）
10. 暗(乳)灰褐色シルト(ピートの土壌化した地層か。9と13の漸移層)
11. 黒褐色シルト　D 層
12. (暗）乳灰色シルト　F 層
（炭含む。にせ地山。黒色・乳灰色・灰色シルト細粒の混合層）
13. 茶褐色腐蝕土　Ga層
（薄い層だが最もピート多く、丸太状の自然木や加工木？もこの層に多い）
14. (淡）茶褐色シルト（ピートが多いが13より少ない）
15. 暗灰色シルト（乳灰色・黒色シルト細粒少量含む。炭含む）
16. 乳灰褐色シルト
（14よりピート少ない。両側は15に近く、ピートさらに少ない。最深部付近のみピート多い）
17. 茶褐色ピート小ブロック混入乳黄色ピートブロック
（16より乳黄・灰色シルト小ブロック多い）
17'. 乳黄色ピートブロック混入茶褐色ピート
18. 茶褐色シルト（乳黄色・茶褐色ピート小ブロック少量含む）
19. 15と同じだが、15よりピート多く20へと漸移的に変化する。15より明るい。
19'. 暗灰色シルト質細砂（19と22との漸移層）
20. 17と同じだが、17より乳黄色ピート多く明るい。
21. 茶褐色・乳灰色シルト多量混入暗灰色中～粗砂　Ⅰ 層
（土器多量に含む。クルミ、木含む。茶褐色・乳灰色シルトは互層状に混入するが、部分的にはブロック状に混合する）
21'. 茶褐色・乳黄色・乳灰色シルト等々ブロック混合土　Ⅰ 層
（21より砂気少ない）
22. 暗灰色中～粗砂　Ⅰ 層
（茶褐色シルト含まないが、木などを含む。土器ほとんど含まないがクルミ多数含む）
23. 暗灰色シルト（15と酷似するが炭含む）
24. 乳著色シルト（ピート多い）　J 層
25. 暗灰色中～粗砂混じり茶褐色シルト
26. 黄褐色シルト（赤褐色酸化粒多い）
27. (オリーブ）灰色細砂質シルト
28. オリーブ灰色シルト質（極）細砂

第８図　断面実測図　（S＝1／60）

程急激に変化したか、もしくは人間による改変活動が著しかったためであろう。

X層は手取川扇状地で一般的に認められるいわゆる「地山」層につながる地層であると推定されるが、ここではかなり粘性が高い。もっとも高い部分では4.3mをはかるが、さらに高い部分が調査区外にある可能性も高い。第12次調査でこの層に連続すると思われる地層の上面の高さは4.2～5mであった。第12次調査では北西方向で高く、東側で低い傾向があり、第13次調査区へむけて低くなっていることがわかる。第13次調査区のさらに東側にある第11次調査区では標高が4.6～5mをはかる。X層上面の高さが、かつての標高であったとすれば、第11次調査区と第12次調査区との間に挟まれた第13次調査区の標高がもっとも低くなる可能性が高い。第39図に示した微地形図には表れないわずかな窪みのなかに第13次調査区が存在し、そこに自然河川が流れていたのであろう。北塚遺跡が立地する島状地形は、このような自然河川をもった複雑な地形であったと推定される。

X層の断ち割りを行ったところ、X層全体は厚く、基本的に砂とシルトの互層であることが明瞭に確認できた。標高2.2m前後の地点で厚さ約15cmの黒色シルトの間層が確認された。自然河川は明らかにこの黒色シルトを断ち切っていた。また、X層の標高3.0～3.6m部分を境にして上部は酸化して黄灰色に、下部は還元して青灰～オリーブ灰色に変化していた。これは現在の地下水の水位や地下水の流路によって変色したためと推定される。地下水のしみだしは調査区の東隅のX層が最も高くなる部分から多く、南部分では少なかった。調査中の地下水の水位はおおよそ2.8mであった（一晩放置してもそれ以上水位が上がることはなかった）。

上記のように、E層とI層と言う唯一「砂」層を含む地層から土器が多量に出土している。人間活動と砂の堆積が何らかの因果関係にあったと推定される。

第3節　自然河川

調査区は自然河川の中央部分から右岸付近にあたるが、調査範囲が8m四方と狭かったため、左岸側を検出することはできなかった。また、右岸付近とは言っても、最も高い部分は調査区外の掘り方断面で確認されるなど、完全に右岸肩部を検出しているわけではない。厳密な右岸は調査区のさらに東側にあると推定される。調査区で検出した右岸側は何段かのテラス状平坦面が不連続に形成されており、平面図で図示した右岸ラインもそうしたテラスの一つにすぎないと推定される。

調査区掘り方東隅断面でX層上面の標高が最も高く、標高4.3mを計る。最も低い部分はボーリング調査で確認した調査区北壁付近の0.9mであった。ボーリング地点が河道の最深部とは限らず、むしろ、土層の堆積状況からは調査区の西隅付近が最深部であったと推定される。そのため川の深さは少なくとも3.4m以上あったと推定される。

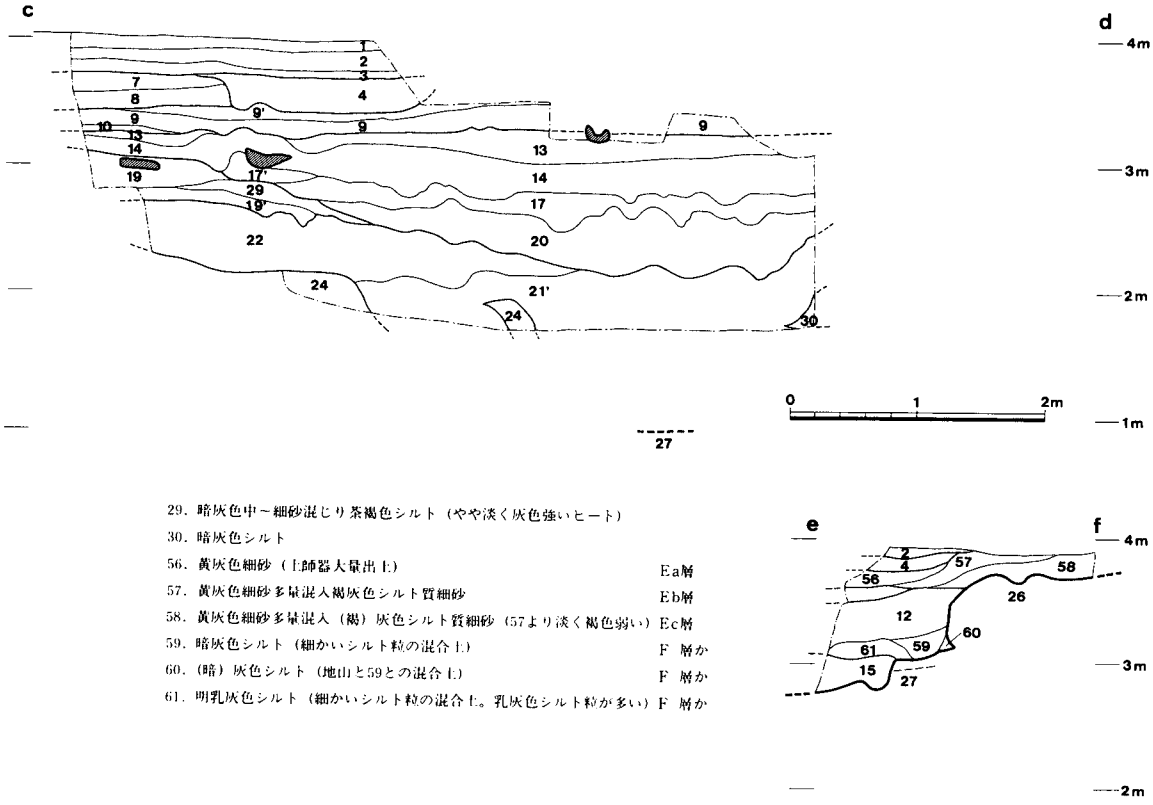
地形の傾斜から流路は磁北方向、もしくは磁北より若干東に傾いた方向であると推定できる。そのため、最深部が調査区の西隅部分であると仮定すると、川幅は約14m程度あったと推定できる。なお、この川は第11次調査や第12次調査区では検出されていない（第6次調査区では検出さ

れていなければならないが、極めて限定的な調査であったため、検出されなかった可能性がある)。そのことと、この自然河川がほぼ北側に流れていることとは矛盾しない。

Ｇａ層から残りのよい「自然木」が出土している（第12図)。「自然木」１は長さ4.5m以上確認された。長さを確認するために調査区を北に２ｍ程拡張したが、それよりもさらに調査区外に延びていた。なお、この拡張はＧａ層のみである。直径は30cm前後で、丸太状ではなく、Ｕ字状の断面形をなしていた。あたかも樋状の木製品のようであったが、加工痕跡が確認できなかった。さらに「自然木」２は最大直径約1.1m程度、長さ2.5m以上と巨大であり、同じく加工痕跡を確認できなかった。この他、Ｉ層～Ｇ層にかけて斜めに突き刺さるようにして検出した丸太状「自然木」もあったが、総じて単なる倒木とするには不自然なように感じられた。

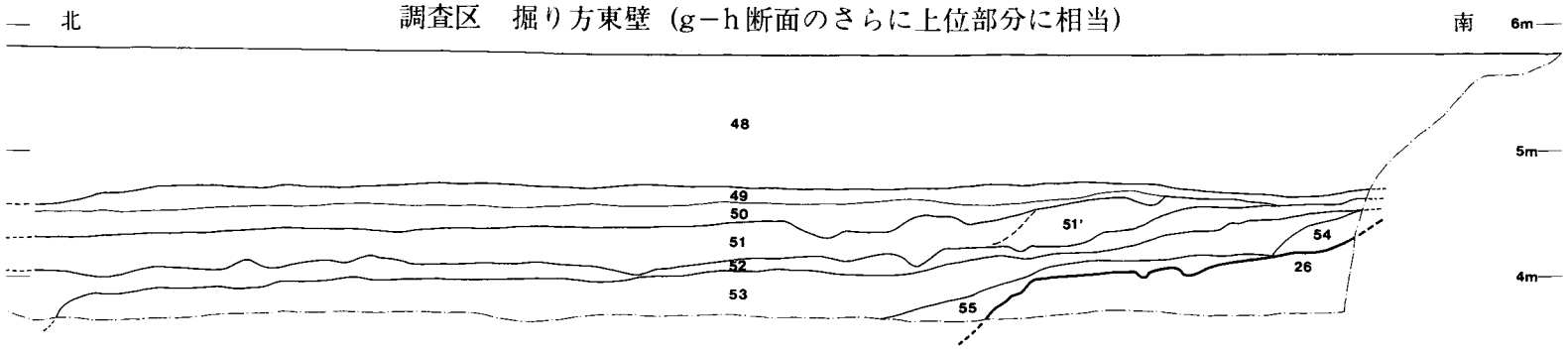
「自然木」２は西側よりも東側が太く、根元に近い部分であると推定されるが、その他に根株や根は確認されなかった。また、直径10cmを越える幹状の部分が大半で、小枝の類も極めて少なかった。脆弱であるため原型のまま取り上げられなかったが、板目材かと推定されるような木も確認されている。そのことから、「自然木」と判断した木のなかには、人間が廃棄したものをかなり含んでいる可能性がある。Ｉ層から容器の未成品が出土したこともそう仮定すれば理解しやすいかも知れない。そうした推察は、第５章第１節の鈴木三男・能城修一両氏の樹種同定結果からも指摘されている。

しかし、発掘調査中は疑問を抱きながらも、これらを材として取扱い、取り上げることをしな

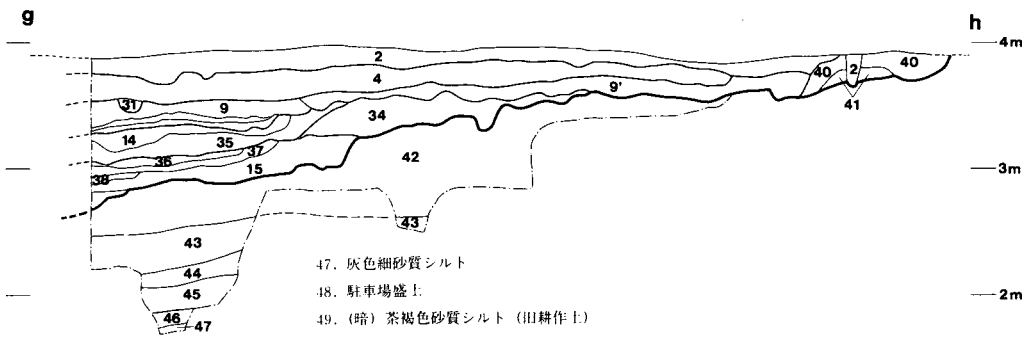


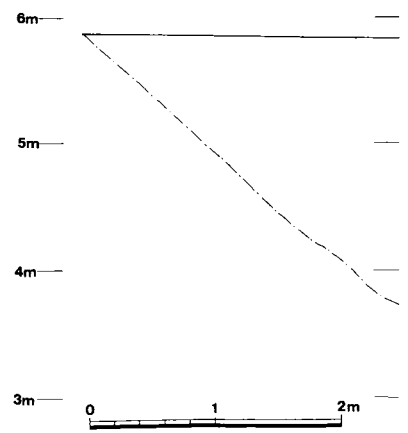
第９図　断　面　実　測　図　（Ｓ＝１／60）

調査区　掘り方東壁（g－h断面のさらに上位部分に相当）



31．乳灰色・黒色シルト小ブロック混じりの暗灰色細砂質シルト
（4に酷似するが、4よりやや暗い）
32．暗灰色シルト
（9に比べ黒色シルト粒がかなり少ない。9より青みかかる）
33．乳灰色シルト小ブロック多量混入茶灰色シルト
（ピートへの漸移層。とくに下面には乳灰色小ブロックが集中して面をなす。Ga層と連続するか）
34．黄灰色細砂多量混入乳灰色細砂質シルト　F 層か
35．黄灰色細砂多量混入淡茶灰色細砂質シルト（34から漸移的に変化）
36．暗乳灰色シルト
37．（暗）乳灰色シルト（36よりやや淡い）
38．暗灰色細砂質シルト
39．（淡）茶灰色細砂質シルト（15と酷似するがピート含む）
40．灰色・黒色シルト小ブロック混じり黄灰色砂質シルト小ブロック層
41．黄灰色砂質シルト少量混じり（暗）灰色シルト
42．オリーブ灰シルト質中～極細砂（中砂・細砂・極細砂が互層状に堆積）
43．茶色がかった灰色シルト（炭・ピート含む）
44．黒色シルト
45．（暗青）灰色細砂（45～46の堆積は基本的にシルトと砂の互層）
46．明オリーブ灰色シルト





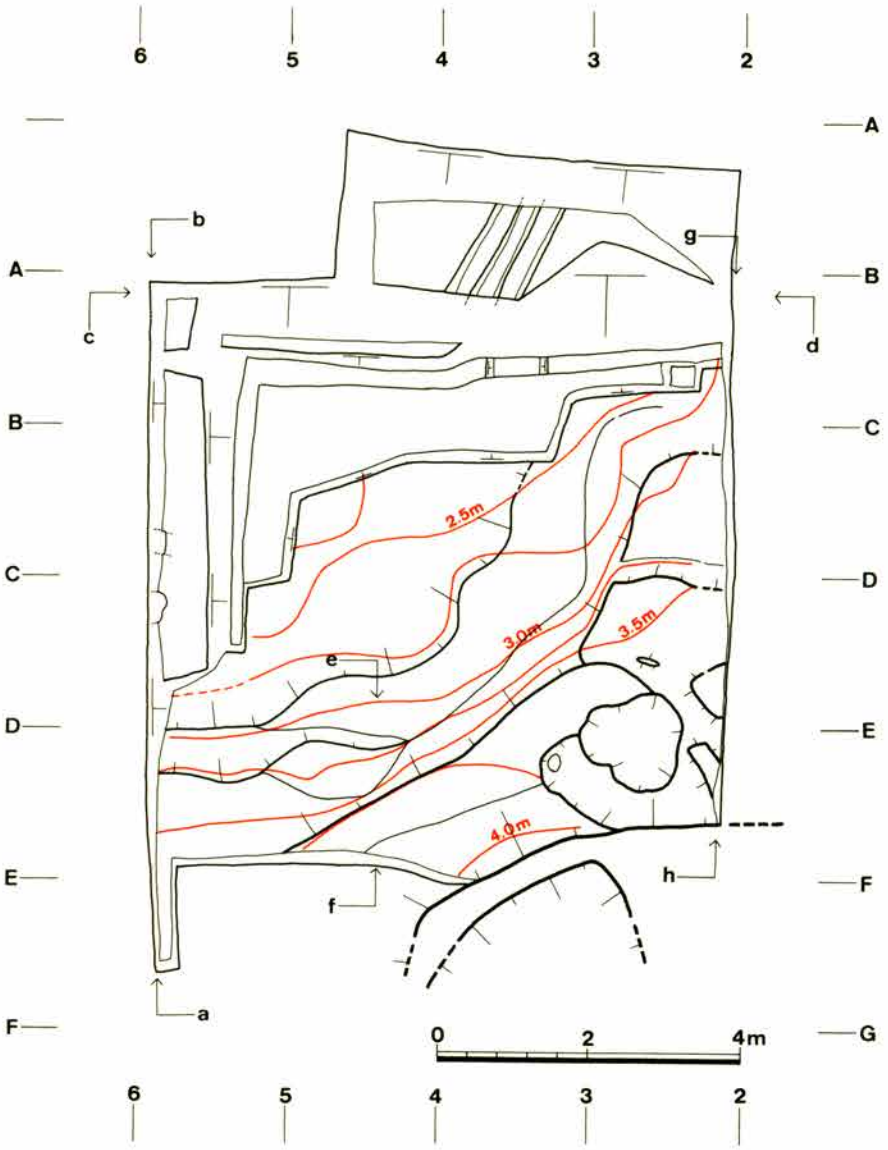
47．灰色細砂質シルト
48．駐車場盛土
49．（暗）茶褐色砂質シルト（旧耕作土）
50．暗茶褐色細砂質シルト（旧耕作土）
51．黄灰色細砂多量混入茶褐色細砂質シルト（炭混じり。旧床土）
51'．茶褐色シルト混り黄灰色細砂（土器・炭多い）　E 層か
52．灰褐色細砂質シルト（土器片含む）
53．茶褐色シルト
54．黄灰色細砂ブロック・暗灰色シルトブロック多量混入茶褐色シルト
55．暗灰色シルト　F 層か

第10図　断　面　実　測　図　（S＝1／60）

かった。古環境の復元のために、通常の自然木として断片をサンプリングしたに過ぎない。

堆積土層はＩ層上部とＥ層に砂が含まれており、この地層の堆積時には比較的早い水の流れを想定できる。しかし、その他の土層は腐蝕土やシルトであり、よどみの多い川であった可能性が高い。とくにＩ層下部やＧ層は厚い腐蝕土層であり、植物遺体が多量に供給されながらも、長い期間よどんだ状態が続いたものと推定される。

Ｉ層を全掘できなかったために、この河道の形成時期を確定できないが、Ｉ層上部の出土土器から少なくとも縄文時代中～後期には存在していたことが分かる。その後、土器の断絶時期はあるものの平安時代末まで確実に河道として存続していた。この川から出土したもっとも新しい時

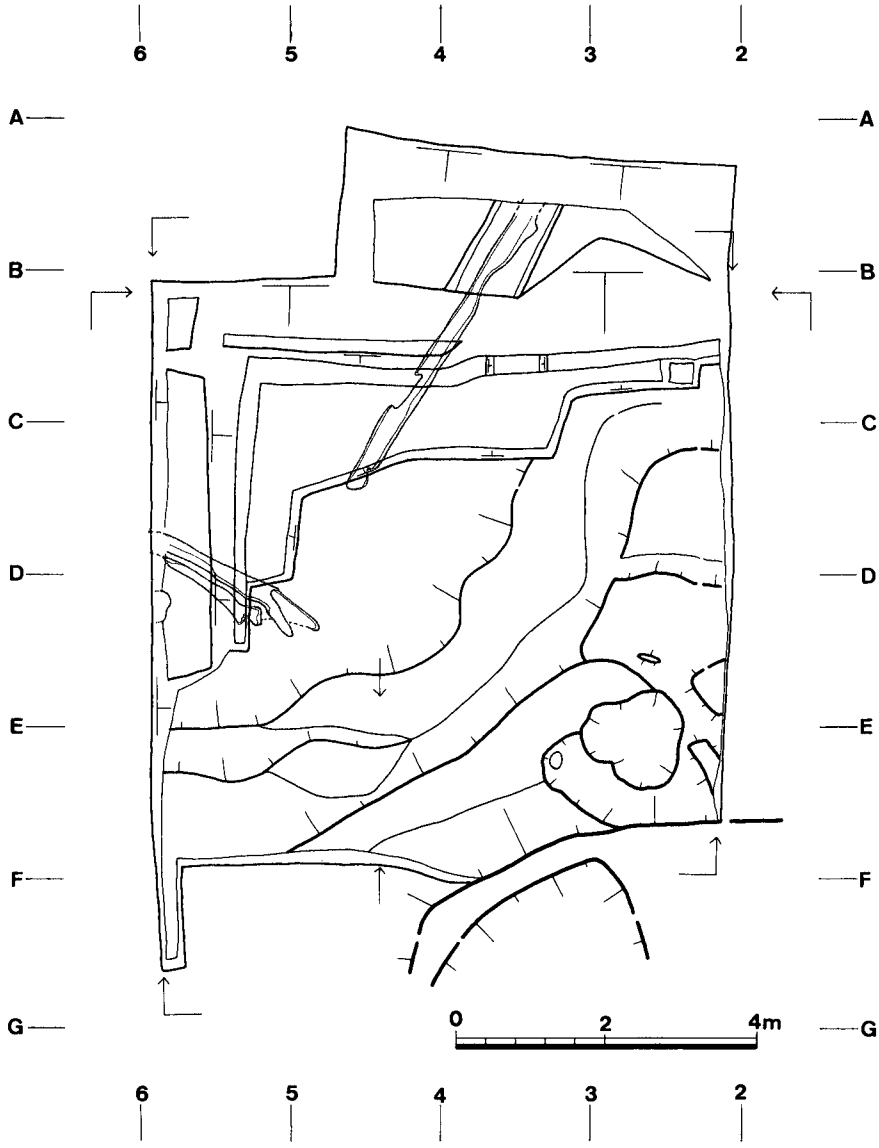


第11図　調査区平面図（Ｓ＝１／100）

期の遺物は近世前期の唐津系陶器の皿であり、B層下面から出土している。A・B層段階ではこの河道は浅い窪みに過ぎず、河道として存続していたかどうか、判断できなかった。河道埋没後の窪みに堆積した土層である可能性も否定できないが、窪みが完全に埋まっているわけではないので、常時水を湛えたかどうかは別として、河道的な段階であったと推定しておきたい。

現在では周辺にこの河道の痕跡は認められず、調査区内から近世前期以降の陶磁器類が確認されていないことから、近世中期以降には平坦化して現在に至ったものと推定される。

第4節　そ　の　他



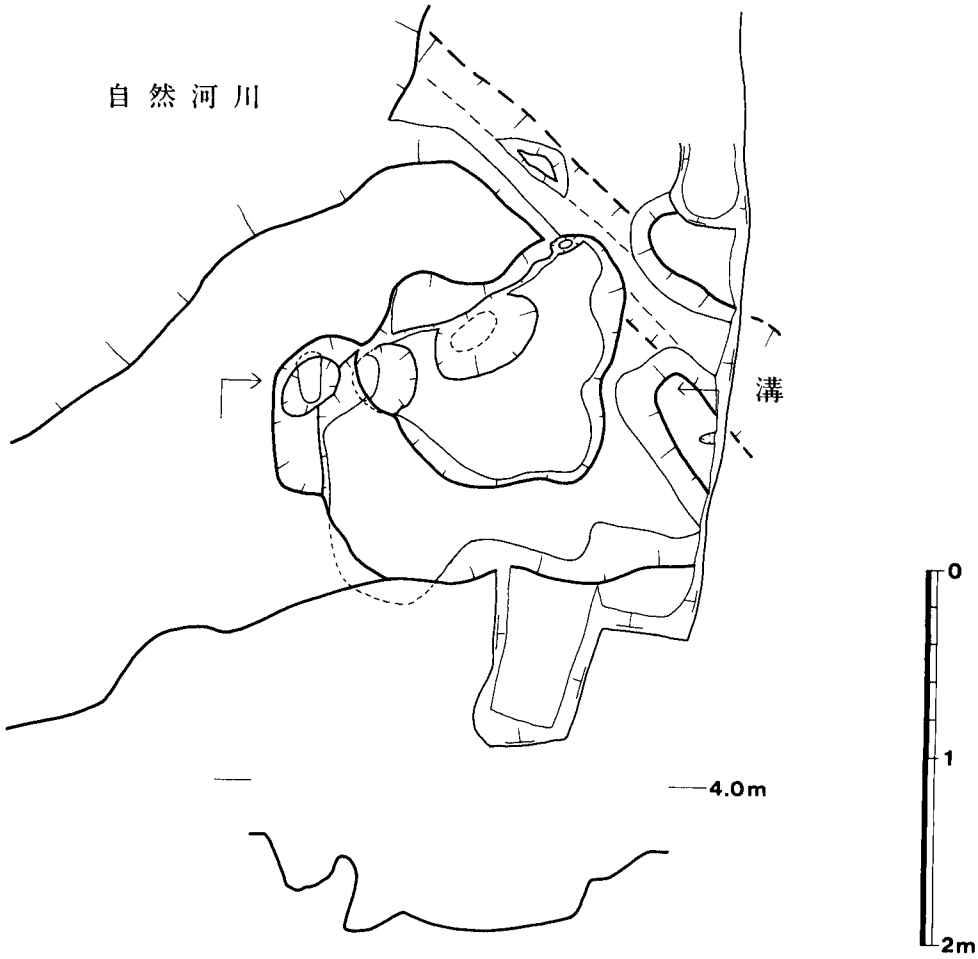
第12図　Ga層　自然木出土状況（S＝1／100）

土坑（第13図）

平安時代末頃の土師器を大量に出土した土坑が右岸付近で検出された。標高3.7～９ｍ付近でもっとも高い部分より低く、時としては水につかるような地点である。また、覆土もＥ層と同じ砂層であり、若干のシルト分を含むとは言え、右岸側から土師器を大量投棄した段階に掘られた土坑であることが分かる。この土坑は２段掘り状になっており、２ｍ×1.6ｍの略長方形の穴の底に、１×1.2ｍ程度の略台形の穴が確認される。おそらく、数度の掘り替えがあり、複数の土坑が切りあっているものと推定されるが、湧き水などのため十分に確認できなかった。深さは二段目の最も深い部分で約50㎝、一段目で約20㎝であった。

溝（第13図）

当初、溝と言う認識がなかったため掘りすぎてしまったが、土坑の北側に接して幅約40㎝、深さ約５㎝の浅い溝状遺構が確認された。ほぼ西向きに流れて自然河川に合流すると推定される。遺構内から出土した遺物の識別や覆土の観察ができなかったため、時期不詳。　（木立　雅朗）



第13図　１号土坑と溝（Ｓ＝１／40）

第4章　遺　　物

北塚遺跡から出土した遺物には、縄文土器から土師器を中心にした人工遺物と、堅果類等の自然遺物がある。今回の調査で出土した遺物はほぼ2時期にまとまりを持つ。第1は縄文中・後期第2は平安後期である。本章では縄文時代の遺物から順次記述を進めることとする。また遺物は可能な限り掲載に努めた。

第1節　縄文時代の出土遺物

1．土　　器(2)

北塚遺跡出土の縄文土器は、北加賀の縄文中・後期を考えるうえで重要な資料であると言えよう。土器数は2140点を数え、口縁片188点、底部片82点を含む。可能な限り復元を試みたが器形が呈示できるものはわずかに1点であり、実測図として呈示した。その他は細破片であるが図化し掲載した。河道跡右岸肩下に埋没していたために土器の遺存状態は良好である。時期幅があるにもかかわらずⅠ層に一括して包含されていた。いわゆる平和台パターン（可児1969）である。(1)本遺跡Ⅰ層出土土器片は、文様構成により右の表にまとめられる。但し第5節と破片数が異なるのは計測時が異なり、計測者も違う為である。

第2表　北塚遺跡縄文土器文様構成表

	文　　様	破 片 数	構成比%	重　　量	構成比%
1	無　　文	842	45	10,606	37
2	縄　　文	509	27	8,274	29
3	条 痕 文	58	3	994	4
4	撚 糸 文	37	2	691	2
5－1	沈 線 文	196	10	3,529	12
5－2	貝殻腹縁文	38	2	710	3
5－3	葉脈状文	29	2	428	1
5－4	磨消縄文	75	4	1,946	7
5－5	刺 突 文	34	2	432	1
6	不　　明	59	3	1,134	4
計		1,877	100	28,744	100

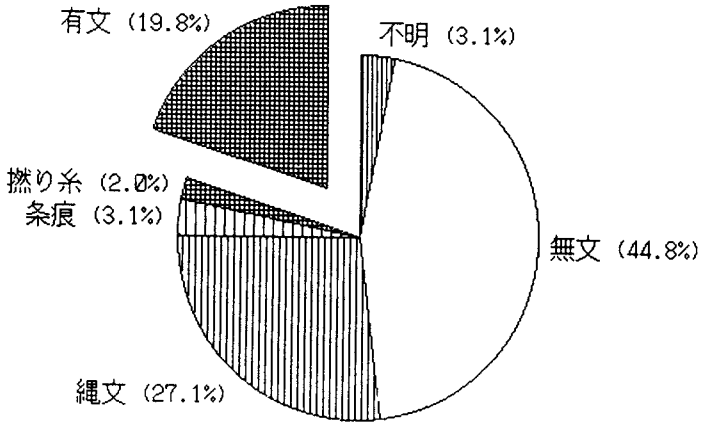
（片数は指頭大以上のものをすべて数えた。）

(1)　分　　類

縄文中期後葉以前を第1群土器　縄文中期後葉を第2群土器　縄文後期前葉を第3群土器と大きくまとめる形で分類した。

(2)　第1群土器（第20図1～8、21）

1，2は撚糸地に竹管による施文をほどこしたもので、特に2は細い竹管により2条の半隆起線で文様を描くもので本調査では最も古い土器である。3は浅いキャリパー形の器形で



第14図　北塚遺跡縄文土器調整構成図

5とともに焦げが内面に付着している。3～8は古府式と思われる。6は深鉢で円筒形の形態と見られる。7、8は笠舞遺跡（南1981）第25図－5等の高台付鉢形土器の縁れ部にあたろう。21は口縁に並走する隆帯上に櫛状刺突を連続して施したもので、半隆起線も並走する。

(3)　第2群土器（第21図～第23図）

形　　態

深鉢A：外傾する口辺に立ち上がり口縁部をもつもの

深鉢B：ややふくらむ胴部にゆるく外反する口縁のもの

深鉢C：ゆるく膨らんだ胴部が頚部でくびれ口縁が丸く内弯するもの

浅鉢A：口縁がくの字にたちあがるもの

浅鉢B：口縁が丸く内弯するもの

その他

文　　様

1類：口縁部辺に隆帯を配し、主として貝殻腹縁文を施文する土器

2類：口縁部辺に沈線を配し、主として貝殻腹縁文を施文する土器

3類：口縁部辺に隆帯を配し、刺突文葉脈状文を有する土器

4類：口縁部辺に沈線を配し、刺突文葉脈状文を施文する土器

5類：口縁部辺に沈線による区画文を施文する土器

深鉢A－1（14、16、17）　立ち上がり口縁のものに、口辺部に2条の隆帯を持つもの。

深鉢B－1（19、26）　外反する口縁部は波状を呈する。1条の隆帯上に貝殻腹縁文が施文される。

深鉢B－2（31、40）　沈線による区画文の上、下に貝殻の連続圧痕を充塡している。

深鉢C－3（47）　厚手の波状口縁辺に口縁にそって沈線を施し正円形の刺突文を施文する。

深鉢C－4（48、49、50）　隆帯の上下辺に連続して正円形の刺突文を施すもの。

26、37、49は、双頭波頂である。47～63は全て右近次郎遺跡（工藤他1985）第12～14群　大杉谷系統とおもわれる。

浅鉢A－2（39）　口縁が立ち上がり、沈線区画内に貝殻の連続圧痕を充塡している。

浅鉢A－5（203）　くの字に内屈する口縁部に、区画文を施文するもの。

浅鉢B（147、149）　口縁が丸く内弯し、把手がつくもの。

串田新式土器の群である。

(4) 第３群土器（第20図～第25図）

形　態

深鉢Ａ：ややふくらむ胴部にゆるく外反する口縁のもの

深鉢Ｂ：ゆるく膨らんだ胴部が頚部でくびれ口縁が丸く内弯するもの

浅鉢Ａ：口縁がくの字にたちあがるもの

浅鉢Ｂ：口縁が丸く内弯するもの

その他

文　様

１類：口縁部辺に幅広の平行沈線、Ｓ字状沈線等を施文する土器

２類：口縁部辺に幅広の平行沈線等を施文し、三角列点等を持つ土器

３類：刺突文及び沈線による幾何学文を施文する土器

４類：口縁部辺に沈線を配し、区画内外に縄文を充塡する土器

深鉢Ａ－１（18、65、67、75、77、79、81、84）　外反する平縁口縁に平行沈線を引き、Ｓ字状沈線・縦位短線や刺突による列点を施したもの。何れも本遺跡の土器の中で最良の焼成の群の一つである。83、92は残部処理として波状沈線を施してはいるが焼成・器厚等からこの類に属するとおもわれる。これらは前田式土器である。

深鉢Ａ－２（64、70、72、74、78、82、85）　ややふくらむ胴部にゆるく外反する口縁のもの。70、82は沈線と三角形の押し引き圧痕を持つ沈線が、並走する。72は平行沈線間に三角列点をもつものである。本遺跡縄文土器中ただひとつ器形が呈示できる85は、口縁部辺に幅広の沈線と三角形の押し引き圧痕を持つ沈線が２条平行に引かれ、区画内に蛇行沈線を施文する。胴部にはＬの無節縄文が充塡され、頚部に引かれた３条の沈線のうち、中央の沈線が三角形の押し引き圧痕を持つ。口縁器厚は７㎜をはかる。これらも深鉢Ａ－１ともども本遺跡最良の焼成で薄手の群である。

深鉢Ｂ－３（88～91、93～99、102）　ゆるく膨らんだ胴部が頚部でくびれ、口縁が丸く内弯するもの。立ち上がりの短い波状口縁部に波状沈線を施したものと（88～91、93～99）三角形連続刺突文（102）をもつものがある。

深鉢Ｂ－４（106～151）　ゆるく膨らんだ胴部が頚部でくびれ口縁が内弯するもので、波状口縁のものが多く見受けられる。所謂磨消し縄文であり、中津・称名寺式系統である。胎土に混入する砂粒が一番粗く多い類（123、132、134、136、138、144、145）は砂粒の最大径５㎜を測る。節も３、４㎜と大きめが多い。胎土に細砂粒（１㎜以下）のみ混入の113、114、124はＲＬ単節斜縄文を充塡しており、１㎜前後の細い節が見られる。

浅鉢Ｂ－３（148、205）　口縁が丸く内弯する浅鉢である。148は刺突文をもつ。

152、153、土器は深鉢Ｂ－４時期のものと思われるボタン状の貼付を持つ口縁である。

(5) 粗製土器（第25図～第26図）

不明のものも入れると、出土土器のほぼ80％が粗製土器である。観察表を、無文より以下

に載せた。

① 無文の土器片842個（全体の45%）のうち次のものを、図版に掲載した。

第3表　無文土器観察表

挿図番号	層　　位	観　　察
156	B－4区　I層	平縁口縁深鉢、口径約15cm、器厚7mm外面煤付着
157	C－4区　I層	平縁口縁深鉢、器厚4mm外面コゲ付着
158	B－5区　I層	波状口縁深鉢、口径約17cm、内外面とも煤付着
159	B－5区　I層	外傾する平縁口縁深鉢、口径約17cm、器厚8mm
160	B－4区　I層	外傾する平縁口縁深鉢、口径約23cm、器厚7mm
161	B－5区　I層	平縁口縁深鉢、口縁辺粘土張り付け痕煤痕残
162	C－4区　I層	内弯する平縁口縁深鉢、内外面とも煤付着
163	C－4区　I層	外傾する頚部片、器厚7～10mm、外面煤付着
164	C－4区　I層	波状口縁深鉢、口縁辺2条の曲隆起線、最大厚19mm
165	B－5区　I層	細波状口縁、器厚7mm
166	B－5区　I層	細波状口縁深鉢、器厚9mm、外面煤付着
167	B－5区　I層	細波状口縁深鉢か、器厚7mm
168	B－4区　I層	細波状口縁深鉢、内面コゲ外面煤付着
169	B－5区　I層	内弯する波状口縁深鉢か、内外面とも磨き調整
170	B－4区　I層	内弯する波状口縁深鉢か、口縁辺半隆起線あり
171	CB－5区　タチワリI層	雑な作り指頭圧痕口縁として図化したが底部か
172	C－5区　I層	波状口縁、口縁辺半隆起線あり、内外面磨き調整
173	CB－5区　タチワリI層	内弯する口縁、内外面磨き調整、外面煤付着
180	C－4区　I層	胴部片、外面煤付着、器厚9mm、条痕か
181	B－3区　I層	胴部片、外面煤付着、器厚9mm

② 縄文施文の土器片509片（縄文土器全体の27%）のうち縄文の種類は次の7種であり、次のものを図版に掲載した。掲載の破片数に比例した構成比率をとり、横位RL縄文、斜位RL縄文で50%以上を占める。

第4表　粗製縄文土器観察表

	縄文の種類	挿図番号	観　　察
1	横位RL縄文	174～178	174のみ口縁平縁深鉢、175節6mm大、176コゲ付
2	斜位RL縄文	182～187	184底部近胴部片内面煤付着、185沈線上縄文
3	横位LR縄文	188、189	188胎土粗砂径5mm混、189細砂海綿骨片含
4	無節縄文	179	胴部片、器厚8mm、海綿骨片含
5	結節縄文	192	胴部片、器厚9mm、粗砂径5mm混、節細約1mm
6	羽状縄文	191	外面煤付着、粗砂径5mm混
7	縄文	190	RLRか

③　撚糸文（193～197、199）

193は内弯する深鉢口径約22cm器厚口縁片４mm最大器厚９mm、194は円筒形平縁深鉢口径約22cm195は撚糸の端部圧痕残る。196・197は沈線併存。

④　条痕文（198、200～202）

198口縁端部は指による刻みあり外反する口縁か、200櫛状具による条痕か。

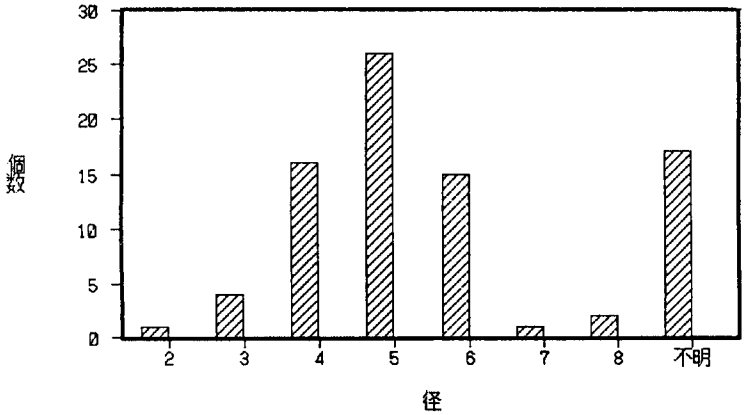
⑤　不　明（206～212、214、219）

器形、文様、時期何れも不明のものをここに載せた。206はくの字口縁を持つ浅鉢で円弧文をもつ流入か？207は小型壷形土器であり、口径約５cm、半同心円弧文３条をもち刺突文を充塡する。214は内外面ともに半隆起弧線文をもち、磨き調整である。219は黒漆塗り土器であり、２条の半隆起弧線文を外面にもつ、同心円状の弧線文か。

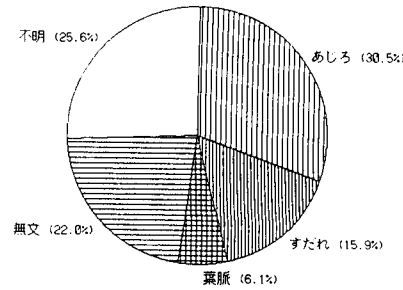
(6)　底　　部（第25図～第27図）

北塚13次調査で出土した底部は細片もふくめて、82片を数えた。完形がなく圧痕の資料としても底部に残存する様々の痕跡をひろいあつめるかたちで整理した。

底径は２～８cmのなかでまとまり、大型のものが見出せなかった。廃棄の際に細片に破壊したためかもしれない。（第26図）にあるように半径４～６cmのものが大半を占める。



第15図　底部径分布図



第16図　底部圧痕構成図

底部の約52％が圧痕を残し、無文、不明のなかにも整形を施しているものが見受けられる。網代、スダレ（もじり編み）、葉脈、無文と分け構成比を次に上げる。（第17図参照）網代のうち、越え、潜り、ずれ（送り）が観察（確認）できたものは、次の３種にとどまった。

a．１越え、１潜り、１送り

b．１越え、２潜り、１送り（第27図231）

c．２越え、２潜り、１送り（第26図226、228）

底部形態は、大凡つぎの６類に大別することができる。

A類：底面よりほぼまっすぐに外側に開くか少し丸みをもって外側に開く形態。

B類：底面よりまっすぐに立ち上がりそのあと外側に開く形態。

C類：底面より内傾して立ち上がりそのあと外側に開く形態。

D　類　　底面よりほぼまっすぐに立ち上がるが立ち上がりが緩やかに立ち上がる形態。

E　類　　底面が平底でなく丸みをもっている形態。

特　殊　　高台（脚付）、鼓形脚台部、中浅鉢縁れ部等

第5表　胴部文様構成表

胴部文様	個　数	%
条　痕	9	11
沈　線	2	2
縄　文	30	37
無　文	29	36
撚り糸	2	2
不　明	10	12
計	82	100

第6表　底部形態構成表

底部形態	個　数	%
A	33(凹6)	40
B	11(凹1)	13
C	3	4
D	1	1
E	1	1
特　殊	7	9
不　明	26	32
計	82	100

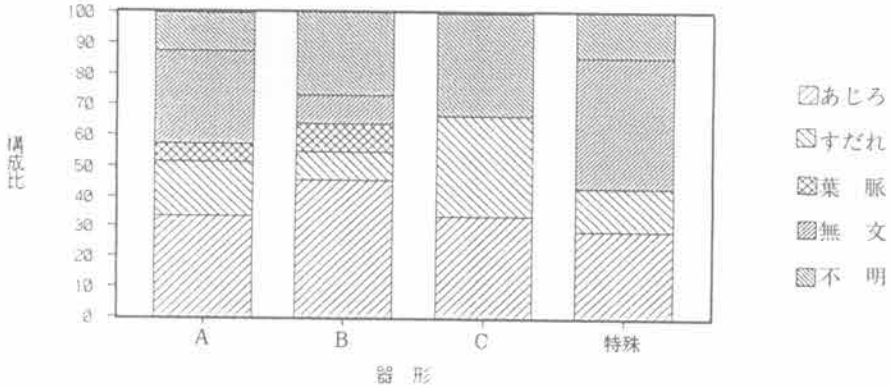
第7表　底径・断面形態別構成表

底径＼形態	A		B		C		D		E		特殊台	不明	合計(個)
	平	凹	平	凹	平	凹	平	凹	平	凹			
2 ～ 2.9			1										1
3 ～ 3.9	1	1	1		1								4
4 ～ 4.9	7	2	3									4	16
5 ～ 5.9	12		4	1	1		1		1		2	4	26
6 ～ 6.9	6	1	1		1						1	5	15
7 ～ 7.9		1											1
8 ～ 8.9												2	2
不　明	1	1										11	17
小　計	27	6	10	1	3							26	
合　計	33		11		3		1		1		7	26	82
%	40		13		4		1		1		9	32	100

第8表　底径・胴部形態別構成表

底径＼形態	縄文	無文	条痕	撚り糸	沈線	不明	合計
2 ～ 2.9							1
3 ～ 3.9		3	1			1	4
4 ～ 4.9	5	7	1	1			16
5 ～ 5.9	11	10	3	1		2	26
6 ～ 6.9	8	3	3		1		15
7 ～ 7.9	1						1
8 ～ 8.9	1		1				2
不　明	4	6			1	6	17
合　計	30	29	9	2	2	10	82
%	37	36	11	2	2	12	100

（底径はcm単位）



第17図　底部圧痕と形態の相関図

第9表　底部観察表

番号	径	胴	断面	圧痕	挿図番号	番号	径	胴	断面	圧痕	挿図番号
1	4	無文	平B	その他		42	4	不明	不明	あじろ	
2	4	無文	平B	あじろ		43	3	無文	凹A	その他	
3	6	条痕	平A	無文		44	5	無文	平F	不明	
4	7	縄文	凹A	あじろ		45	4	条痕	平A	無文	
5	4	無文	平A	葉脈		46	6	無文	不明	葉脈	
6	不明	不明	不明	不明		47	不明	縄文	不明	不明	
7	4	無文	平A	不明		48	6	縄文	不明	あじろ	
8	2	不明	平B	不明		49	不明	不明	不明	あじろ	
9	5	無文	平A	無文		50	5	撚り糸	平A	すだれ	
10	5	条痕	不明	無文		51	5	無文	平D	無文	
11	4	縄文	平A	不明		52	4	縄文	不明	無文	
12	6	無文	平A	あじろ		53	不明	縄文	平A	無文	
13	6	条痕	平A	無文		54	不明	無文	不明	不明	
14	3	無文	平B	葉脈	230	55	不明	無文	不明	不明	
15	5	無文	平A	あじろ		56	不明	沈線	不明	不明	
16	5	縄文	平A	あじろ		57	5	縄文	平A	すだれ	225
17	不明	無文	不明	不明		58	不明	不明	不明	すだれ	224
18	6	縄文	平B	あじろ		59	8	条痕	不明	葉脈	234
19	6	無文	凹A	すだれ		60	3	無文	平C	あじろ	228
20	5	縄文	平C	不明		61	4	無文	平A	あじろ	226
21	不明	不明	不明	無文		62	5	無文	平B	あじろ	227
22	4	無文	平A	無文		63	不明	縄文	特殊	すだれ	213
23	5	縄文	平B	すだれ		64	4	無文	凹A	あじろ	236
24	不明	無文	不明	不明		65	6	縄文	平C	すだれ	222
25	4	不明	不明	不明		66	6	縄文	平A	無文	221
26	5	無文	平A	すだれ	220	67	6	不明	不明	あじろ	216
27	5	縄文	不明	すだれ		68	6	沈線	特殊	あじろ	235
28	4	撚り糸	凹A	不明		69	5	縄文	平A	あじろ	233
29	4	縄文	平B	あじろ	231	70	4	縄文	平A	あじろ	223
30	5	不明	不明	あじろ		71	5	縄文	不明	すだれ	218
31	5	条痕	平A	無文		72	不明	条痕	特殊	無文	7
32	5	縄文	平B	あじろ		73	不明	無文	特殊	無文	217
33	6	縄文	平A	すだれ		74	5	無文	特殊	あじろ	237
34	5	条痕	平A	無文		75	5	縄文	平A	あじろ	
35	5	無文	平A	葉脈	232	76	不明	縄文	不明	不明	
36	3	条痕	平A	あじろ		77	6	縄文	不明	不明	
37	5	縄文	凹B	無文		78	5	縄文	平A	あじろ	
38	6	縄文	平A	すだれ		79	不明	無文	凹A	無文	
39	6	縄文	不明	すだれ		80	8	縄文	不明	不明	
40	4	縄文	不明	あじろ		81	5	無文	特殊	不明	215
41	5	無文	平B	不明		82	不明	不明	特殊	無文	8

2．石　　器(3)

本調査では、B、C、F層3、4、5、区より石鏃、石錘、剝片石器、打製石斧の4種の石器が出土している。

(1) 石　　鏃（第29図1）　縦の長さが横の長さの2倍以上あり、平面形は五角形を呈している。凹部であるがクリ込みは極端ではない。側縁が直線で構成され僅かに内側に弯曲しており角を持つ。先端の角度はほぼ75°で鋭角感はない。緩い稜を持つ菱形の断面を呈する。内外面共に入念な押圧剝離調整が施されている。（2）も縦の長さが横の長さの2倍以上ある二等辺三角形を呈しているが基部に欠失がある。側縁が緩い弧状を呈している。先端は、鋭角で45°あり、縦断面はほぼ平行な2辺に近い上下面をもつ近6角形である。平基部に近い点、F層からの出土であること、2g内外を逸脱している(1)等弥生の石鏃か。石質は両者とも珪質頁岩である。

(2) 石　　錘（第29図8）　打ち欠き石錘である。（8）は河原石の転用であり土器の遺存状況などから比べると、表面がかなり磨耗している感があるのは使用頻度が高いためか、単に。流を下ってきたためか。石質は流紋岩。

(3) 打製石斧（第29図6）　礫面を一面有している短冊形石斧か。（7）は刃部残か片面に自然面を残し側縁の調整打痕で形状を整えている。バチ形石斧の半欠か。本遺跡出土の石器の中で一番風化の著しい流紋岩質のものである。

(4) 剝片石器（第29図3、4）　2次加工を施した剝片2点を図化した。（4）は鉄分による酸化のみられる一面の自然面を持ち剝離加工の痕跡が少ない未製品、図化下部よりの打撃により剝離をし側面に少し剝離調整を施している。（3）は刃部に欠失がある調整不良品もしくは磨耗品不整形な剝片を素材としている。何れも、この地方に産出する、珪質頁岩。

図化した他には石器の出土を見なかったが見過ごしが多々あると思われる。

第10表　石器一覧

番　号	出　土　層　位	遺存状態	石　質	最大長	最大厚	最大幅	重　量
1	E－3　pit－2	完　　形	珪質頁岩	3.1	0.46	1.45	1.8
2	E－4　F層	一部欠	珪質頁岩	3.95	0.67	1.69	4.0
3	C－5　Ca層	一部欠	珪質頁岩	2.65	0.56	2.35	2.9
4	C－5　B層	完　　形	珪質頁岩	6.38	1.3	2.08	16.1
5	D－3　B層	一部欠	流紋岩	6.4	2.1	7.65	94.8
6	Pit－1　b層	残　　欠	流紋岩	5.4	1.7	5.75	80.26
7	B－4　B(C)層	残　　欠	流紋岩	12.2	13.0	3.5	585.1
8	B－4　B層	完　　形	流紋岩	8.59	2.28	5.79	136.1

（単位は、cmとgである。）

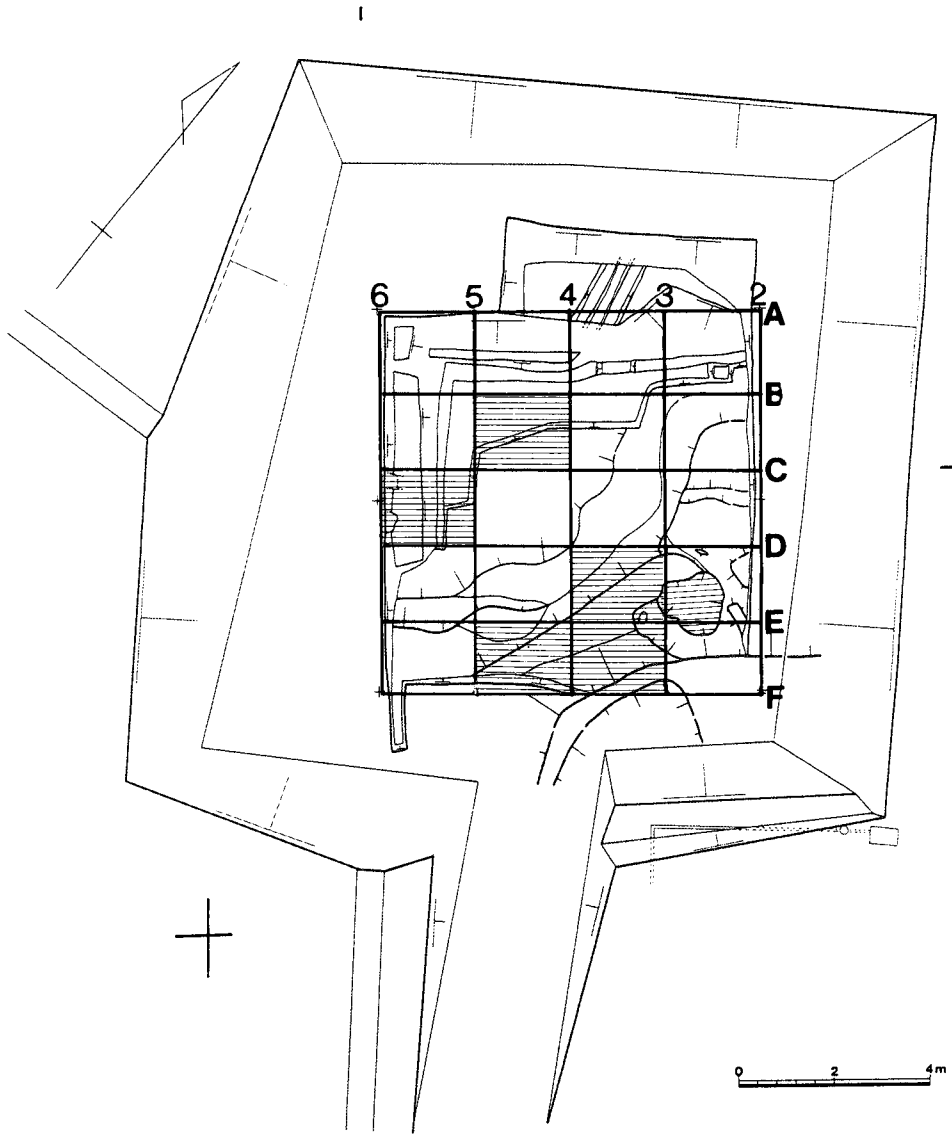
3．木　製　品(5)

縄文時代の木製品の出土は、以下の図に示した通りである。尚、樹種は鈴木三男氏・西尾典

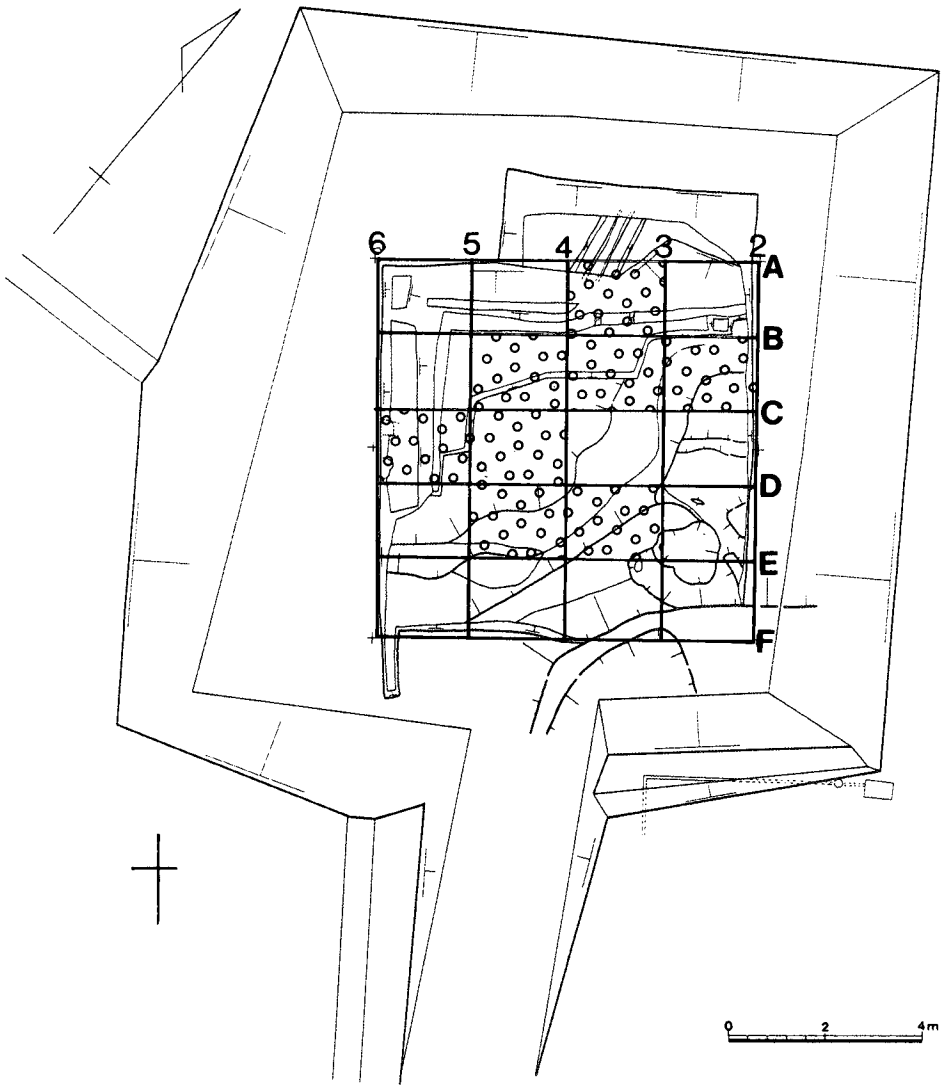
子氏・能城修一氏の同定による（第５章第１節）。樹種同定のサンプルは、加工度により３ランク（未製品、棒等加工木、自然木状のもの）に分け自然木状のものは、形状が偏らないように任意に抽出した。自然木状のものは大量に出土したため、切片のサンプリングにとどめた。

未製品の木製容器は鉢（大型の椀）状容器と類推され本遺跡唯一の木製の加工品である。自然河道Ｃ－５区、Ｉ層より出土しており、他の材の出土も多くが河道Ｂ－２～５，Ｃ－４・５区に当てはまるのと一致している。自然木が根材を全く含まず、小枝がなくほとんど幹直径が10センチを越えることから（前述第５章第１節）自然河道では在るが人為的性格を持つ貯木場的もので在ったと思われる。

未製品の木製容器の樹種は鈴木三男氏の同定によりケヤキ材であることが判明している。(4)



第18図　石製品出土状況図



第19図　木製品出土状況図

同一個体とみられる２片に割れた木器は、直径22cm高さ11cm厚さ４cmを測る。白木クリモノのである。横木造りの木口特に小片を観察すると内外面の調整痕が幾つかみられる。内面５～６箇所みられる刃部の最大のものは、幅約3.5cmをはかり外面の調整幅と一致がみられる。内面調整の際木面にほぼ垂直に刃を打込んだと思われる痕跡も観察される。その際過分の力が加えられ仕損じがおこり２片以上に断裂したと考えられる。底部とおぼしき破片は、出土しなかった。

内面に比して、外面の調整がすすみほぼ調整完了とみられる。石斧の調整後磨きがかけられている。単に軽石等によるものか、福井県鳥浜貝塚（1981）で丸木舟、石斧の柄、オールなどにみられたように焦がした部分を削り磨きとって行くものか断言できない。加工具の磨製石斧が供搬しなかったことが惜しまれる。

（沢田まさ子）

［註］

(1) 可児1969。遺跡において、竪穴住居跡以外の特定の場所から土器が纏まって出土する例を便宜的に一括したもの。（中略）小さな破片を含めて、ある限られた範囲から極めて大量に出土ししかも土を殆ど混えないで土器だけで層を形成するがごとき観を呈するものである。

(2) 土器については、南　久和氏、西野秀和氏、本田秀生氏、久田正弘氏、宮田　明氏の御教示を得た。また、底部圧痕については、川端敦子氏の御教示を得た。

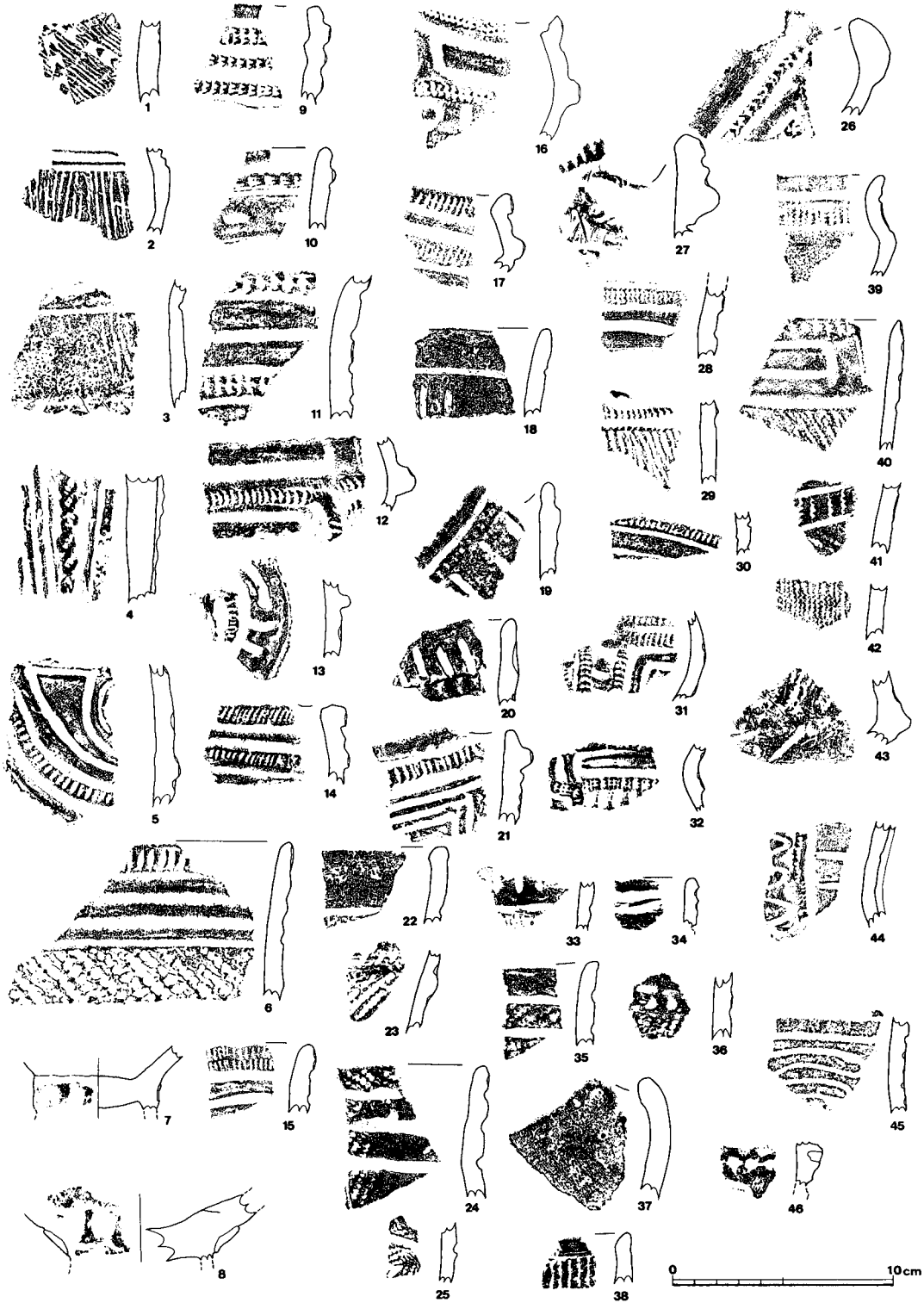
(3) 石質については、小島和夫氏、石器については、本田秀生氏の御教示を得た。

(4) 木器については、山田昌久氏の御教示を得た。

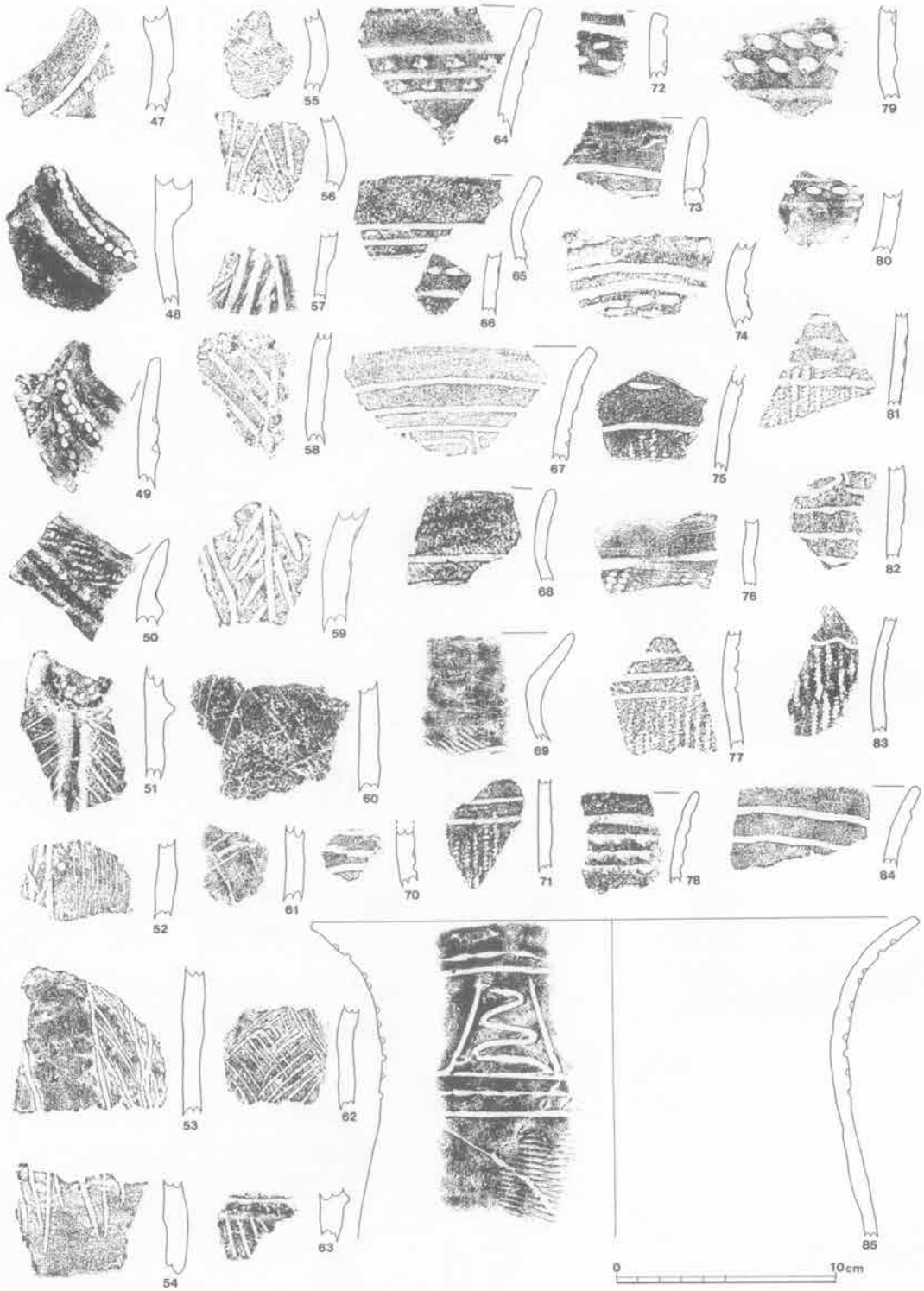
諸氏の御教示を得ながら、本文にいかせなかったことをここにおわびしたい。

［参考文献］

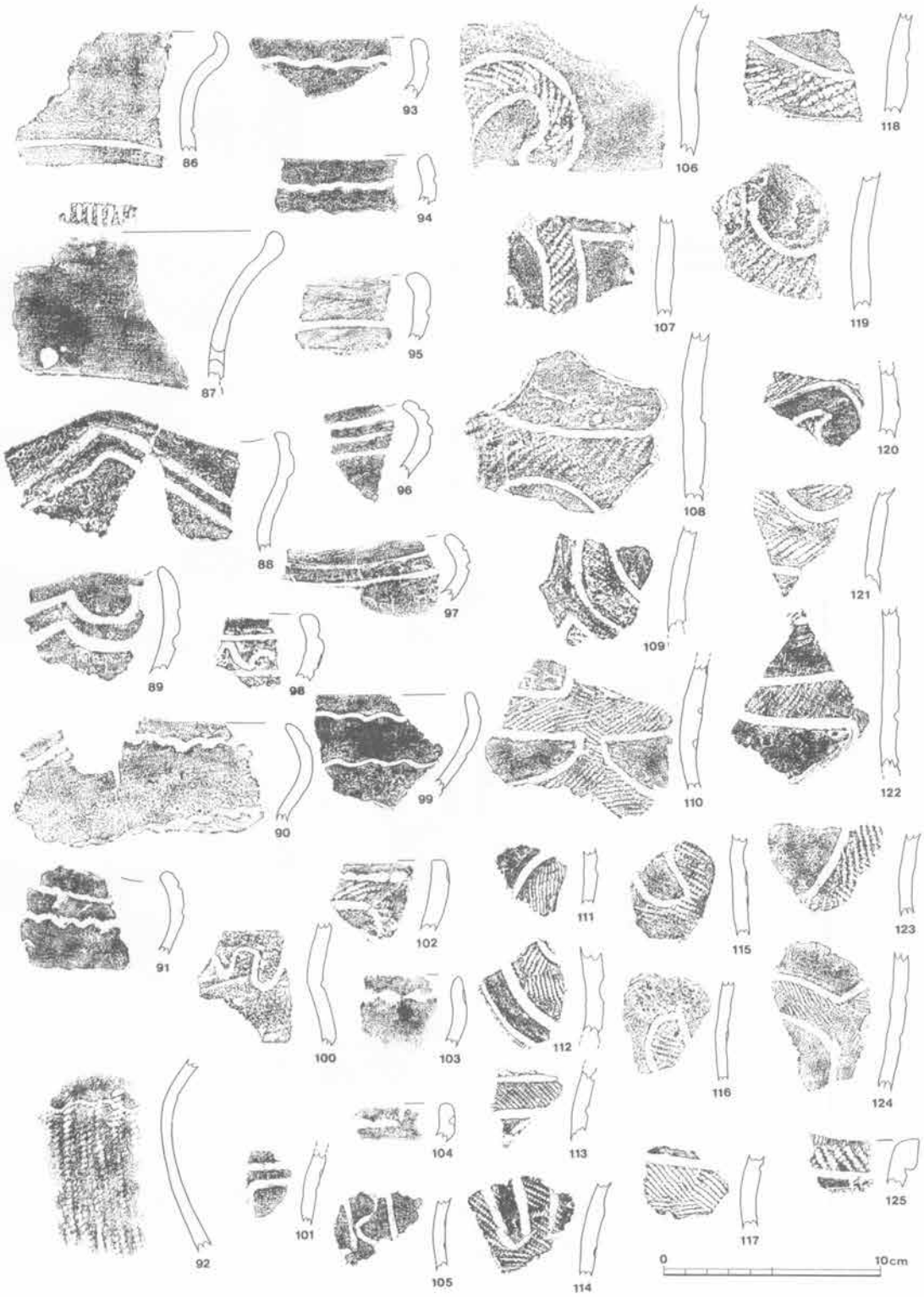
石川県教育委員会　1970　『古府遺跡』
石川県教育委員会　1979　『金沢市笠舞Ａ遺跡調査報告』
石川県立埋蔵文化財センター　1985　『北塚遺跡群』
石川県立埋蔵文化財センター　1985　『門前町道下元町遺跡』
石川県立埋蔵文化財センター　1989　『金沢市米泉遺跡』
石川県立埋蔵文化財センター　1987　『金沢市笠舞Ａ遺跡』
宇ノ気町教育委員会　1979　『上山田貝塚』
金沢市教育委員会　1977　『金沢市北塚遺跡』
金沢市教育委員会　1981　『金沢市笠舞遺跡』
金沢市教育委員会　1985　『金沢市東市瀬遺跡』
金沢市教育委員会　1977　『金沢市北塚遺跡』
富山県福野町教育委員会　1990　『安居五百歩遺跡Ⅰ』
七尾市教育委員会　1977　『赤浦遺跡』
奈良国立文化財研究所　1993　『能登縄文資料』山内清男考古資料６
能都町教育委員会　1991　『真脇遺跡』
野々市町教育委員会　1983　『御経塚遺跡』
福井県教育委員会　1981　『鳥浜貝塚』
川端敦子　1983　「底部圧痕に関する基礎的報告」『北陸の考古学』
小島俊彰　1974　「北陸の縄文時代中期の編年」『大鏡５号』
　　1983　「串田新Ⅰ式、Ⅱ式は逆転するか」『北陸の考古学』
小林達雄　1974　「縄文世界における土器の廃棄について」『国史学』第93号
佐原　真　1982　「世界のなかの縄文土器」『縄文土器大成』５巻　講談社
南　久和　1983　「北陸の縄文時代中期後葉の編年観について」『北陸の考古学』
米沢義光　1983　「羽咋郡志賀町火打谷大垣内遺跡出土土器再見」『北陸の考古学』
　　1989　「気屋式土器様式」『縄文土器大観』４　小学館
藤本　強（編）　1983　「縄文文化の研究」７　道具と技術　雄山閣
西野秀和・橋本澄夫・平　哲夫・谷内尾普司
　　1979　「石川県の黎明－原始」『石川県の歴史と風土新　加能風土記』
山田昌久　1993　「日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成－用材から見た人間・植物関係史」植生史研究　特別１号



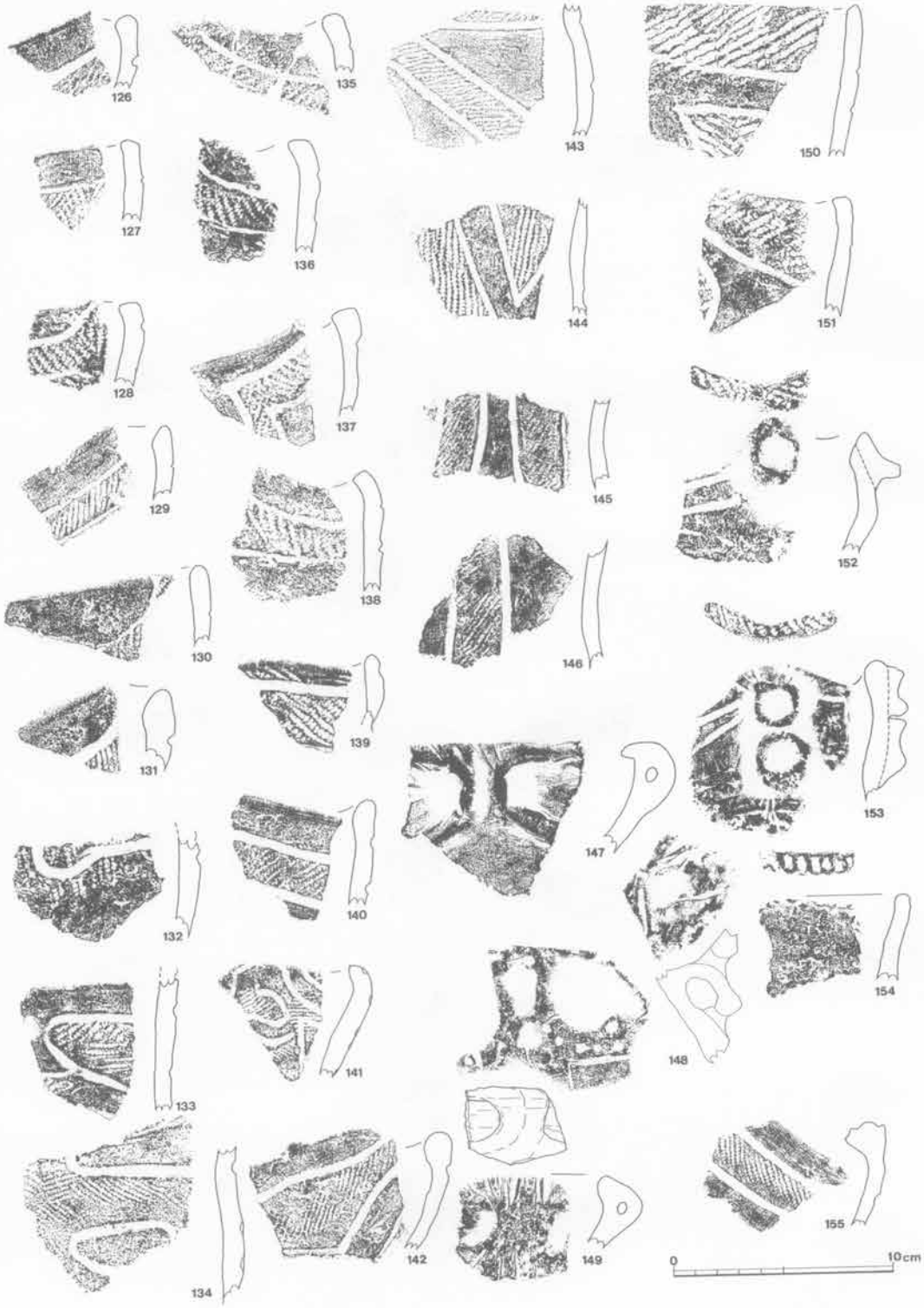
第20図　縄文土器　（1～46）



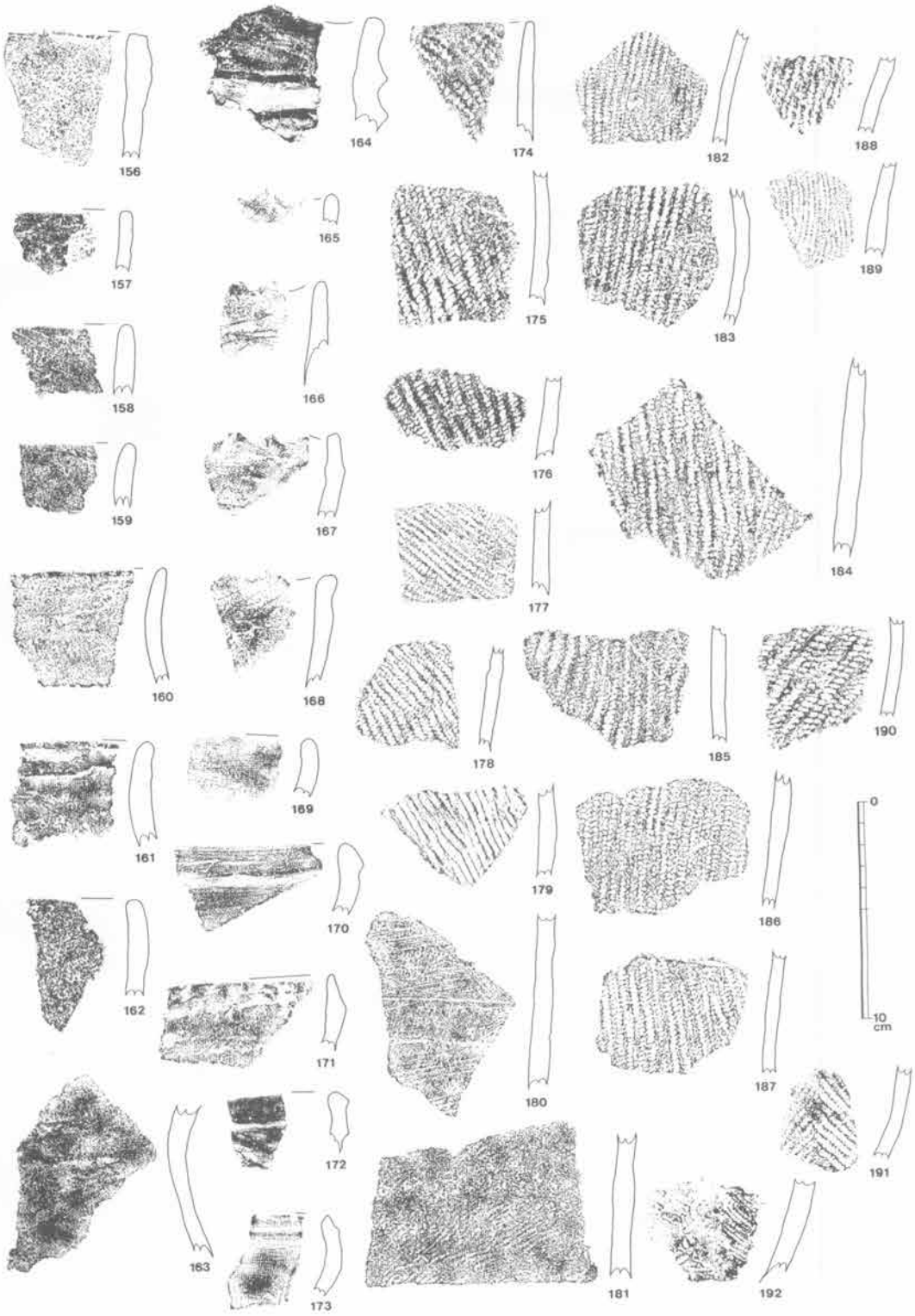
第21図　縄文土器　(47～85)



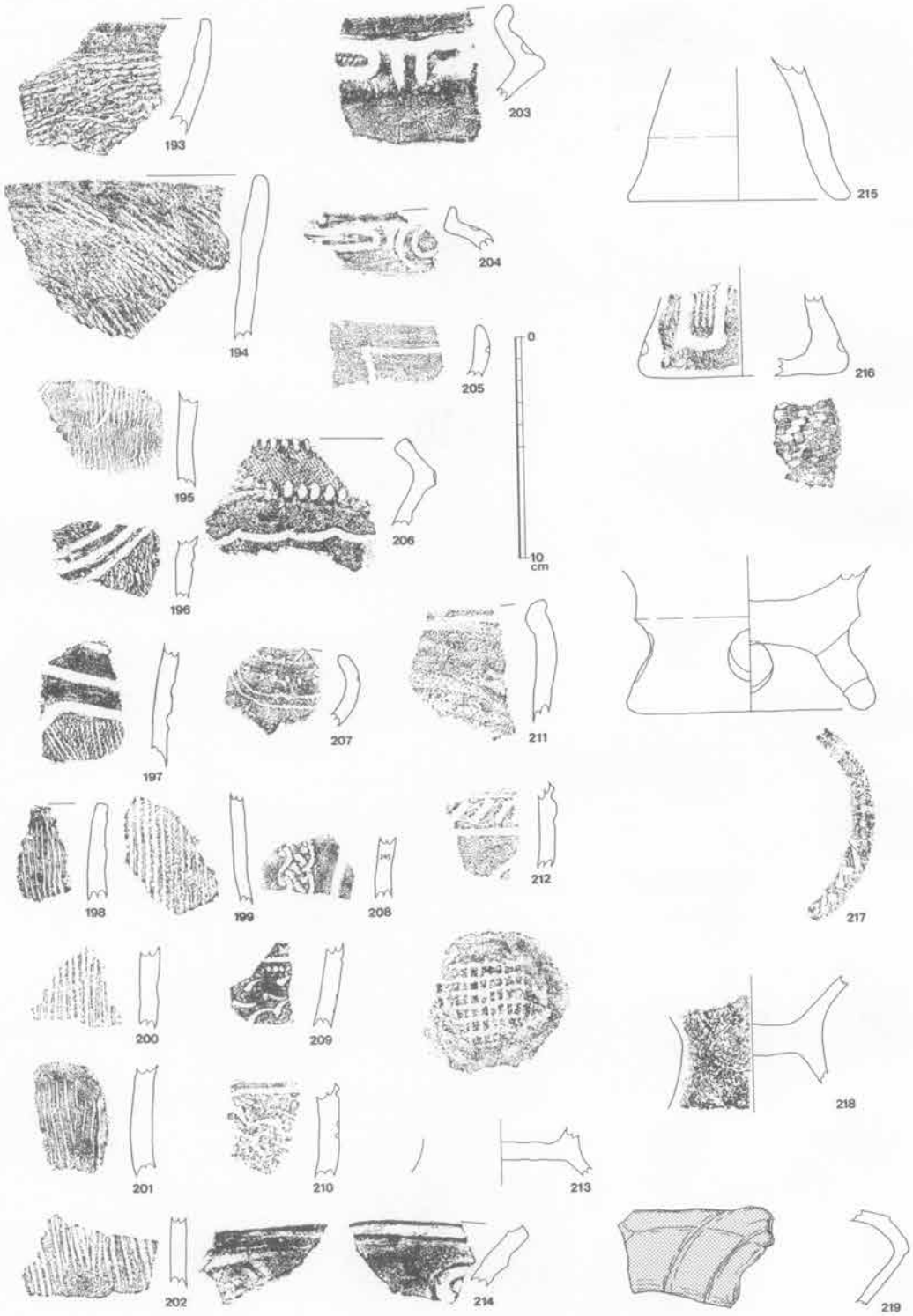
第22図　縄文土器　(86～125)



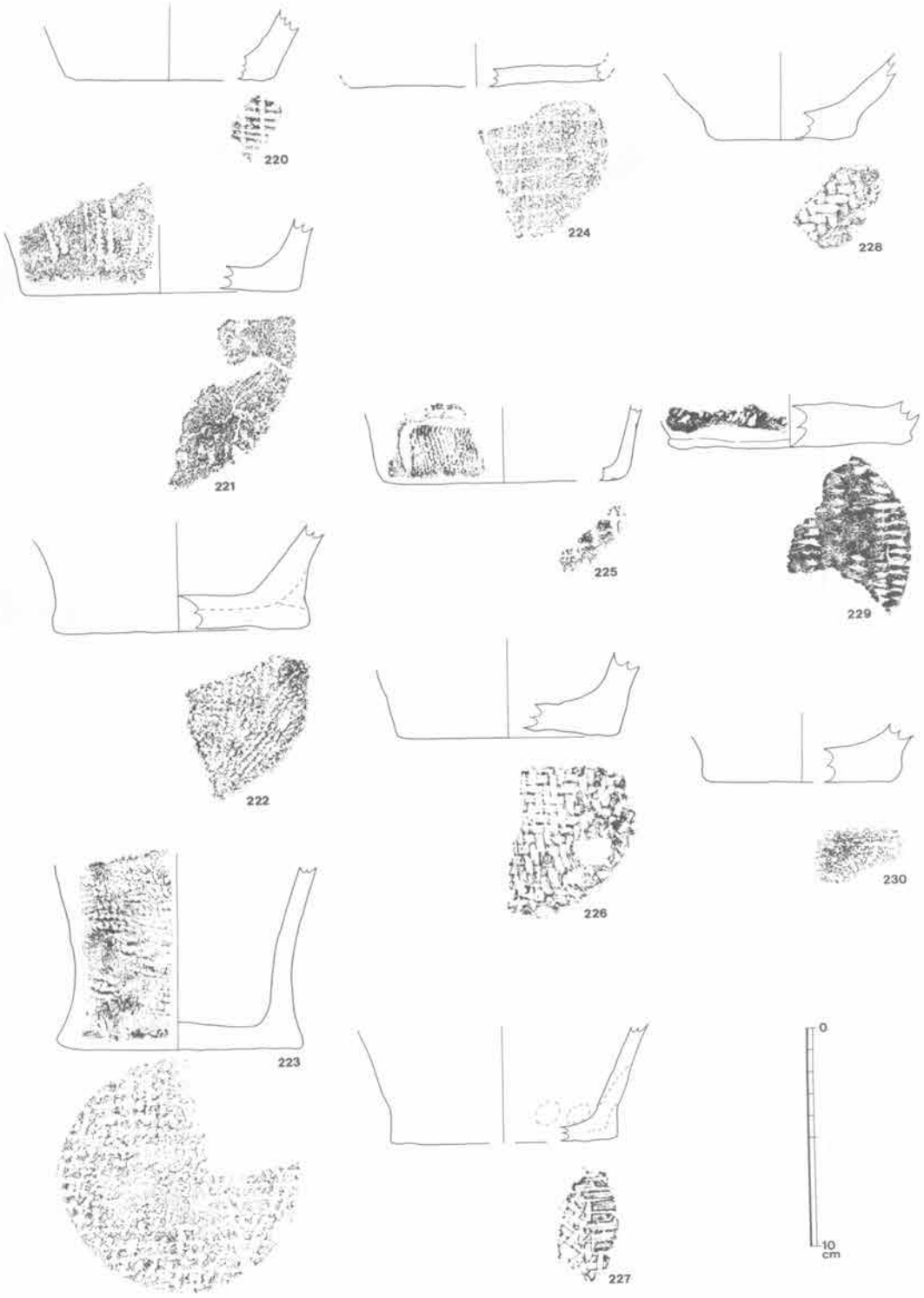
第23図　縄文土器　(126～155)



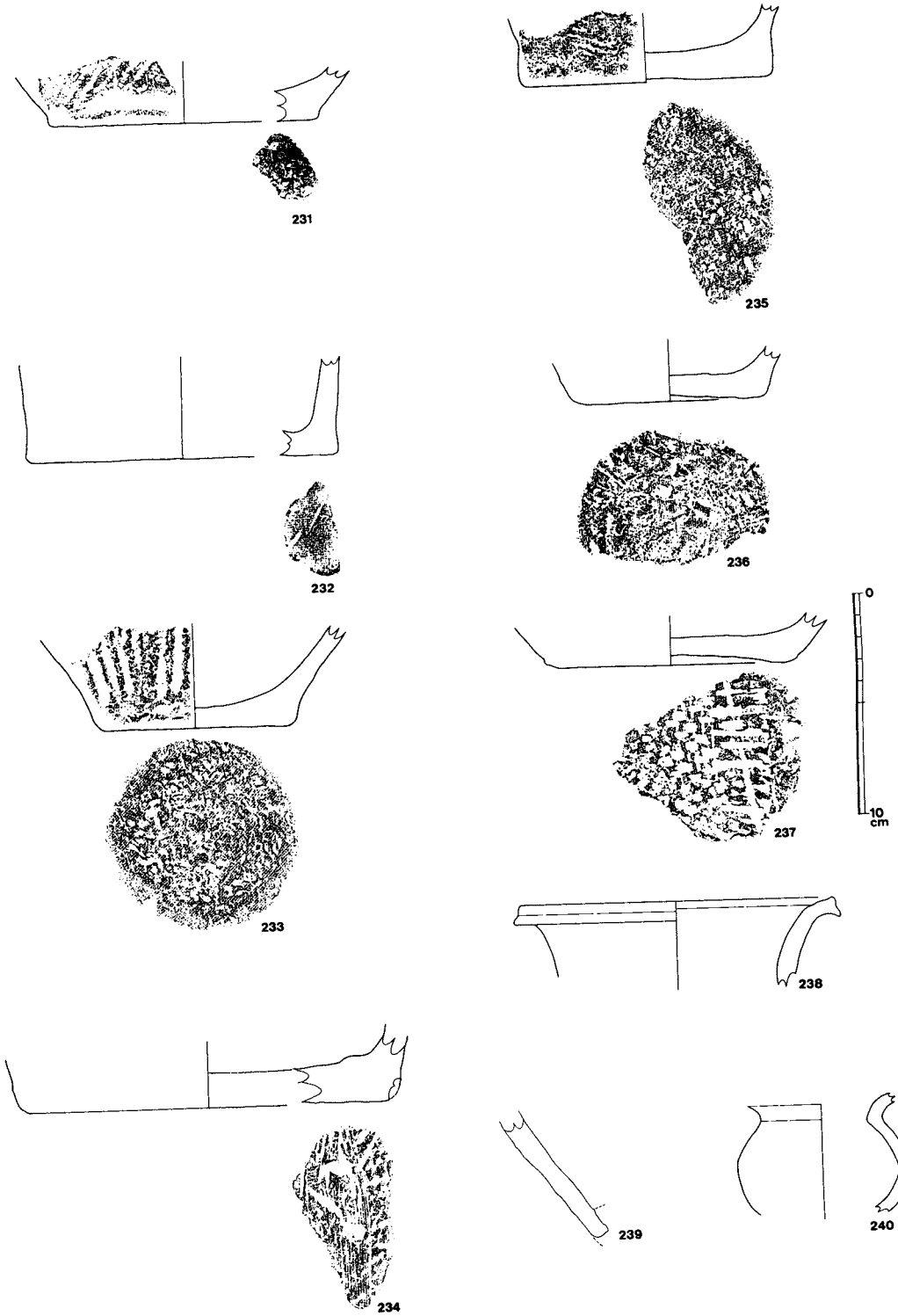
第24図　縄文土器　(156～192)



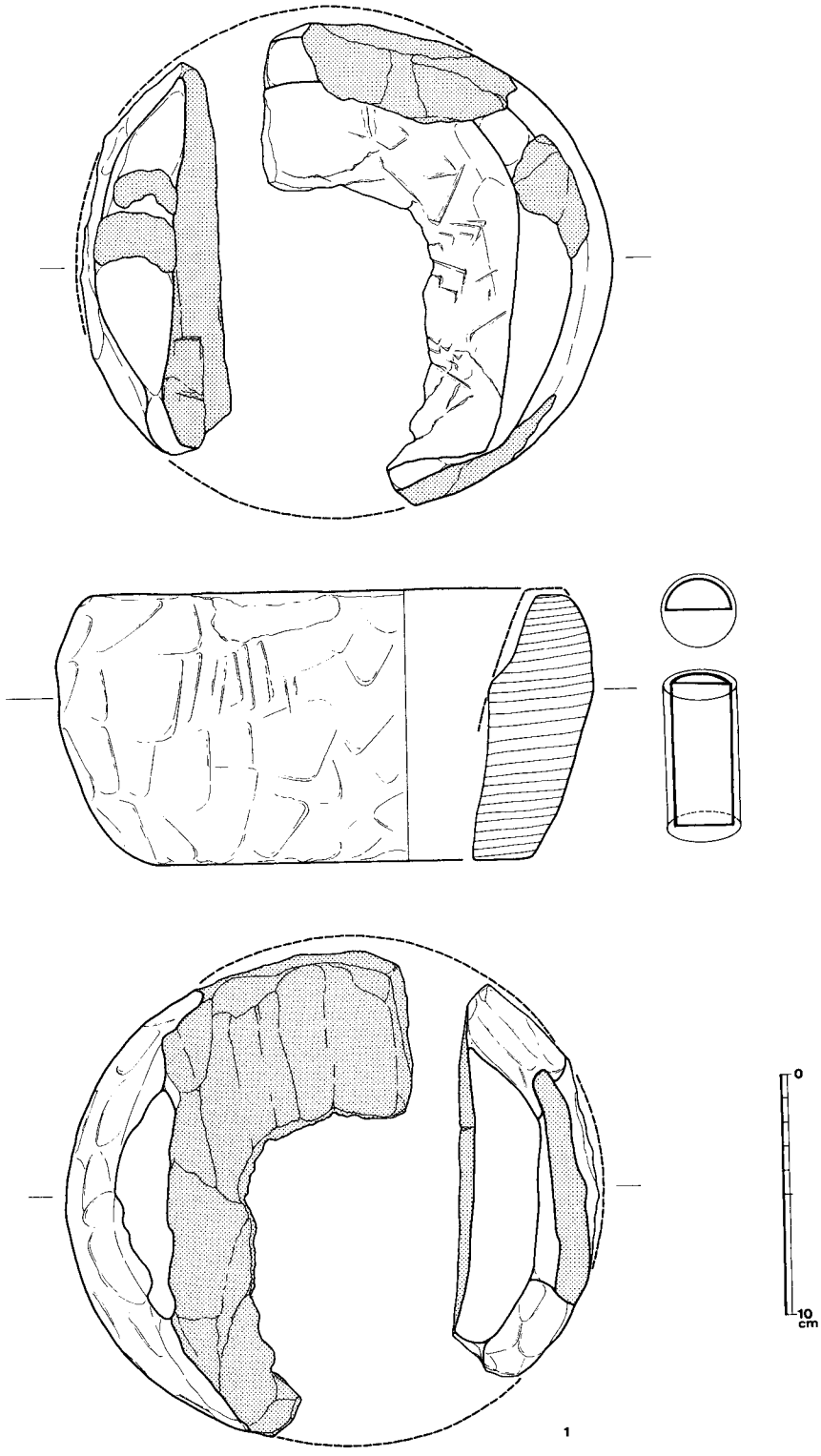
第25図　縄文土器　(193～219)



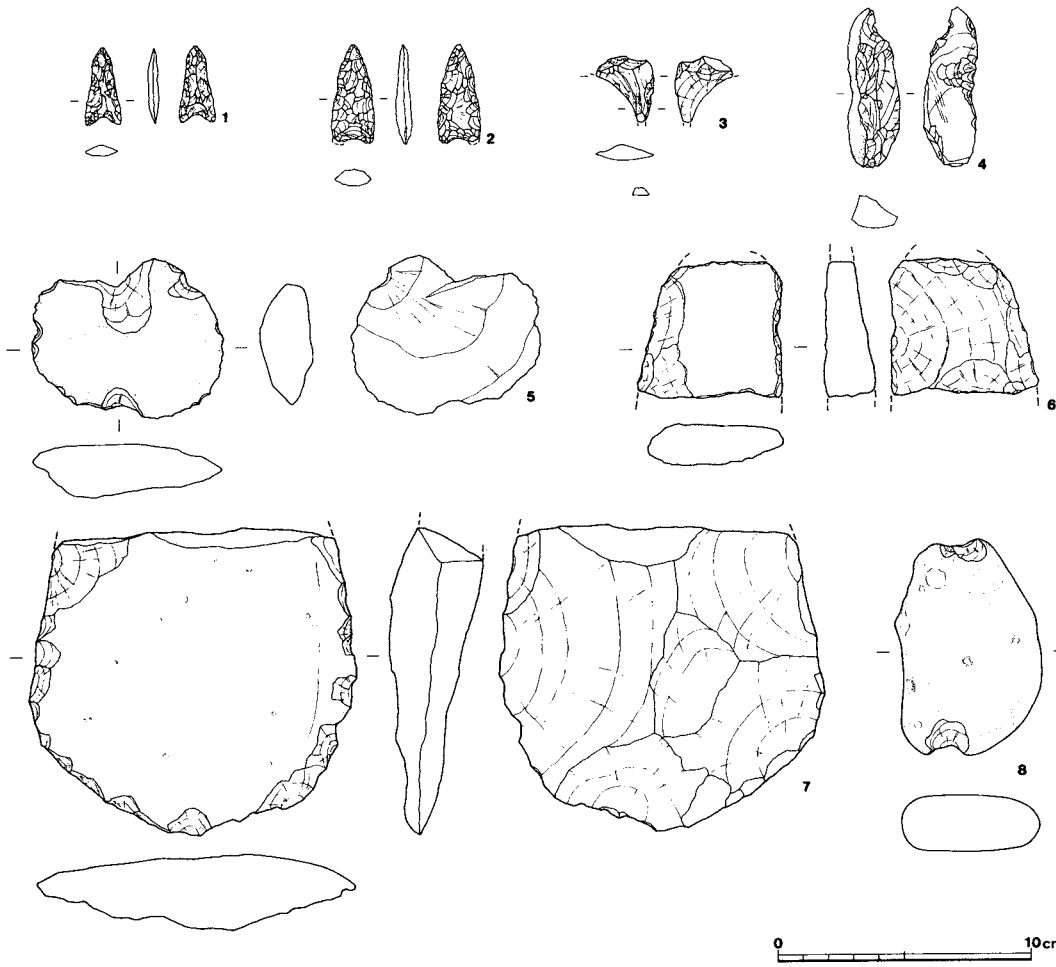
第26図　縄文土器(220～230)



第27図　縄文土器(231～237)弥生土器(238～240)



第28図　木　　器　（1）



第29図　石　　器　（1～8）

第2節　弥生・古墳時代の出土遺物

当該期の土器は、総破片数202片にのぼる。そのうちF～H層出土遺物は量的に少なく6片にすぎず小破片が大半を占める。そのうち図化可能なものは、第28図（238～240）であり、総てD層からの出土である。238は、口縁に面を造り下端を若干垂下させている。口縁径約7.1センチを測るカメか壷の口縁部と思われる。外面はハケ・ヨコナデ、内面はヨコナデが施されているが一部に不整ナデ調整もなされている。239は、器台型土器か高杯の脚裾か。段状の屈曲部を粘土を張り付けることにより作りだし、それがはがれた痕跡を示す。脚内外面は、ミガキが加えられているが内面下位が丁寧なナデ、上位はナデていると思われるが器面に凹凸がみられる。240は、小型壷形土器と思われる。内外面ともに、ミガキ調整を施す。3個体中一番焼きが甘く、風化・摩滅が進んでいる。いずれも、破片であり時期については慎重をきさなければならないが、239は弥生後期後半、238は弥生後期～古墳前期、240は古墳前期後半と思われる。　（沢田まさ子）

［註］
弥生・古墳時代の土器については安英樹氏の御教示を得た。

第３節　古代～近世の遺物

遺物（古代～近世）のうちで全形の復原可能なものは全て実測図として記載した。

１．古代前半の遺物（第30図）

今回の調査で須恵器片が31点出土した。その内で５点をここに掲載する。１号土坑内ピット２から出土した241の色調は外面灰白色、内面青灰色で、５世紀後半代の甕の胴部片と思われる。Ｂ層から出土した242の色調は外面内面ともに青灰色で、５世紀後半代の瑠の口縁部片と思われる。Ａ層から出土した243の色調は外面緑灰色、内面青灰色で、高松押水窯跡群産の大甕口縁部片と思われる。Ｂ層から出土した244の色調は外面緑灰色、内面青灰色である。内面同心円当て具には、柾目状の木目がみられる。内外面ともに多少磨耗しているが、８世紀後半以降の高松押水窯跡群産の甕胴部片と思われる。１号土坑内のＥｂ層から出土した245の色調は外面内面ともに灰白色で、焼成が甘い須恵器の鉢の口縁部片と思われる。[1]

２．古代後半の遺物（第31～34図）

今回の調査で古代後半の土師器（無台椀、有台皿、小皿、黒色土器有台椀と思われるもの）、灰釉陶器片、白磁片が出土した。図化した土師器はＡ～Ｂ層、Ｅａ～Ｅｃ層、１号土坑からそれぞれ出土している。遺物数が多かった層と遺構はＥａ～Ｅｃ層と１号土坑である。

〈土　師　器〉

土師器の内で器形が分かるものでは小皿、無台椀、有台皿があるが、以下のように分類した。全形が不明な破片については、胎土、調整等から判断して該当すると思われるところに含めた。

(1)　器形による分類

小　　皿

ａ類：口径に対して身が深めのもで、体部は内湾ぎみでない。(246～251)

ｂ類：口径に対して身が浅めのもので、体部はやや内湾ぎみで立ち上がる。(252～262)

ｃ類：口径に対して身が浅めのもので、体部は大きく外反する。(263～264)

ｄ類：底部が柱状高台様のもの（265～271）

無 台 椀

ａ類：口径に対して身が深めのもので、体部は内湾ぎみに立ち上がる。(272～280)

ｂ類：口径に対して身が浅めのもので、体部は直線的に立ち上がる。(281～294)

有 台 皿

ａ類：体部が直線的に立ち上がる。(295～298)

ｂ類：体部が内湾ぎみに立ち上がる。(299～301)

胎土による分類（図版10）

ａ類：１㎜～２㎜程度の砂粒を含み、色調は灰白・明黄褐色系が多く、胎土はこの４分類のなかでは最もしまっている。

b類：a類の様な砂粒を含まず、d類にみられるような鉱物をほとんど含まないもので、色調は浅黄色系が多く、胎土はd類についでしまっている。

c類：a類の様な砂粒を含まず、かつd類にみられるような鉱物もほとんど含まないが、赤色酸化粒が認められ、色調は灰白・浅黄橙色系が多く、胎土はこの4分類のなかでは最ももろい。

d類：a類の様な砂粒を含まず、黒光りする輝石か角閃石のような鉱物を多く含み、色調は褐灰・浅黄色系が多く、胎土はa類についでしまっている。

口縁端部による分類

Ⅰ類：口縁部が先細り気味に伸び、端部を丸めるもの。

Ⅱ類：口縁部が先細り気味でなく伸び、端部を丸めるもの。

小皿a類（246～251）

246～251は胎土がc類である。

246～248は色調が同じで浅黄色である。内外面ともにロクロナデ調整であるが、体部外面中央部をロクロナデ調整時に強く押さえてくびれをもたせたように思われる。口縁端部はⅠ類になると思われる。以上のことから246～248は産地、時期とも同一のものであると考えられる。

249～251は色調が浅黄橙色系である。249～250は内外面ともに磨耗が著しく内外面の調整は不明である。251の内面調整は磨耗のため不明だが、外面はロクロナデ調整痕が認められる。249～250の口縁端部は磨耗のため調整は不明だが、251の口縁端部はつまみ上げて丸くおさめている。焼成は249、250が不良である。

小皿b類（252～262）

252～254は胎土がb類で、色調は全て明黄褐色系である。口縁端部は252～254ともにⅠ類になると思われる。

255は胎土がc類で、前出の246～248の胎土と近似している。色調は明黄褐色である。口縁端部はⅠ類である。

256～257は胎土がd類で、色調は全て灰褐色系である。口縁端部は526～258ともにⅠ類である。257は内面の約半分に煤と炭化物が付着し、外面の約半分には煤が付着している。煤、炭化物が付着している遺物は縄文時代の遺物を除いて257のみである。（図版11）

259～260は胎土がa類で、色調は灰白色である。口縁端部は259～260ともにⅡ類である。261は胎土がc類で、色調は灰白色である。内面調整は磨耗のためか、調整痕が認められない。外面調整は微かに横ナデが認められる。器壁が最も薄いものである。

262は胎土がc類で、色調は明黄褐色である。底部調整は下面が右回転の糸切痕だが、上面は左回転の糸切痕である。おそらく小皿の底部が剥離したものと思われる。[2] 焼成はややあまい。

小皿c類（263～264）

263～264は胎土がa類で、色調は263が黄灰色で、264は褐灰色である。口縁端部はⅡ類である。口縁部が大きく外反して伸びる特徴的な形態である。

小皿ｄ類（265～271）

265～266は胎土がｂ類で、色調は265が浅黄色で、266は明黄褐色である。265の底部調整は回転糸切痕がみられず、底部の中央に穴があり、底部に貼り付けた粘土がとれた様な跡が認められる。（図版11）266の体部はロクロナデによる凹凸が顕著である。口縁端部は265がⅠ類で、266がⅡ類である。266は265、267と比較して身が深く無台椀272の小型のものとも位置づけられる。

267は胎土がｄ類で、色調は黄灰色である。口縁端部はⅠ類である。

268～271は柱状高台風の底部片で、胎土は268、269がａ類、270、271はｂ類である。焼成は271がややあまい。

無台椀ａ類（272～280）

柱状風の底部をもつ272のみが胎土ａ類で、その他はｂ類である。色調は278を除いて全て明黄褐色系の色であるが、275の内面がやや赤系がはいるように見受けられる。

口縁端部は273～275、277、280がⅠ類で、272、276がⅡ類である。276の口縁端部はやや外反ぎみである。

273の内側１／４とその外面に黒班が認められる。外側の黒班の色調は内側より淡い。

278は272の底部と似ている柱状高台風の底部片である。色調は外面浅黄橙色を呈し、胎土はややあまい。

279は無台椀ａ類に属すると思われる底部片である。

無台椀ｂ類（281～294）

281～286、288～292の胎土はａ類で、その他はｂ類である。色調はａ類が灰白色系で、287、294は浅黄色で、293は浅黄橙色である。焼成は293がややあまいが、その他は概ね良好である。口縁部は直線的に伸びる290、293、294を除き、全て外反ぎみに伸びている。口縁端部は294がⅠ類、287もⅠ類にするが、先細りが著しい。その他は全てⅡ類である。

294の体部は直線的に立ち上がっているが、その端部は内椀ぎみに体部が立ち上がるものに多いⅠ類に属する。

286は内側にロクロヒダを残している。

281は口径が12.2cmでやや小さめの椀である。（第36図参照）

有台皿ａ類（295～298）

295～298の胎土はａ類である。色調は全て灰白色系であり、口縁端部はⅡ類である。高台は直立ぎみで先細りするものである。295の底部には指頭痕による凹凸が見られる。296の内面には土器を重ねて乾燥させたと思われる円形（直径約8.5cm）の痕跡がみられる。296の底部は指頭痕がなく、作成時の凹凸の残る雑なつくりのものである。297、298の底部片の胎土はａ類に属し高台の形態も似ていることから産地が同じものと推察される。297、298ともに底部に指頭痕が認められる。

有台皿ｂ類（299～301）

口径20.8cmを測る大型の皿である。299の胎土はｄ類である。口縁端部はⅠ類である。底部

の調整は中央部が盛り上がり、ロクロナデが底部外面全体に認められる。このことから底部の粘土塊をロクロ引きで引き上げて高台を形成したと推察される。その際のロクロ引きで余った粘土が中央で盛り上がったようにみえる状態で残ったと推察される。高台はやや内湾ぎみで先細りするものである。300、301の底部片形態は299のものに近似している。胎土も同じｄ類である。但し300、301とも中央部が盛り上がっているが、粘土紐を貼りつけたような痕跡があり、299のような強いロクロナデはみられない。300、301とも横ナデの痕跡はみとめられる。300は形態がいびつでロクロ形成したものと思われない。

高台付底部片（302～308）

302～304の胎土はｂ類である。色調は全て浅黄色系である。302は脚高高台風のもので、外反ぎみに広がり、下端部に面をもつ。底部内側の高台の付け根に指頭痕が認められる。胎土に砂粒を少し含む。303は断面三角形状の小さな高台で、高台の付け根箇所に段をもち、底部外面は丁寧に調整された平坦面をもつ。304はやや外にはりだした先細りする高台をもち、底部外面は中央部にやや盛り上がりが認められるが、底部は滑らかである。

305～308の胎土はｃ類である。色調は305、308が浅黄色系で、306、307は黄橙色系である。305は下端を丸くおさめる厚めの高台をもち、底部外面は凹凸がない平坦面である。底部の内側に指頭痕が認められる。308は底計9.3cmを測る最も大きな底部で、高台は305のものとほぼ同様の形態である。306は焼成があまく、304のような高台をもつが、底部外面は凹凸がない平坦面である。307も焼成があまく、下端部が肥厚する高台をもつ。

内黒土器（309～317）

309、310は口縁部片で、309の端部はⅠ類にあてはまる。310の端部はやや肥厚するが、Ⅱ類である。309は内面にミガキ調整が施されている。

底部片は胎土、焼成とも311を除いて似ている。311の胎土、焼成は内黒土器の中では異質の印象をうける。胎土は砂粒が少量はいるものであり、焼成も堅めである。全体的に内黒土器高台の形態は低めであり、底部は平坦に調整されているものが多い。312、313の底部外面はやや凹凸があるが、表面は滑らかである。

陶 磁 器

318は白磁の口縁部で、白磁椀のⅣ類とみられる。[3] 319は東濃産と推定される灰釉陶器の口縁部片である。[4]

3．中世～近世の遺物（第35図）

今回の調査で中世～近世の遺物が14点出土した。Ｂ層から出土した320の色調は外面明青灰色、内面灰白色で、珠洲焼の甕か壺の胴部片と思われる。Ｂ層（Ｃ層の可能性もあり）から出土した321の色調は外面明青灰色、内面灰白色で、15世紀代の珠洲焼の擂鉢の口縁部片と思われる。Ｂ層から出土した322の色調は外面暗青灰色、内面灰色で、珠洲焼きの甕か壺の胴部片と思われる。Ｂ層から出土した323の色調は外面内面ともに明赤褐色で白濁した釉薬をかけた近世の唐津系統の皿と思われる。Ｂ層（Ｃ層の可能性もあり）から出土した324の色調は外面

内面ともに表面に鶯色の釉薬がかかっている。近世の唐津系溝ぶち皿片と思われる。[5]

4．北塚遺跡出土土師器（以下北塚遺物と略する）についての考察

1．はじめに

北塚遺物は11世紀代の遺物でいわゆる中世的土器様相といわれるものである。ここの4．は北塚遺物の出土状況・土器組成を明らかにしたうえで、県内外のほぼ同時期の土師器出土状況を検討し、平安時代後期の土師器が持つ特徴と土器組成の背景となるものを考察する。

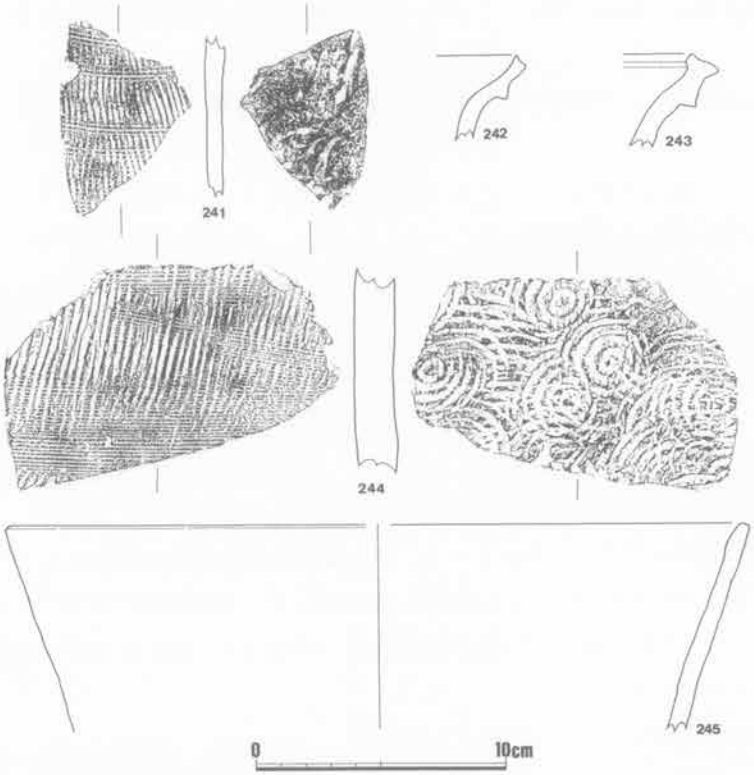
2．北塚遺物の廃棄状況について

北塚遺物がまとまって出土しているＥａ層とＥｂ層と土坑の出土土師器の廃棄状況を検討してみる。まず当時の地形からＥａ層とＥｂ層の堆積状況を考察してみる。Ｅａ層とＥｂ層の２層が存在しているのは出土遺物からみるとＥ－２～４区、Ｄ－２～３区である。これは平安時代末期の河川が非常に緩やかなものであったので、岸辺の砂層（Ｅａ層、Ｅｂ層）が比較的広範囲に堆積したものと推察される。[6] Ｅａ層とＥｂ層の堆積状況であるが、場所によってはＥａ層の厚さが数cmのところがあり、Ｅａ層とＥｂ層が明確に判別できない箇所も多かった。このようなＥａ層とＥｂ層の堆積状況からみるとＥａ層とＥｂ層は比較的短い間に堆積しているといえよう。

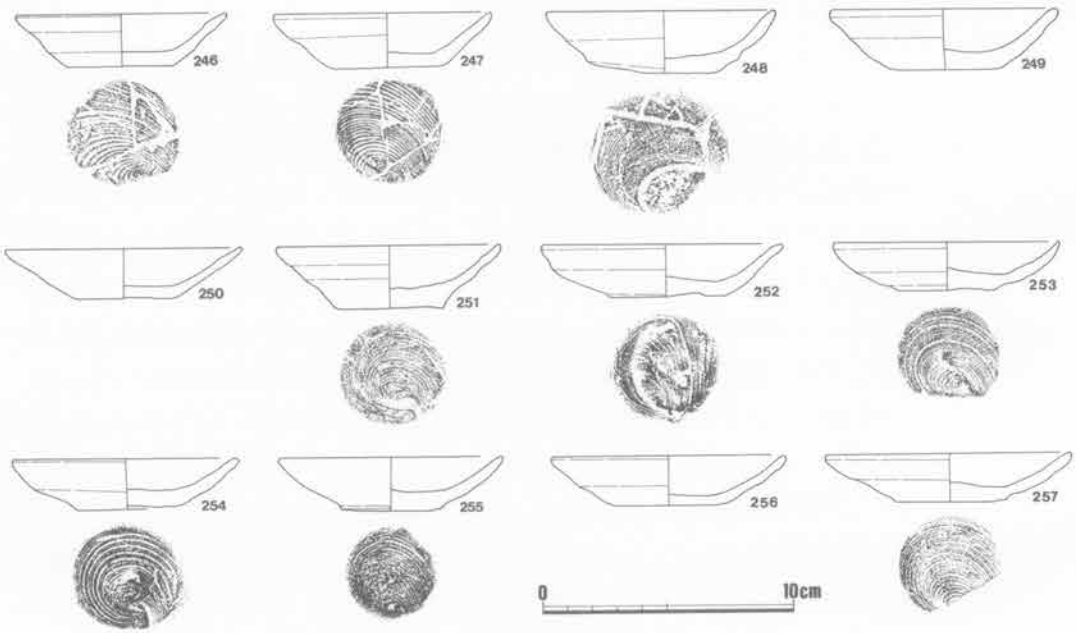
次に北塚遺物の一括性について考察してみる。土師器の胎土を４類に分類したが、そのなかで最も胎土の判別が容易なａ類（胎土の分類参照）の土師器に注目してみる。図化した土師器74点のうち胎土ａ類のものは22点ある。その22点は全てＥａ層から出土している。図化したＥａ層の土師器が33点なので、図化したＥａ層出土土師器の67％にあたる。一方、Ｅｂ層からは出土した土師器のうち図化したものは21点ある。そのなかで胎土ａ類のものはない。図化されていない破片の胎土に関してもこのような調査を行った（第11表）。Ｅａ層とＥｂ層の全破片数の重量割合は約５：３である。Ｅａ層とＥｂ層が図化されていない胎土ａ類の破片を含む割合は破片数ではＥａ層が67点、Ｅｂ層が７点である。これを重量で示すとＥａ層が405ｇでＥｂ層は25ｇである。よって重量の割合は約50：３になる。Ｅａ層とＥｂ層の全破片数の重量割合は約５：３であるのに対し、胎土ａ類の重量割合は約50：３となる。このデータにより胎土ａ類はＥａ層に包含され、Ｅｂ層にはほとんど包含されないといえる。このようにＥｂ層にはほとんど包含されない胎土ａ類がＥａ層には多く包含されるということは、Ｅａ層とＥｂ層出土北塚遺物はやや時期差があるといえよう。胎土ａ類の土師器の様相は、無台椀ａ類より新しい様相を示す無台椀ｂ類に多いことから層位とそれに包含される土師器の時系列的様相は一致する。出土区域毎の遺物出土密度は註（６）にあるとおりＥ－３、Ｄ－２区よりＥ－２、Ｄ－３区の方が高い。廃棄されている場所は緩やかな傾斜でしかも川の流れも緩やかな川縁

第11表　土師器片数、重量表

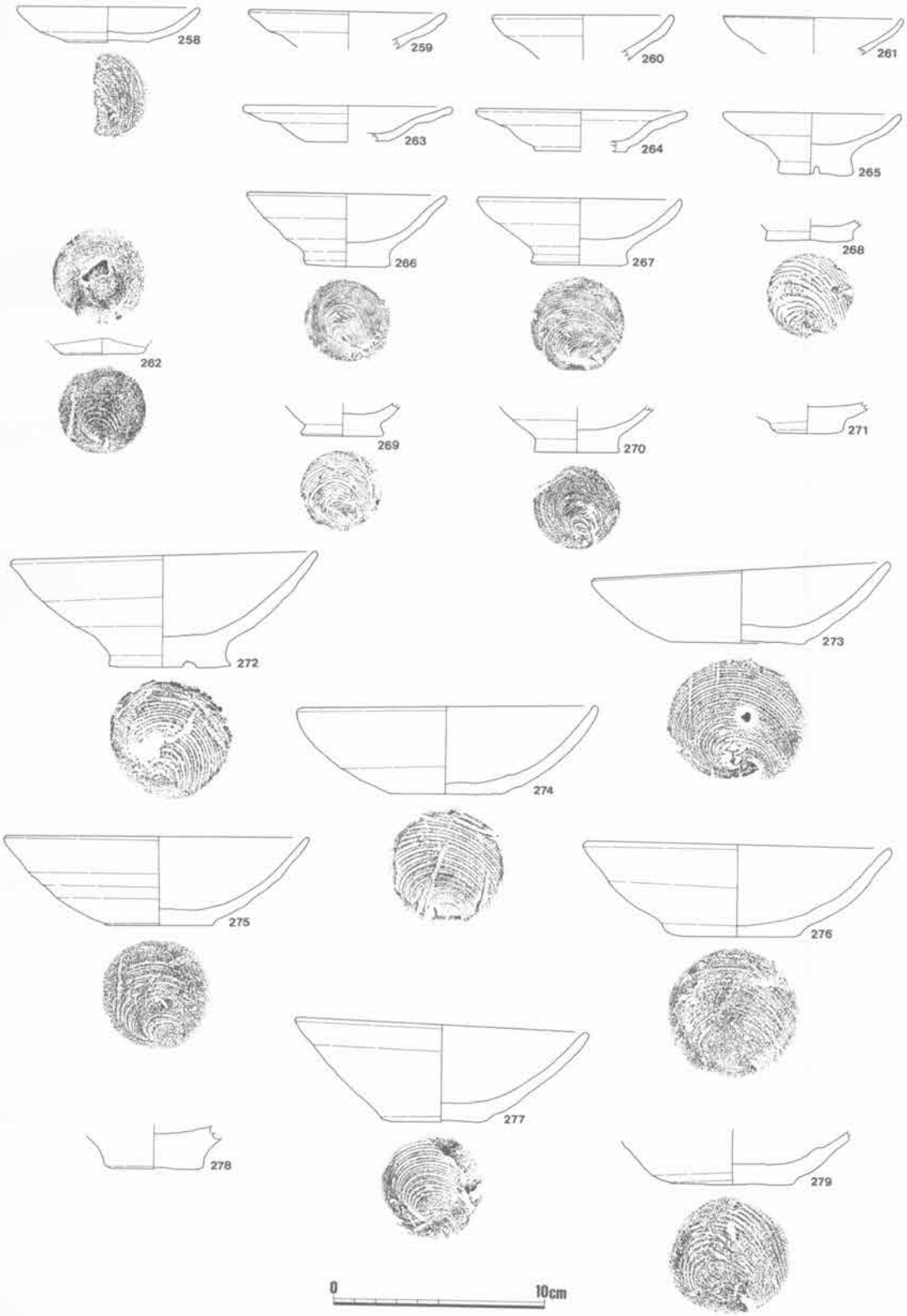
包含層、遺構名	破片数	破片重量計（ｇ）
Ｅａ層	408	1,975
Ｅｂ層	372	1,465
Ｅｃ層	16	137
１号土坑	853	3,025
合　　計	1,649	6,602



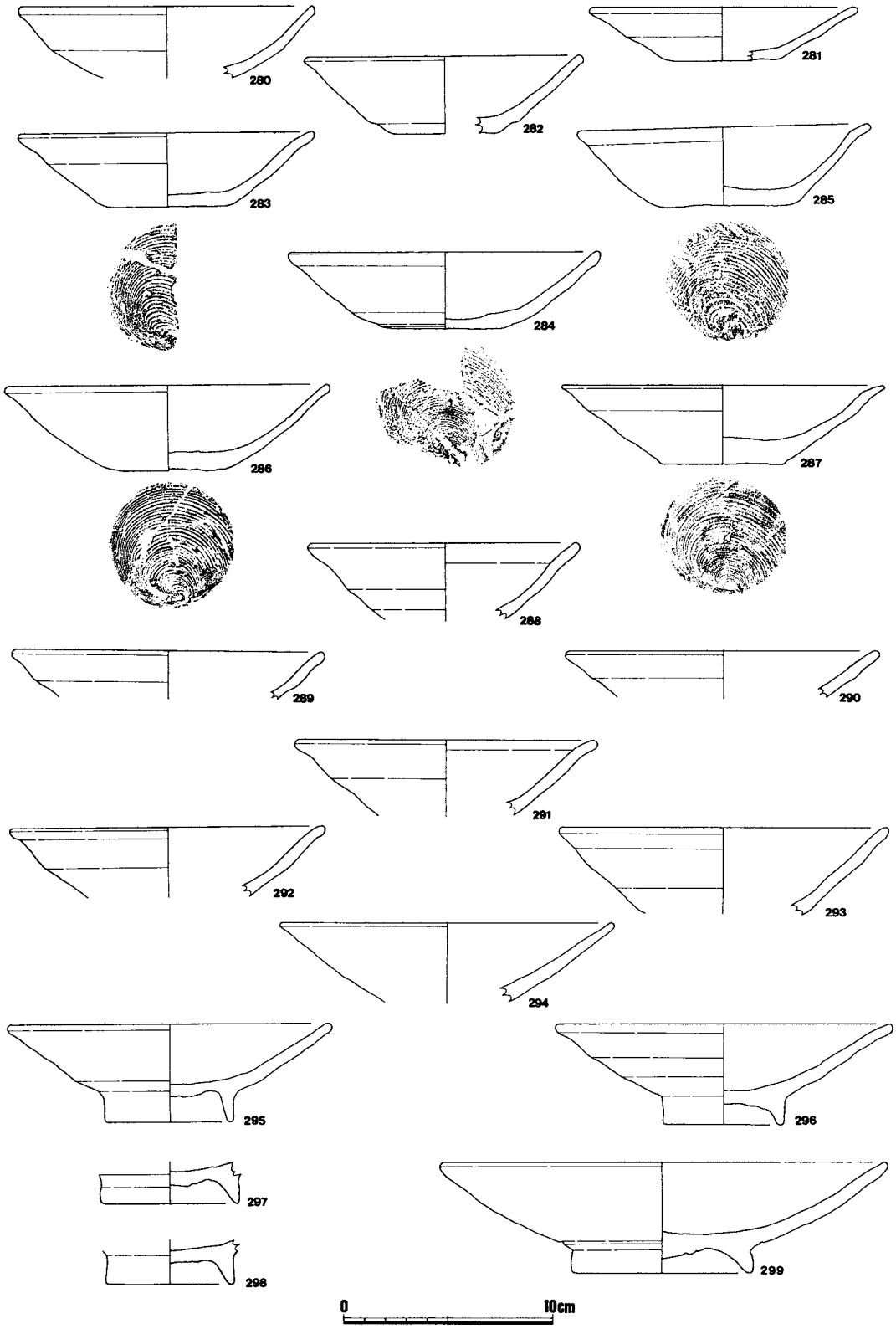
第30図　古代前半の遺物　(241～245)



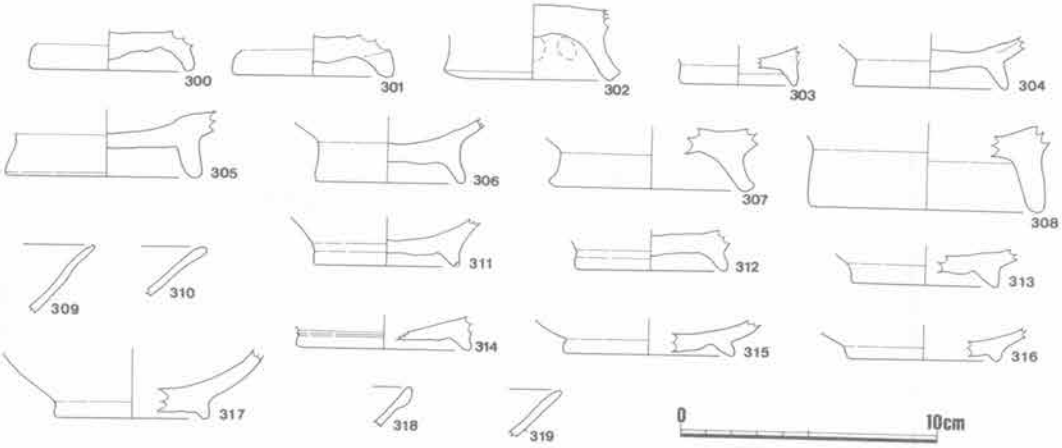
第31図　古代後半の遺物 (1) (246～257)



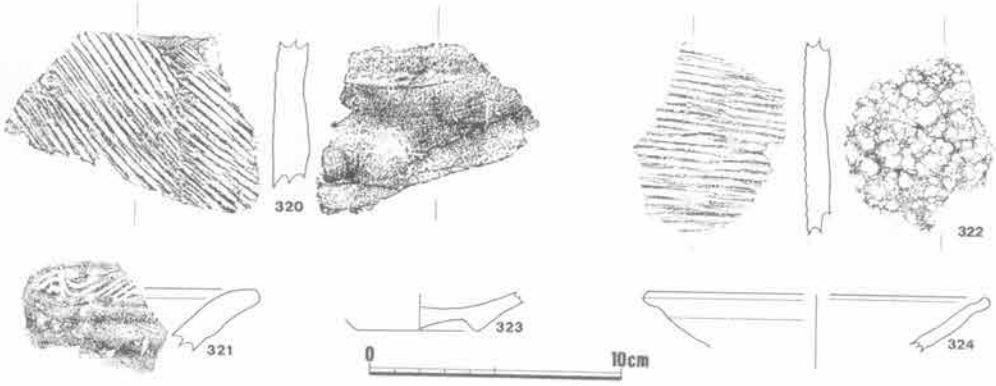
第32図　古代後半の遺物 (2)　(258～279)



第33図　古代後半の遺物（2）（280～299）



第34図　古代後半の遺物（3）（300～319）



第35図　中世～近世の遺物（320～324）

と推定されることから、川の流れによって流されていることは考えにくい。以上のことから川に対して垂直方向でＥ－２区からＤ－３区への方向性で廃棄されているといえよう。従って野田専光寺線の方面に遺物が拡がる可能性は低いと思われ、大量廃棄に伴う土師器ではないと推定する。つまり少量の土器を数回に分けて廃棄していると思われる。しかもその廃棄の間隔は短いように思われる。

最後に、土坑の廃棄状況を検討してみたい。土坑出土土師器の特徴として磨耗が著しいものが多く、底部でさえも半分以上残っているのは６点である。前述のとおり破片の重量の割合からすると形を留めているものが少ないことが分かる。土師器が最も多く出土している層は、１号土坑上層のＥｂ層と思われる層である。１号土坑出土土師器の胎土に関しての特徴は胎土ａ類の土師器が出土していないことである。また今回の調査で出土した内黒土器の重量％を算出するとＥａ層では13％、Ｅｂ層では11％、土坑では53％になる。１号土坑内には内黒土器の有台椀が比較的おおく廃棄されている。今回の調査では包含層出土遺物と１号土

坑との器種構成比率差の原因を明らかにすることが出来なかった。

3．北塚遺物の編年について

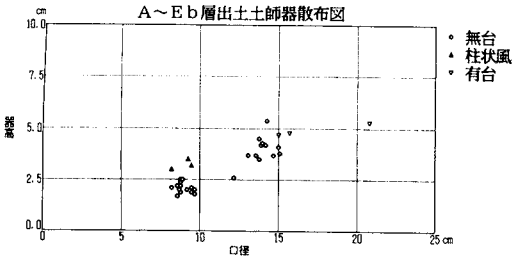
今回の発掘調査で出土した土師器は平安時代末期に位置づけられる。県内では、この時期のまとまった土器の報告例が少ない。従って資料不足の為、詳細な様相では不明な点を残すが、田嶋氏によってこの時期の編年がなされている。[7] その研究成果にもとづけば北塚遺跡の土師器は中世１－Ｉに比定されよう。[8]

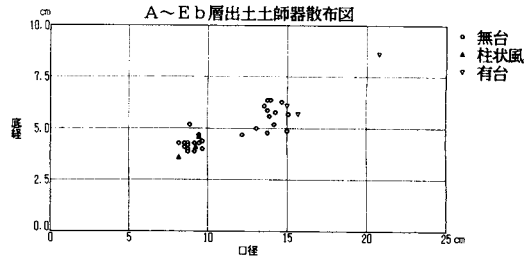
4．北塚遺物の土器組成について

北塚遺物の底部破片（図化してあるもの以外）のうち底部が１／２以上残っているものを第12表にした。残存率１／２以上の有台椀は全て実測図として図化してあり、結果的に無台椀のみの集計となった。北塚遺物実測図より小皿で底経4.7cmを越えるものがないことが分かる。椀では281のやや小型の椀が4.7cmで、それ以外は4.8cm以上であるから、底部片の径が4.7cm以下のものを小皿とし4.8cm以上を椀、皿類として数量を数えた。この基準で集計し

第12表　北塚遺物無台椀底部片観察表（図化しているものを除く）

No.	出土区	出土層等	胎土	底経(cm)	No.	出土区	出土層等	胎土	底経(cm)
1	D－3	E層上面B層下面	c	3.4	22	E－2	Ea層	b	4.6
2	〃	Ea層	b	4.4	23	E－4	A層	〃	4.4
3	E－4	――――	〃	4.8	24	E－2	B層	〃	4.0
4	D－3	Ea層	a	5.0	25	――	1号土坑	〃	5.6
5	〃	B層	c	4.4	26	D－3	E層上面B層下面	d	4.6
6	〃	Ea層	a	5.4	27	E－2	Ea層	a	4.0
7	E－2	A層	〃	5.5	28	D－4	E層	b	4.8
8	D－2	Eb層	b	5.2	29	D－3	E層上面B層下面	〃	4.0
9	E－2	B層	a	4.0	30	〃	Eb層	〃	4.0
10	〃	Ea層	b	5.6	31	〃	E層上面B層下面	c	4.8
11	〃	Eb層	〃	6.0	32	E－3	B層	b	5.4
12	E－4	A層	〃	5.8	33	D－3	Ea層	d	5.8
13	D－2	E層	〃	4.2	34	D－2	〃	b	4.0
14	E－5	〃	c	4.2	35	E－2	1号土坑内小ピット	〃	4.0
15	D－3	Ea層	b	5.2	36	――	――――	c	5.0
16	E－4	Ec層	〃	4.0	37	D－3	Ea層	b	4.4
17	E－2	1号土坑	〃	6.4	38	E－2	〃	〃	5.4
18	〃	Ea層	〃	4.2	39	E－2	1号土坑	〃	4.4
19	D－3	B層	〃	5.5	40	〃	〃	〃	5.9
20	〃	Eb層	〃	3.6	41	〃	〃	c	4.0
21	〃	〃	〃	4.2	42	D－3	Eb層	〃	5.0





第36図　北塚遺物法量散布図

第13表　個体数集計表

出土層等	分　類	個　体　数
Ea層	小皿	18（内訳：無台　14、有台　0、柱状風　4）
	椀、皿類	18（内訳：無台　13、有台　5、柱状風　0）
Eb層	小皿	5（内訳：無台　4、有台　0、柱状風　1）
	椀、皿類	8（内訳：無台　6、有台　2、柱状風　0）
1号土坑	小皿	3（内訳：無台　3、有台　0、柱状風　0）
	椀、皿類	15（内訳：無台　4、有台　10、柱状風　1）
その他	小皿	19（内訳：無台　17、有台　0、柱状風　2）
	椀、皿類	22（内訳：無台　11、有台　10、柱状風　1）

た底部破片と図化した土師器から小皿と椀、皿類の数量を第13表にしめした。従ってこの表と図化した土師器から小皿のとそれ以外の椀、皿類の構成比率が推定されよう。この表より土師器の組成比率は小皿が45個体で椀、皿類が63個体となる。田尻シンペイダン遺跡（01大溝）出土の小皿とそれ以外の椀、皿類の割合は小皿60個体に対して椀、皿類63個体となり北塚遺物より小皿の比率が高い。北塚遺物の主たる器種は小皿（やや身が深めの265、266、267も小皿に含む）と無台椀であり、有台皿、黒色土器はそれらより少数である。このように北塚遺物では小皿が土器組成の主流を占めているといえよう。この器種（小皿）は10世紀後半より出現し、11世紀に入ると汎日本的に土器組成の主流を占めるようになる。[9] このような特徴をもつ小皿の出土状況を分析することにより、平安時代後期の土器組成の背景にあるものの一端が明らかになると考える。以下の5．6．に小皿出土（定量）状況の事例をあげる。なお、身が深く小椀としたほうが妥当かと思われるものもあるが、ここでは口径10～11cm位のものは全て小皿とした。

5．小皿出土例（県内）

三浦遺跡[10]の三浦上層包含層遺物は時期幅があると思われるので、ここでは詳細には触れない。安養寺遺跡[11]の柴木地区ピット72、77は柱穴の抜き取り穴と思われるもので、ピット72からは主に全形が復元できる無台椀が21個体以上出土し、ピット77からは完形の小皿が17個体以上出土している。松任市中村井手遺跡[12]の建物内ピット1からは完形の小皿が正位で12個体出土しているので、埋納的ピットとされている。浄水寺跡[13]出土小皿は埋納的なピットから出土したもので完形の小皿が多く出土している。敷地天神山遺跡[14]の1号溝内出土遺物は小皿の

一括廃棄的な出土状態である。千木ヤシキダ遺跡[15]の埋納土坑ＳＸ06からは小皿、無台椀が出土し、地鎮時の埋納土坑とされている。武部ショウブダ遺跡[16]の建物内厨房から出土している可能性が指摘されている11Ｈ～12Ｈ土器溜りからは主に小皿、無台椀、有台椀、有台皿が出土している。同遺跡の埋納ピット的な遺構から小皿、無台椀、黒色土器（完形品が多い）が出土している。清水今江ニシャグチ遺跡[17]では数十個体の土師器（小皿、椀）が一括廃棄または埋納（ほとんどが完形品である）された状態で出土している。寺家遺跡[18]の砂田地区ＳＫ01からは主に小皿、無台椀、黒色土器が出土し、それらは祭祀行為に伴う一括廃棄の遺物であると指摘[19]されている。田尻シンペイダン遺跡[20]の01大溝からは主に小皿、無台椀、皿、黒色土器が出土し、それらは建物の火災に伴う一括廃棄遺物とされている。これらの中から儀式的行為に伴うと思われるものを挙げると安養寺遺跡（ピット72・77）、松任市中村井手遺跡（ピット１）、武部ショウブタ遺跡の埋納的ピット、浄水寺跡の埋納的ピット、寺家遺跡、千木ヤシキダ遺跡の６遺跡のものである。

6．小皿出土例（県外）

比較的遺物量が多い新潟県の一之口遺跡[21]と11世紀代でも竪穴住居が残り日常的に使われる土器の組成が把握し易いと思われる長野県の南栗遺跡[22]（集落遺跡）を取り上げる。一之口遺跡は11世紀初頭～前半に比定されているものである。儀式的行為の後、溝（ＳＤ１）に祭祀遺物（木製品も多く含む）を廃棄している遺構がある。その溝内の食膳具組成をみると土師器と黒色土器が大部分である。その他に木製品の椀、皿類と須恵器、灰釉陶器片が若干みられるのみである。その内の土師器と黒色土器の構成比率をみてみると、小皿約50％、無台椀が約35％、黒色土器が約15％である。一之口遺跡の事例から11世紀初頭～前半より小皿が儀式的行為の土器組成において主体的なものとなっていたといえよう。

長野県で11世紀代の竪穴住居の遺構が最も多いと思われる南栗遺跡を検討する。南栗遺跡では11世紀をつうじて土器組成の変化が少ない[23]。その11世紀代の土器組成の概要をあげる。日常的に使用していた土器の傾向を摑むため竪穴式住居址一つあたりの食膳具を算出[24]すると土師器では杯ＡⅡ（約９）、杯ＡⅢ（約３）、椀（約３）、皿ＡⅡ（約１）、盤ＢⅡ（約１）、黒色土器Ａ類（約３）、須恵器では杯Ａ（約２）、灰釉陶器では椀（約５）、段皿（約２）となる。使用頻度が最も多いと思われる椀[25]の材質バリェーションが黒色土器、土師器、灰釉陶器と３種類ある。これらの材質の違いは使用頻度による可能性もある。そう仮定すると使用頻度が高いものが灰釉陶器で低いものが土師器、黒色土器といえよう。また南栗遺跡遺物を使用形態から考察すると１遺跡あたりのこれら土器を全て毎日使用していたと仮定するのは無理があるように思われる。そのような仮定が成り立つとすれば11世紀代の食生活状況はかなり豊かなものとなるだろう。それら材質の違いは用途による使用頻度と理解したい。

以上のとおり事例は少ないが、５．６．から小皿は儀式的行為に使用される特徴がみえると判断したい。小皿が一定量出現する段階で儀式的行為に定着していると推定する。小皿出現の背景の一つに儀式的行為における必要性があった可能性がある。これに関連して次の７．で10世紀代の儀式的行為による遺物が豊富な千木ヤシキダ遺跡の事例を中心に儀式的行為に

おける遺物と10〜11世紀における画期について考察する。

7．10〜11世紀代の画期と儀式的行為について

5．6．のような儀式的行為に使用された傾向をもつ10世紀代の完形土師器定量出土遺跡の県内代表例は千木ヤシキダ遺跡である。そこでは埋納土坑群が多く検出されている。出越氏は埋納土坑例を調べられ8〜9世紀までは皇朝銭が地鎮の主要な遺物で、10世紀になると完形の土師器椀が埋納されるようになると考えられている。[26] 久世康博氏は平安京でも「いわゆる律令祭祀遺物は9世紀後半から徐々に減少する傾向を示し、10世紀頃から日常雑器などを埋納した遺構がみられる」とし、その原因を国家主体の祭祀から密教、陰陽道的要素をもつ新たな祭祀形態の移行とされている。[27] このように精神的文化を反映する儀式的行為には10世紀代に画期が認められる。おそらくこのような完形土師器大量埋納という消費形態がそれまでとの土器様相を変える一要因となったのであろう。その土器様相は11世紀代になると「供膳器種の単一化（1器種1法量）を指標とする器種別専業的生産が畿内を中心に定着する段階[28]」となり、この段階が中世的土器組成の成立の画期とされる論考[29]がある。また近江の事例であるが、集落変遷史においても10世紀中葉と11世紀中葉〜12世紀前後に画期が設定されている。その10世紀中葉の画期は中世的集落の出現期とされ、11世紀中葉〜12世紀前後の画期を中世的集落の確立期とされている。その背景には鉄製農具が10・11世紀代でさらに普及したことがある。それによって10〜12世紀に田地・畑地が拡大したとされている。[30] また食生活においても画期が認められる。食料保存、食事、祭祀行為に不可欠な塩の生産手段に関しても鉄釜等の煎熬釜の普及により県内では11世紀には煎熬に使用される製塩土器は消滅する。[31] 煮炊具も9世紀後半から10世紀の段階で鉄製鍋釜の更なる普及の可能性が田島氏により指摘されている。[32] この鉄製鍋釜と塩生産効率化による塩の更なる普及は食生活に大きな影響をもたらすといえよう。[33]

8．平安時代後期〜中世にかけての土師器使用形態について[34]

県内のほぼ11世紀代に比定される土師器の主な出土状況をみると①埋納的な柱穴・土坑から出土するもの②土器溜まり的な出土状況のもの③溝内出土のもの等があげられる。出土状況①〜③分類の土師器の特徴は完形品に復原可能なものが多いことである。このことから土師器が使用不能になった為廃棄したとは考えにくい。完形品をあえて廃棄する行為があったと考える。中世土師器にもこのような完形品大量出土の事例が多くある。このような中世土師器の用途を主に文献資料から考察した藤原良章氏の論考[35]がある。そのなかで中世土師器の持つ性格に「使い捨て」があり、その主な用途は①呪術的行為に使われる、②供宴に使用されると考えられている。藤原良章氏の論考で取り上げられている遺物資料は主に鎌倉、平安京のものである。藤原良章氏はそれら遺跡の中世土師器大量出土をもって宴会に伴う一括廃棄とされている。江戸時代初期の事例[36]であるが、かわらけと共に木製品の箸、折敷、曲物のものと思われる丸い板、楊枝、蒲鉾の板と思われるものが出土している大名屋敷内の遺跡がある。萩尾昌枝氏は文献資料と出土状況から宴会の後の一括廃棄遺物とされている。この事例は考古資料から宴会後かわらけが廃棄されることを裏付けるものであり、中世からのか

わらけ用途を受け継ぐものと考えられる。県内出土の中世土師器にも藤原良章氏の定義が適応されるか考察してみたい。前述の出土状況分類に添って出土例を挙げる。県内の中世土師器の出土状況①分類に該当する柱穴出土には多量の完形中世土師器が重なり合った状態で出土している御館遺跡[37]のＳＢ06柱穴があり、土坑出土では多量の中世土師器が約10㎝の層をなし出土した大町・縄手遺跡[38]のＳＫ01がある。出土状況②分類では中世土師器を中心とする一括資料である下開発遺跡Ｅ地区[39]の２号土器溜だまりがある。出土状況③分類では銭畑遺跡[40]の溝内出土の中世土師器がある。中世ではこれら出土状況①～③分類の他に井戸跡出土の中世土師器が多くみられる。このように県内でも「使い捨て」、「呪術的行為に使われる」傾向が中世土師器にあるといえよう。しかし、中世都市出土遺物のような膨大な出土数はみられない[41]。県内のほぼ11世紀代の土師器出土状況と中世土師器出土状況をみてきたが、両者には共通点が認められる。よって県内の土師器と中世土師器の儀式的行為における使用形態には連続性が認められるといえよう。

9．今後の課題として

ここでまとめに換えて今後の課題を述べる。小皿出現の背景は前述した事例から儀式的な遺構より出土するので、儀式的行為の必要性としたい。小皿出現以前の千木ヤシキダ遺跡の埋納土坑出土の土器は大部分が無台椀であり、安養寺遺跡（柴木地区）のピット72出土土師器は全て無台椀で構成されている。小皿出現と同時に埋納的土坑出土土器の構成が小皿主体になる。その出土土師器構成をみると①小皿のみ、②小皿・無台椀、③小皿・無台椀・黒色土器からなる３パターンがある。これらを出土遺構毎でみると断定はできないが、①は地鎮に伴うものに多い傾向があり、②・③は儀式に関わる土坑より出土する傾向があると思われる。時系列でみると①・②より③が後出すると思われる。これら土師器構成差の原因は不明だが、おそらく儀式的行為の差異によるものであろう。これら３パターンを今後、時系列・遺構・階層性から検討する必要がある。

次に土師器の使用形態に関して述べてみたい。須恵器食膳具廃絶後の土師器は粗雑化、大量廃棄の特徴がみられる。田島明人氏は古代後半期の土器食器の粗雑化、器種淘汰から「土器食器が実用器から儀器、ないしは非日常の食器へ急速に傾斜した段階[42]」とされている。このような傾向は畿内にもみられ、９世紀後半以降土師器の大量消費が目立つようになる[43]。土師器の粗雑化は大量消費に伴う量産化にあるとされているが、その背景には儀式的行為における土師器の大量消費があるようである[44]。土師器が儀式的行為に使用されるのは明らかだが、日常食器としての用途に関しては不明点が多い。前述した南栗遺跡の住居址からは土師器が最も多く出土し、次いで灰釉陶器が多く出土している。これら土師器と灰釉陶器は耐久性において大きな違いがあるので用途による使用頻度、内容物にも差異があったと思われる。材質による耐久性の差から生じる使用頻度の多寡はあると思われるが、土師器の用途として住居址より出土していることから日常的食器としても使用された可能性がある点を指摘しておきたい[45]。県内では南栗遺跡とほぼ同時期の集落遺跡を調査した例は少ないが、南栗遺跡の灰釉陶器に対応する耐久的食膳具がある可能性はある。それらの耐久性に優れた材質は各々の

地域で最も安価に入手できるものに当てていたのかもしれない。このような土器使用形態の究明は該当期の食文化、儀式的行為を解明するうえにおいて重要である。

10. おわりに

北塚遺物に触発され土師器に関する論を中心に展開してきたが、解決すべき今後の課題は多い。最も大きな問題は食膳具における材質[46]と用途の関係である。その関係は明確に対応するものではなく地域・階層・時代により用途を相互に補っていると思われる。しかし、基本的な対応関係は成立すると思われる。[47]この食膳具の材質に関する問題で今後重要なものは木材であろう。近年このような木製容器に関する論考が多くなってきたのも背景にこのような問題意識があるためであろう。その中の一つに四柳嘉章氏[48]のものがある。その論考で四柳氏は漆器普及の画期を11世紀代においておられる。また宮本常一氏は推定という前提であるが、木製品の地方普及の画期を生み出したものに中央政府の衰退をあげられている。[49]この仮定が正鵠を得ているとすると県内にも須恵器食膳具廃絶後に木製品がより普及したといえよう。このことから7．に挙げなかったが、10世紀代に木製品普及の画期がある可能性を指摘しておきたい。

このように10〜11世紀代に大きな画期が集中する傾向がある。これらの画期に多大な影響を与えているものに鉄製品のよりいっそうの普及が挙げられよう。この鉄製品の普及により、食生活が向上し、手工業・農業の生産性が上がったことは想像に難くない。一方この時期は律令国家体制が衰退してゆく段階であり、いわゆる在地領主層が台頭してくるという社会背景を持つ。この在地領主層の先導により地方での産業が発達し、地方の文化レベルが押し上げられたのであろう。それら地方文化を構成する要素が有機的に影響を与えあって「日本的生活の起点[50]」を築いたといえよう。土器組成も地方文化を構成する一要素であり、他の影響を当然受けている。このような視点から土器組成の背景にあるものを今後究明してゆかなければならない。

本節を書くにあたって金沢市教育委員会の出越茂和氏、埋文保存協会の田嶋明人、当センター湯尻修平、中島俊一、小嶋芳孝、福島正実、垣内光次郎、北野博司、木立雅朗、滝川重徳、安　英樹、三浦ゆかりに教示を得た。記して感謝いたします。　　（白田　義彦）

［註］

(01) 古代前半の遺物に関しては当センターの木立雅朗氏より教示をえた。

(02) 田中沖遺跡Ⅱ（長野市）の102号住居址に類例がみられる。そのなかで「底部柱状つくり」によってできるものとされている。
長野市教育委員会　1991.12　『田中沖遺跡Ⅱ　－長野市神明広田区画整理事業地点－』

(03) 当センターの垣内光次郎氏の教示による。

(04) 出越茂和氏（金沢市教育委員会）の教示による。

(05) 中世〜近世の遺物は当センターの木立雅朗氏より教示をえた。

(06) 遺物破片数が最も多く出土している地点は遺構の1号土坑を除くとE－2、D－3区である。ついでその周辺のD－2、E－3、E－4区となる。その他の区域は少数である。そのE－2の東コーナー、D－3区の西コーナーの距離が5.7mで標高差が約1m未満位なので緩やかな勾配をもつ川辺に廃棄されたとみられる。

(07) 石川考古学研究会・北陸古代土器研究会　1988.9　『シンポジウム　北陸の古代土器研究の現状

と課題　報告編』
石川県立埋蔵文化財センター　1986. 3　『漆町遺跡Ⅰ』
(08) 金沢市教委の出越茂和氏に北塚遺跡出土土師器を実見していただいた。北塚の胎土ａ類のものは千木ヤシキダ遺跡にはないそうである。胎土ｂ類的なものが主流のようである。新相を示す胎土ａ類と古相を示す胎土ｂ類が混在するという特徴を北塚遺跡はもっている。このことからも千木ヤシキダ遺跡が北塚遺跡より先行するといえよう。田嶋明人氏にも北塚遺跡出土土師器を実見していただいた。田尻シンペイダン遺跡（01大溝）遺物との比較で小皿のバリューションが少ない等北塚遺跡の遺物が先行するとご教示を頂いた。
(09) シンポジウム実行委員会　1990.12　『シンポジウム土器からみた中世社会の成立』
(10) 石川県教育委員会・松任市教育委員会　1967　『加賀三浦遺跡の研究』　石川考古学研究会編
田嶋明人氏の教示によれば、三浦上層遺物の出土状況は包含層中に一括廃棄的なまとまりをもって出土しているそうである。
(11) 石川県立埋蔵文化財センター　1985　『安養寺遺跡群発掘調査報告書　図版編』
石川考古学研究会・北陸古代土器研究会　1988. 9　『シンポジウム　北陸の古代土器研究の現状と課題　資料編』
(12) 松任市教育委員会　1993　『松任市中村井手遺跡』
(13) 垣内光次郎　1985. 2　「小松市浄水寺遺跡発掘調査の概要」『石川県立埋蔵文化財センター所報17号』
(14) 石川県立埋蔵文化財センター　1987　『敷地天神山遺跡群』
(15) 金沢市教育委員会　1987. 3　『金沢市千木ヤシキダ遺跡』
金沢市教育委員会　1991. 3　『金沢市千木ヤシキダ遺跡・Ⅱ』
(16) 石川県立埋蔵文化財センター　1990　『石川県立埋蔵文化財センター設立10年の記録』
石川考古学研究会・北陸古代土器研究会　1988. 9　『シンポジウム　北陸の古代土器研究の現状と課題　資料編』
(17) 垣内光次郎　1986. 7　『石川県立埋蔵文化財センター所報　21号』　※堀松遺跡となっている
(18) 石川県立埋蔵文化財センター　1986　『寺家遺跡発掘調査報告Ⅰ』
石川県立埋蔵文化財センター　1988　『寺家遺跡発掘調査報告Ⅱ』
(19) 石川県立埋蔵文化財センター、小嶋芳孝氏の教示による
(20) 石川県教育委員会　1979. 3　『加賀市田尻シンペイダン遺跡発掘調査報告書』
(21) 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団　1994　『北陸自動車道上越市春日・木田地区発掘調査報告書Ⅵ　一之口遺跡東地区（本文編）』　同資料編
(22) 日本道路公団名古屋建設局・長野県教育委員会・㈶長野県埋蔵文化財センター　1990　『中央自動車道長野線　埋蔵文化財発掘調査報告書７　松本市内その４　南栗遺跡　本文編』　同図版編
(23) 南栗遺跡では11世紀代を12から14期に分けているが、11世紀代の土器構成で変化するのは14期でⅢＡⅡ、ⅢＡⅠが現れることだとされている。
(24) 報告書のなかで土器構成表がある11世紀の竪穴住居址の遺物について算出した。構成表がある11世紀代の竪穴住居址は10遺構である。そのうち一般的な竪穴住居址とはいえないＳＢ192を除外して、９遺構で土器組成の算出を行った。今回は概要を調べることを目的とするので、９遺跡の合計が出土点数10点未満のものは無視する。統計をとると次のようになった。土師器では杯ＡⅡ（80）、杯ＡⅢ（30）、椀（24）、ⅢＡⅡ（12）、盤ＢⅡ（10）。黒色土器Ａ類では椀（有台）（30）。須恵器では杯Ａ（17）。灰釉陶器では椀（46）、段Ⅲ（22）。
出土点数10点以下の器種は土師器（小椀、ⅢＡⅠ、ⅢＡⅡ、ⅢＢⅠ、小壺、杯Ｄ、高杯、鉢、杯Ｃ）、黒色土器Ａ（小椀、杯ＡⅡ）、須恵器（杯Ｂ、杯蓋Ｂ）、灰釉陶器（Ⅲ、稜Ⅲ、小椀）、黒色土器Ｂ（椀、小椀、耳Ⅲ、小壺）である。
(25) 佐原　真氏は「弥生時代以来、古墳、奈良、平安時代を通して、煮炊きの主流が直接的な煮炊き、米でいえば姫飯を炊くことが一般的であって、米を蒸すこと、つまり強飯を作ることは、それに比べて頻度が少なかった公算が大きい」、「炊飯と蒸し飯の違いは、日常のケの煮炊きと、祭儀と係わるハレの煮炊きと係わるものだろう」とされている。この時期に一般村落レベルでは米を常食していたとは考えにくい。主食として米、雑穀、野菜類、芋類等を煮炊きしたものを食していたと思われる。従って椀類が最も使用頻度が高かったと思われる。
佐原　真　1987　「煮るか蒸すか」『飲食史林　７号』　飲食史林刊行会
食生活に関しては次の論考を参考にした。
門脇禎二　1974　「衣・食・住の変化」『日本生活文化史　３巻　日本的生活の基点』　河出書房新社

(26) 金沢市教育委員会　1991. 3　『金沢市千木ヤシキダ遺跡・Ⅱ』
(27) 久世康博　1994　「祭祀遺物」『平安京提要』　㈶古代學協会・古代學研究所　角川書店
(28) 吉岡康暢　1991.12　「中世的食器組成の成立と時期区分覚え書　90年シンポに寄せて」『中近世土器の基礎研究Ⅶ』　日本中世土器研究会
(29) 吉田恵二　1986　「須恵器以降の窯業生産」『岩波講座　日本考古学　3巻』
橋本久和　1987　「中世の土器」『考古学ジャーナル　№280』
(30) 広瀬和雄　1990　「古代の農村」『日本村落史講座　2巻　景観Ⅰ　原始・古代・中世』　日本村落史講座編集委員会
森　　隆　1993　「中世地域社会の形成過程－畿内・畿内周辺地域の事例より－」『古代文化』　㈶古代學協会
(31) 小嶋芳孝・宇野隆夫　1989　「北陸における塩生産」『北陸の古代手工業生産』　北陸古代手工業生産史研究会
(32) 田嶋明人　1992.11　「雑感－古代の土器と中世の土師器－」『中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器』　第5回北陸中世土器研究会
(33) 朝岡康二氏は鉄製鍋・釜の普及により「多量の米飯を一度に炊く技術の普及」、「古代までの『煮炊』中心の調理方法から『煎る、焼く、炒める』調理方法の追加」を取り上げられている。
朝岡康二　1993　『ものと人間の文化史72　鍋・釜』　法政大学出版局
食生活における塩の用途は幅広く、保存食品・醤等の調味料に多く使われた。
樋口清之　1987　『新版　日本食物史－食生活の歴史－』　柴田書店
(34) 古代の土器用途と食器素材については前出論考（32）が詳しい。本論もこの論を参考としている。
(35) 藤原良章　1988　「中世の食器・考」『列島の文化史　5』　日本エディータースクール出版部
(36) 東京大学遺跡調査室　1990　『東京大学本郷構内の遺跡　医学部附属病院地点』
(37) 石川県・穴水町教育委員会　1987　『西川島』
(38) 同上
(39) 石川県立埋蔵文化財センター　1988　『辰口西部遺跡群Ⅰ』
(40) 小松市教育委員会・南征建設運輸株式会社　1992　『銭畑遺跡Ⅰ』
小松市教育委員会・有限会社　叶井　1993　『銭畑遺跡Ⅱ』
(41) ㈶古代學協会　1988　『高倉宮・曇華院跡第4次調査　平安京跡研究調査報告　第18輯』
広島県草戸千軒町遺跡調査研究所　1993　『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅰ　北部地域北半部の調査』
広島県草戸千軒町遺跡調査研究所　1994　『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅱ　北部地域南半部の調査』
その他平安京、斎宮跡の事例は前出『金沢市千木ヤシキダ遺跡・Ⅱ』に詳しい。
(42) 前出（32）と同一
(43) 畿内の事例は前出『金沢市千木ヤシキダ遺跡・Ⅱ』に詳しい。
(44) 小森俊寛　1994　「土師器・黒色土器・瓦器」『平安京提要』　㈶古代學協会・古代學研究所　角川書店
(45) 武部ショウブダ遺跡の厨房内出土とされている土師器もその可能性がある。
(46) 田嶋明人氏は11世紀中頃を土器がより機能的な素材への転換を計った時期としてとらえている。
田嶋明人　1990.12　「古代から中世における土器の推移（加賀）」『シンポジウム　土器からみた中世社会の成立』　シンポジウム実行委員会
(47) 素材による用途の違いを論考されている一例として、平城京における須恵器と土師器の出土量から儀式用土器に土師器が多く使用されることを指摘されている論考がある。
山中敏史　1977　「八、九世紀における中央官衙と土師器」『考古学研究　第19巻4号』
(48) 四柳嘉章　1991　「古代～近世漆器の変遷と塗装技術」『石川考古学研究会々誌　34号』
四柳嘉章　1992　「北陸・東北における古代・中世漆器の髹漆技術と画期」『石川考古学研究会々誌　35号』
(49) 宮本常一　1967　「生活用具」『日本の考古学　Ⅶ　歴史時代（下）』　河出書房
(50) 「唐・新羅の外来文化を吸収・消化していった対応のしかたに“日本”の基点を捉え、“公”から“私”へという変化、角度をかえれば中央から地方へという動きが、また“唐”から“倭”へという動きとかさなりあうことは注意していい」と平安後期の動きを捉えられている。
武者小路穣　1974　「総説」『日本生活文化史　3巻　日本的生活の基点』　河出書房新社

第14表　土師器観察表

No.	法量	区	層位等	胎土	海綿骨片	色調	底部調整等	焼成	No.	法量	区	層位等	胎土	海綿骨片	色調	底部調整等	焼成
246	口径：8.8 底径：4.3 器高：2.1	E 4	A	c	無	内）灰白 外）灰白	回転糸切り痕有り	良	266	口径：9.3 底径：4.1 器高：3.5	D 2	E a	b	無	内）明黄褐 外）明黄褐	回転糸切り痕有り	良
247	口径：8.6 底径：4.3 器高：2.2	D-3	E	〃	有	内）浅黄 外）浅黄	回転糸切り痕有り	〃	267	口径：9.5 底径：4.6 器高：3.2	D-2	E	d	有	内）黄灰 外）黄灰	回転糸切り痕有り	〃
248	口径：8.9 底径：4.7 器高：2.5	〃	B	〃	〃	内）明黄褐 外）灰白	回転糸切り痕有り	並	268	口径：－ 底径：4.1 器高：－	E-3	A	a	無	内）浅黄 外）浅黄	回転糸切り痕有り	〃
249	口径：8.8 底径：4.3 器高：2.4	D 4	E	〃	無	内）浅黄橙 外）浅黄橙	磨耗で不明	不良	269	口径：－ 底径：4.0 器高：－	E 2	E a	〃	〃	内）灰白 外）灰白	回転糸切り痕有り	〃
250	口径：9.2 底径：3.9 器高：2.0	E-5	〃	〃	〃	内）明黄褐 外）明黄褐	磨耗で不明	〃	270	口径：－ 底径：4.0 器高：－	〃	B	b	〃	内）浅黄 外）浅黄	回転糸切り痕有り	並
251	口径：8.8 底径：4.2 器高：2.5	〃	A	〃	〃	内）明黄褐 外）明黄褐	回転糸切り痕有り	並	271	口径：－ 底径：3.4 器高：－	D 3	E b	〃	〃	内）明黄褐 外）明黄褐	回転糸切り痕有り	不良
252	口径：9.5 底径：4.7 器高：2.1	E-2	B	b	有	内）浅黄 外）浅黄	回転糸切り痕有り	〃	272	口径：14.3 底径：5.8 器高：5.4	D 2	E	a	〃	内）明黄褐 外）明黄褐	回転糸切り痕有り	良
253	口径：8.8 底径：3.9 器高：1.9	〃	E a	〃	〃	内）浅黄 外）浅黄	回転糸切り痕有り	〃	273	口径：13.8 底径：6.4 器高：3.5	D-3	E b	b	有	内）浅黄 外）浅黄	回転糸切り痕有り	〃
254	口径：8.7 底径：4.2 器高：2.0	〃	〃	〃	〃	内）褐灰 外）褐灰	回転糸切り痕有り	良	274	口径：13.9 底径：5.6 器高：4.2	E-3	E a	〃	無	内）明黄褐 外）明黄褐	回転糸切り痕有り	並
255	口径：8.8 底径：4.0 器高：2.2	〃	〃	c	無	内）明黄褐 外）明黄褐	回転糸切り痕有り	並	275	口径：14.2 底径：5.2 器高：4.2	D-3	E b	〃	有	内）明黄褐 外）明黄褐	回転糸切り痕有り	〃
256	口径：9.2 底径：4.3 器高：2.0	D-3	〃	d	〃	内）褐灰 外）褐灰	磨耗で不明	良	276	口径：14.0 底径：6.4 器高：4.3	D-2	E	〃	〃	内）浅黄 外）浅黄	回転糸切り痕有り	〃
257	口径：9.5 底径：4.3 器高：1.9	E-3	E b	〃	有	内）褐灰 外）褐灰	回転糸切り痕有り	〃	277	口径：13.8 底径：4.8 器高：4.5	E 3	E a	〃	〃	内）浅黄 外）明黄褐	回転糸切り痕有り	〃
258	口径：8.6 底径：4.1 器高：1.7	D-3	E a	〃	無	内）浅黄 外）浅黄	回転糸切り痕有り	〃	278	口径：－ 底径：4.6 器高：－	D-3	〃	〃	無	内）浅黄 外）浅黄橙	回転糸切り痕有り	不良
259	口径：9.1 底径：－ 器高：－	〃	〃	a	〃	内）灰白 外）灰白	欠損で不明	〃	279	口径：－ 底径：5.8 器高：－	〃	E b	〃	有	内）浅黄 外）浅黄	回転糸切り痕有り	並
260	口径：8.4 底径：－ 器高：－	E-2	〃	〃	〃	内）灰白 外）灰白	欠損で不明	〃	280	口径：13.8 底径：－ 器高：－	〃	E a	〃	無	内）浅黄 外）浅黄	欠損で不明	良
261	口径：8.4 底径：－ 器高：－	D-3	E	c	〃	内）灰白 外）灰白	欠損で不明	〃	281	口径：12.2 底径：4.7 器高：2.6	〃	〃	a	〃	内）明黄褐 外）明黄褐	回転糸切り痕有り	〃
262	口径：－ 底径：3.4 器高：－	E-2	E b	〃	〃	内）明黄褐 外）明黄褐	回転糸切り痕有り	不良	282	口径：13.1 底径：5.0 器高：3.7	E-2	B	〃	〃	内）灰白 外）灰白	回転糸切り痕有り	〃
263	口径：9.7 底径：4.0 器高：1.8	〃	E a	a	〃	内）黄灰 外）黄灰	回転糸切り痕有り	〃	283	口径：13.8 底径：5.9 器高：3.5	〃	E a	〃	有	内）明黄褐 外）灰白	回転糸切り痕有り	〃
264	口径：9.7 底径：4.4 器高：2.0	〃	E a	〃	〃	内）褐灰 外）褐灰	回転糸切り痕有り	〃	284	口径：14.7 底径：6.3 器高：3.7	D-3	〃	〃	無	内）灰白 外）灰白	回転糸切り痕有り	〃
265	口径：8.2 底径：3.6 器高：3.0	〃	〃	b	〃	内）浅黄 外）浅黄	回転糸切り痕認められず	〃	285	口径：13.6 底径：6.1 器高：3.7	E-2	〃	〃	〃	内）明黄褐 外）灰白	回転糸切り痕有り	〃

No.	法量	区	層位等	胎土	海綿骨片	色調	底部調整等	焼成
286	口径：15.0 底径：4.9 器高：4.1	E-2	Ea	a	無	外）灰白 外）灰白	回転糸切り痕有り	良
287	口径：15.1 底径：5.7 器高：3.8	E-3	Eb	b	有	内）浅黄 外）浅黄	回転糸切り痕有り	〃
288	口径：12.7 底径：－ 器高：－	E-2	Ea	a	無	内）灰白 外）灰白	欠損で不明	〃
289	口径：14.4 底径：－ 器高：－	D-3	Ea	〃	〃	内）灰白 外）灰白	欠損で不明	〃
290	口径：14.4 底径：－ 器高：－	〃	〃	〃	〃	内）明黄褐 外）明黄褐	欠損で不明	〃
291	口径：14.1 底径：－ 器高：－	E-2	B	〃	〃	内）灰白 外）灰白	欠損で不明	〃
292	口径：14.6 底径： 器高：－	D-3	Ea	〃	〃	内）灰白 外）灰白	欠損で不明	〃
293	口径：15.3 底径：－ 器高：－	D-2	〃	b	〃	内）浅黄橙 外）浅黄橙	欠損で不明	不良
294	口径：15.8 底径：－ 器高：－	E-2	〃	〃	有	内）浅黄 外）浅黄	欠損で不明	〃
295	口径：15.0 高台径：6.1 器高：4.7	D-3	〃	a	〃	内）灰白 外）灰白	回転糸切り痕認められず	〃
296	口径：15.7 高台径：5.7 器高：4.8	〃	〃	〃	無	内）灰白 外）灰白	回転糸切り痕認められず	〃
297	口径：－ 高台径：6.6 器高：－	E-2	〃	〃	〃	内）灰白 外）灰白	回転糸切り痕認められず	〃
298	口径：－ 高台径：6.1 器高：－	〃	B	〃	〃	内）灰白 外）灰白	回転糸切り痕認められず	〃
299	口径：20.8 高台径：8.6 器高：5.3	E-3	B	d	有	内）浅黄 外）浅黄	回転糸切り痕認められず	〃
300	口径：－ 高台径：6.6 器高：－	E-3	Ea	〃	〃	内）浅黄 外）浅黄	回転糸切り痕認められず	〃
301	口径：－ 高台径：6.4 器高：－	D-2	〃	〃	無	内）浅黄 外）浅黄	回転糸切り痕認められず	〃
302	口径： 高台径：7.0 器高：－		1号土坑	b	無	内）浅黄 外）浅黄	回転糸切り痕認められず	良
303	口径：－ 高台径：4.7 器高：－	－	1号土坑	〃	〃	内）浅黄 外）浅黄	回転糸切り痕認められず	〃
304	口径：－ 高台径：6.1 器高：－	D-2	Da	〃	〃	内）浅黄 外）浅黄	回転糸切り痕認められず	〃
305	口径：－ 高台径：7.8 器高：－	D-3	Eb	c	有	内）浅黄 外）浅黄	回転糸切り痕認められず	〃
306	口径：－ 高台径：6.0 器高：－	E-4	Ec	〃	無	内）浅黄橙 外）浅黄橙	回転糸切り痕認められず	不良
307	口径：－ 高台径：8.1 器高：－	－	1号土坑	〃	有	内）浅黄橙 外）浅黄橙	回転糸切り痕認められず	〃
308	口径：－ 高台径：9.3 器高：－	E-3	Eb	〃	〃	内）浅黄 外）浅黄	欠損で不明	〃
309	口径：－ 底径：－ 器高：－	D-3	Ea	b	無	内）黒 外）浅黄	内黒土器 内面ミガキ調理	〃
310	口径：－ 底径：－ 器高：－	－	1号土坑	〃	〃	内）黒 外）浅黄	内黒土器	〃
311	口径：－ 高台径：5.8 器高：－	E-2	A	〃	〃	内）黒 外）浅黄	回転糸切り痕認められず	〃
312	口径：－ 高台径：6.1 器高：－	D-2	Eb	〃	〃	内）黒 外）浅黄	回転糸切り痕認められず	並
313	口径：－ 高台径：5.8 器高：－	E-2	〃	〃	有	内）黒 外）浅黄	回転糸切り痕認められず	良
314	口径：－ 高台径：7.0 器高：－	－	1号土坑	〃	無	内）黒 外）褐灰	回転糸切り痕認められず	〃
315	口径：－ 高台径：6.8 器高：－	－	1号土坑	〃	有	内）黒 外）浅黄	回転糸切り痕認められず	〃
316	口径：－ 高台径：6.8 器高：－	－	1号土坑	〃	無	内）黒 外）浅黄	回転糸切り痕認められず	〃
317	口径：－ 高台径：6.2 器高：－	－	1号土坑	〃	〃	内）黒 外）浅黄	回転糸切り痕認められず	並

第4節　出土土器の計測

今回の調査区から出土した土器の破片数と重量を計測した結果を表15と16に示した。各地層の年代の判断基準は各層出土土器の年代と層位関係である。その層から出土するもっとも新しい時期の土器がその地層の年代を決定するものであるが、G層に弥生土器が混入すること、E層に珠洲焼が混入することを除けば、第3章第2節で述べたことをこの表が補強している。G層の弥生土器とE層の珠洲焼は1片しかなく、何らかの理由で混入した可能性が高い。

第15表　破片数の層位別計測表

（単位：片。上段破片数、下段その層中の%）

破片数計測表	縄文土器	弥生土器	土師器	須恵器	灰釉陶器	珠洲焼	越前焼	黄瀬戸	白磁	近世磁器	近世陶器	合計
表土～B層	53	11	548	13	0	3	1	1	1	4	4	639
%	8.3	1.7	85.8	2.0	0.0	0.5	0.2	0.2	0.2	0.6	0.6	100.0
C層	29	21	32	2	0	0	0	0	0	0	0	84
%	34.5	25.0	38.1	2.4	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0
D層	6	87	35	1	0	0	0	0	0	0	0	129
%	4.7	67.4	27.1	0.8	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0
E層	38	73	1,247	8	1	1	0	0	0	0	0	1,368
%	2.8	5.3	91.2	0.6	0.1	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0
F層	14	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	19
%	73.7	26.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0
G層	56	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	57
%	98.2	1.8	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0
H層	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4
%	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0
I層	1,873	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1,873
%	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0
1号土坑	67	4	819	7	1	0	0	0	0	0	0	898
%	7.5	0.4	91.2	0.8	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0
小ピット	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	2
%	0.0	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0
1号溝	0	0	5	0	0	0	0	0	0	0	0	5
%	0.0	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0
合計	2,140	202	2,688	31	2	4	1	1	1	4	4	5,078
%	42.1	4.1	52.9	0.6	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0	0.1	0.1	100.0

第16表　重量の層位別計測表

（単位：g。上段重量g、下段その層中の%）

重量計測表	縄文土器	弥生土器	土師器	須恵器	灰釉陶器	珠洲焼	越前焼	黄瀬戸	白磁	近世磁器	近世陶器	合計
表土～B層	697	74	2,929	513	0	280	38	10	8	25	75	4,649
%	15.0	1.6	63.0	11.0	0.0	6.0	0.8	0.2	0.2	0.5	1.6	100.0
C層	226	140	108	6	0	0	0	0	0	0	0	480
%	47.1	29.2	22.5	1.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0
D層	70	656	132	0	0	0	0	0	0	0	0	858
%	8.2	76.5	15.4	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0
E層	222	445	7,176	66	2	18	0	0	0	0	0	7,929
%	2.8	5.6	90.5	0.8	0.0	0.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0
F層	74	62	0	0	0	0	0	0	0	0	0	136
%	54.4	45.6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0
G層	386	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	390
%	99.0	1.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0
H層	102	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	102
%	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0
I層	28,342	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	28,342
%	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0
1号土坑	315	17	3,189	128	2	0	0	0	0	0	0	3,651
%	8.6	0.5	87.3	3.5	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0
小ピット	0	0	20	0	0	0	0	0	0	0	0	20
%	0.0	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0
1号溝	0	0	18	0	0	0	0	0	0	0	0	18
%	0.0	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0
合計	30,434	1,398	13,572	713	4	298	38	10	8	25	75	46,575
%	65.3	3.0	29.1	1.5	0.0	0.6	0.1	0.0	0.0	0.1	0.2	100.0

もっとも大量に出土したのは、Ⅰ層の縄文土器（1873片、28,342ｇ）とＥ層の土師器（1247片、7,176ｇ）である。個体数の計測をしていないが、破片数と重量では縄文土器の占める割合が個体実数以上に大きくなっていると考えられる。おそらく、個体数では縄文土器よりも土師器のほうが上回っているであろう。

なお、計測は木立の指導のもと、池村ひとみ、越田純子、山本澄美子が行ったが、この計測と第１～３節で沢田、白田が報告した計測値は若干異なっている。それは、この計測の後で、分析を深めるために沢田、白田が再計測したためである。　（木立　雅朗）

第6章　ま　　と　　め

本調査区では縄文時代中・後期から近世におよぶ自然河道を調査した。調査区のほとんどが河道の中にあたり、その幅は不明であるが、多くの遺物を出土した。特に、縄文時代中・後期の遺物と平安時代終わりの遺物が特筆されるので、簡単にまとめておきたい。

1．縄文時代の河道―「貯木場」としての河道―

縄文時代の堆積は砂と腐蝕土の互層であった。これは河道内の小さな流れが何度も流路を変えていたためと推定される。しかし、その小さな流路のまわりは腐蝕土が堆積するほど淀んでおり、そこから大量の木が出土した。鈴木三男氏の分析結果により、これらの木が自然堆積によるものではなく、何らかの人為が働いた可能性を指摘され、藤則雄氏の花粉分析もその指摘と矛盾しない。未製品の椀が出土したことと合わせ、これらの木は単なる自然堆積ではなく、多くが保管されていた「材木」であったと推定できる。いわば「貯木場」であった。鈴木三男氏が指摘するように、発掘中には小枝や根はほとんど出土していない。水に漬けることで加工しやすくしたのであろう。しかし、当初はこれらのほとんどを自然木と考えたため、サンプリングが限られており、発掘担当者の記憶でしかない点は反省させられる。また、川端敦子氏からクルミがまとまって出土していれば、種皮を腐らせた証拠になると指摘されたが、これも意識して取り上げていない。ただし、いくつかは散発的な出土であったが、ごく限られた場所の限られた地層から数個まとまって出土した記憶もある。樹皮を腐らせるために河道でクルミを水漬け貯蔵していた可能性があるが、クルミを軽視して記録しなかった点が反省させられる。

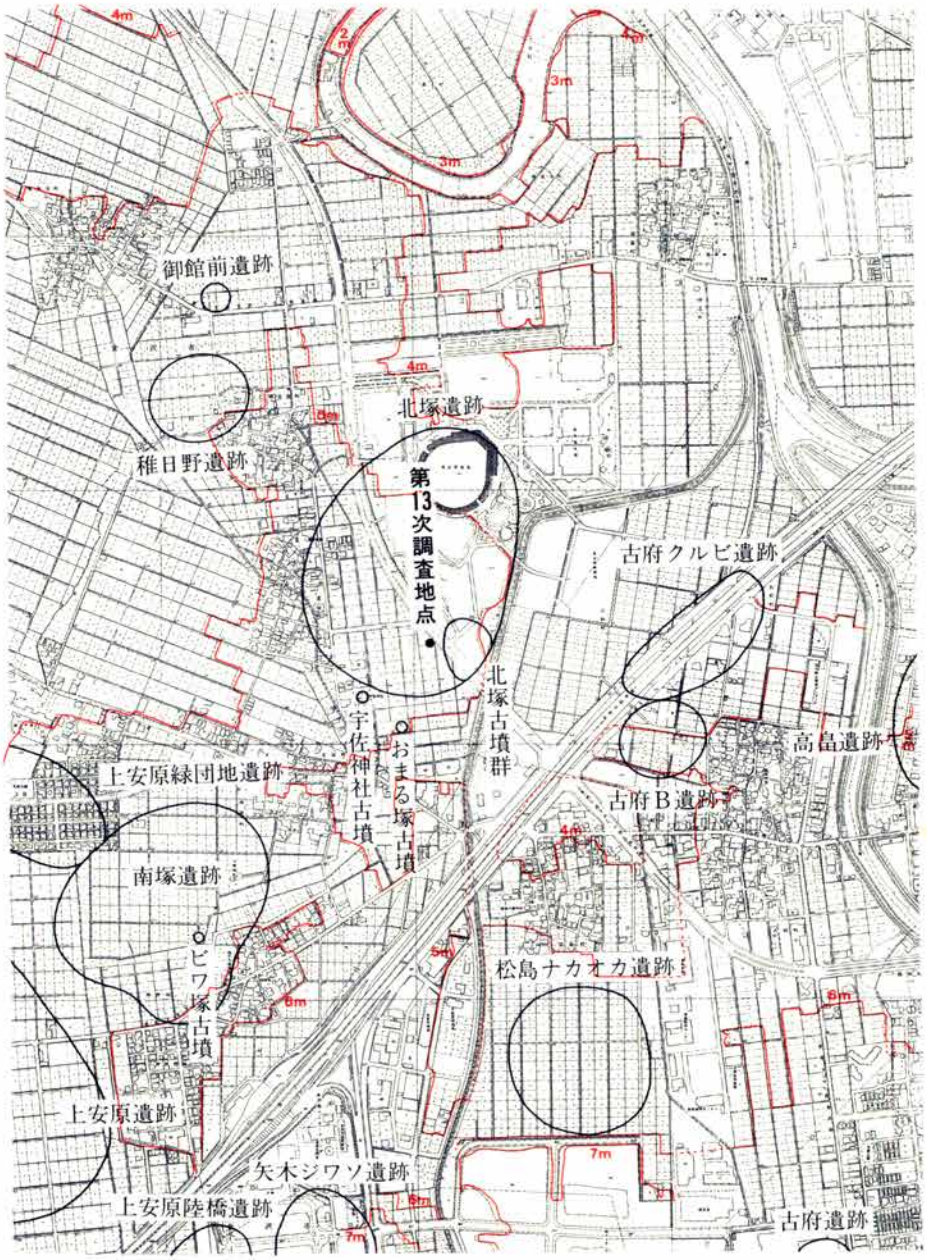
「貯木場」であった河道には大量の土器も捨てられていたがそれらはほとんど砂の部分からの出土であり、流路部分への投棄、もしくは流れ込みであったと推定される。ただし、土器の多くは磨耗度が低く、至近距離からの流れ込みである。

また、G層は砂がなく、腐蝕土で占められている。I層とは大きな違いである。G層は層位関係から弥生時代後期よりは古いことが明らかである。貯木機能は砂が流れるI層よりは高かったと推定されるが、ここではほとんど土器が出土しない。I層上部の段階に「貯木場」を維持するために人為的な流路の管理がなされていた可能性もあろう。一般的には縄文時代に溝や河道の整備は認められていないが、堆積状況の大きな違いから、自然変化と人為的な改変の両方を考慮する必要があろう。今後はこの河道の検討が必要になってくる。

2．平安時代おわりの土器投棄

平安時代終わりの土師器がE層中に大量に投棄されていた。E層そのものが河道の右岸のみに堆積しており、中央部分には確認されていない。そのため、河道右岸から投棄されたことが明らかである。水際での祭祀が行われたのであろう。E層は細分でき、出土遺物からも若干の時間幅が想定されるが、極めて短い時間に行われたと思われる。

Ⅰ層にしろ、E層にしろ、いずれも大量の砂が流れている段階に多くの遺物が出土しており、淀んだ状況の地層からの遺物の出土は極めて少ない。この河道をめぐる人間の活動がそうした段階に限られるのは極めて示唆的である。（木立　雅朗）



第39図　周辺遺跡と微地形

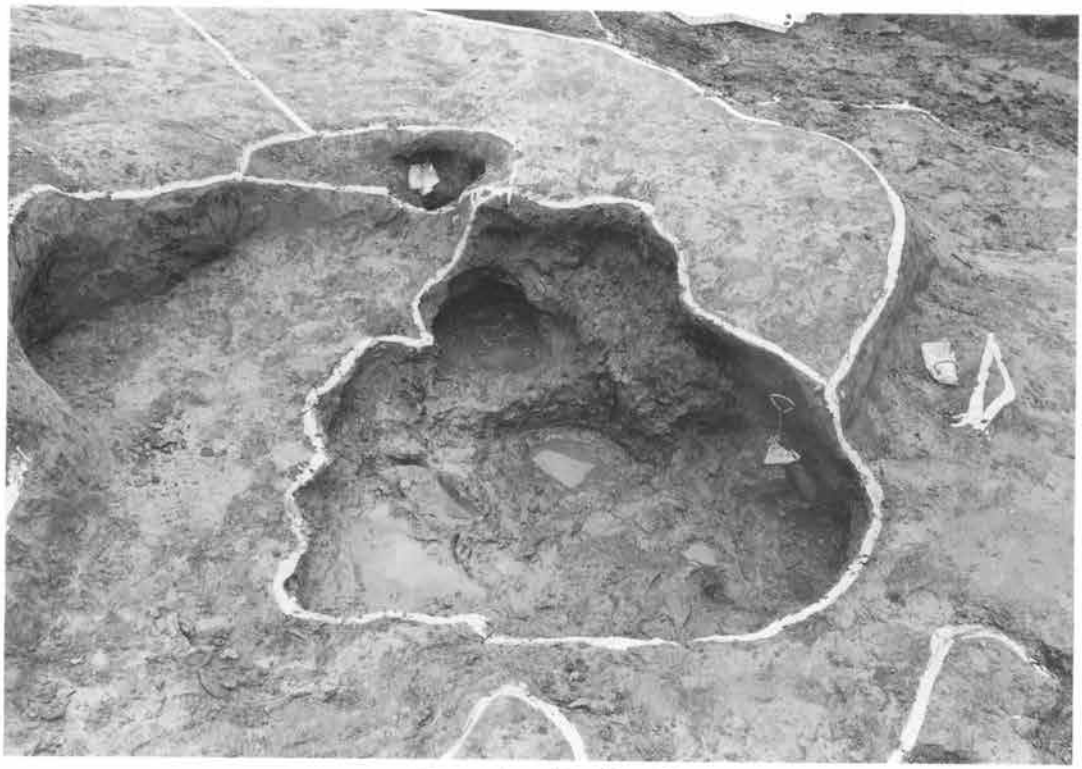
遺跡周辺航空写真

図版2

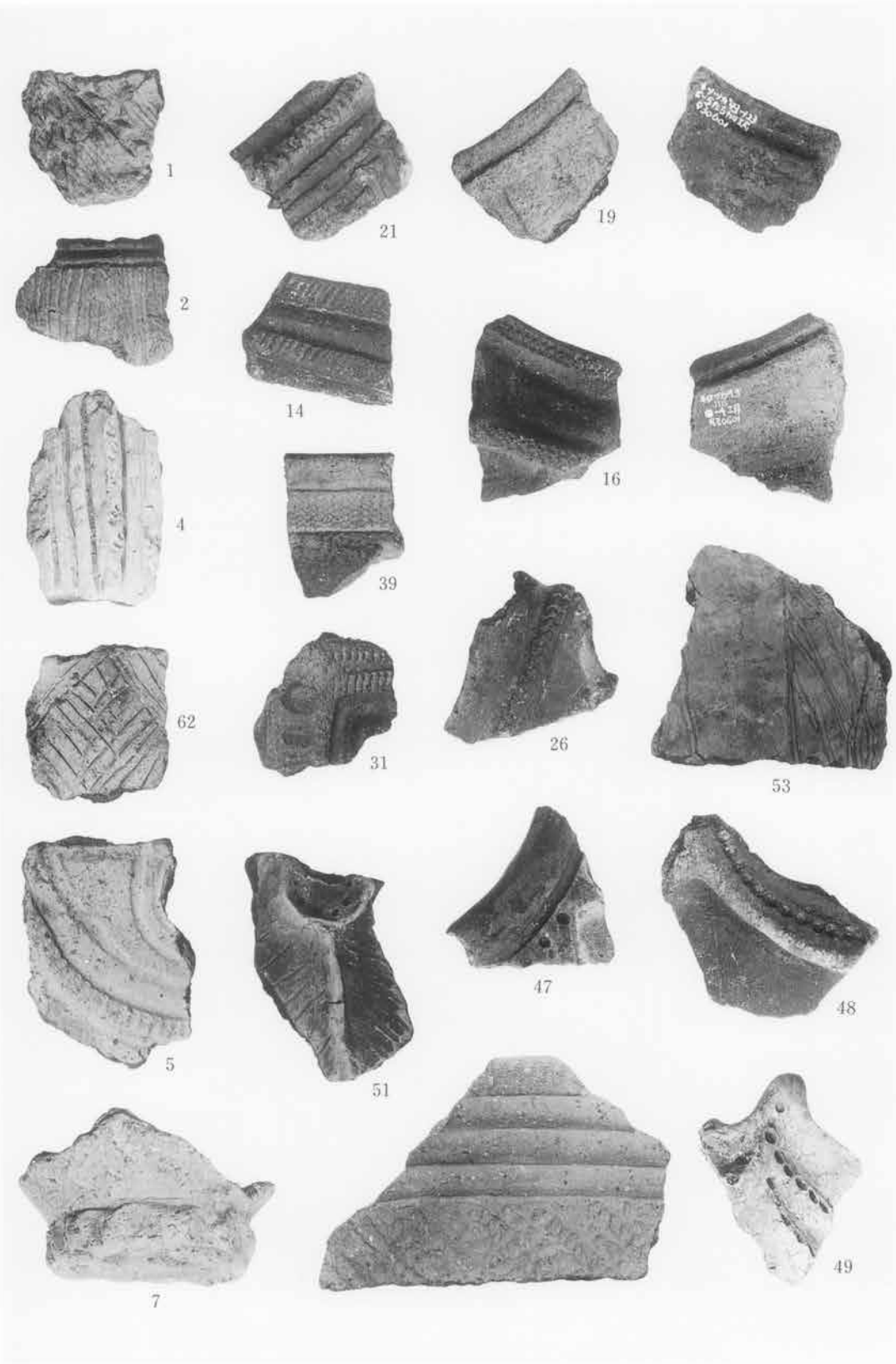
調査区　完掘状況　（南東より）

調査区　完掘状況（北東より）

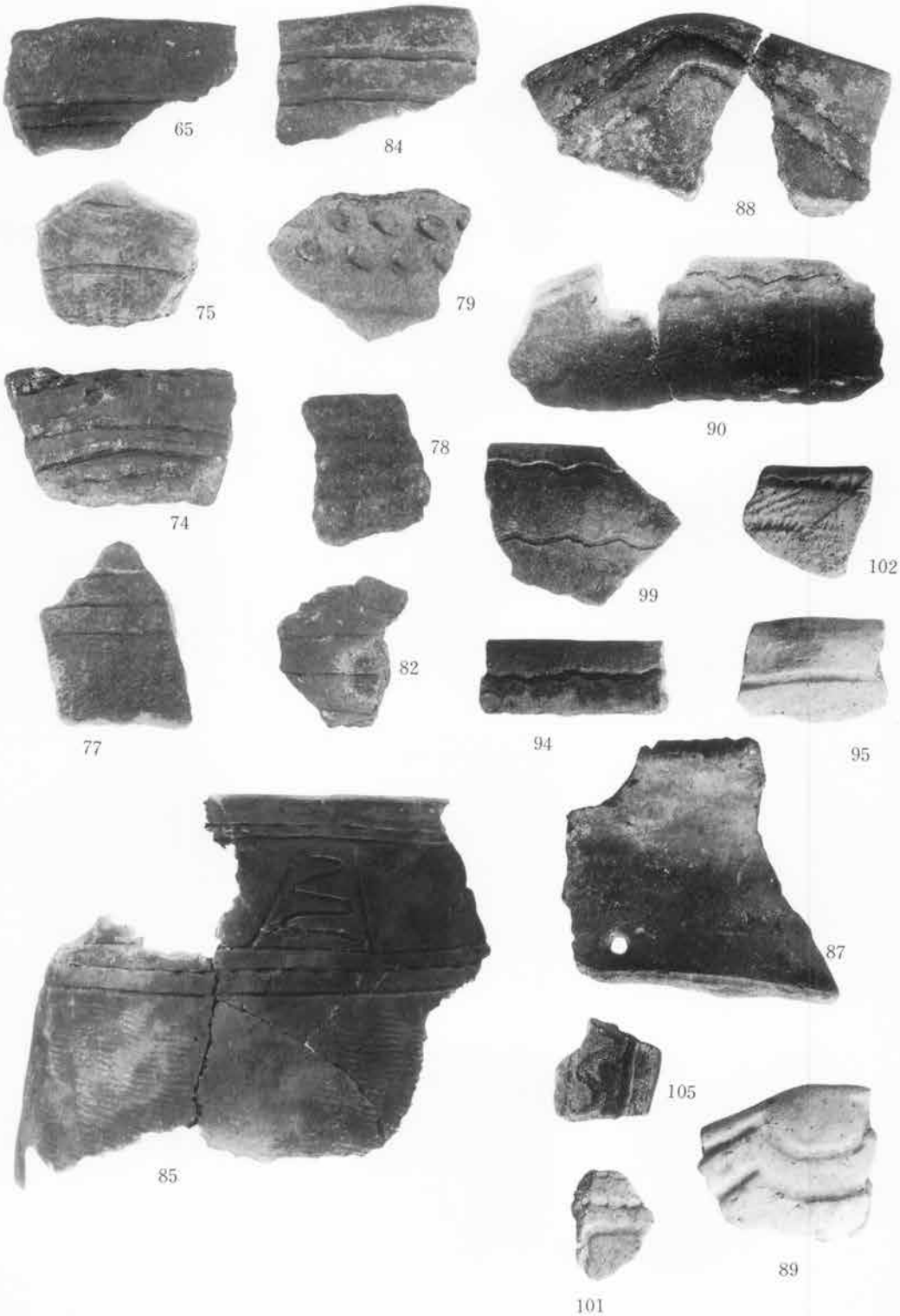
D-2区　土師皿出土状況



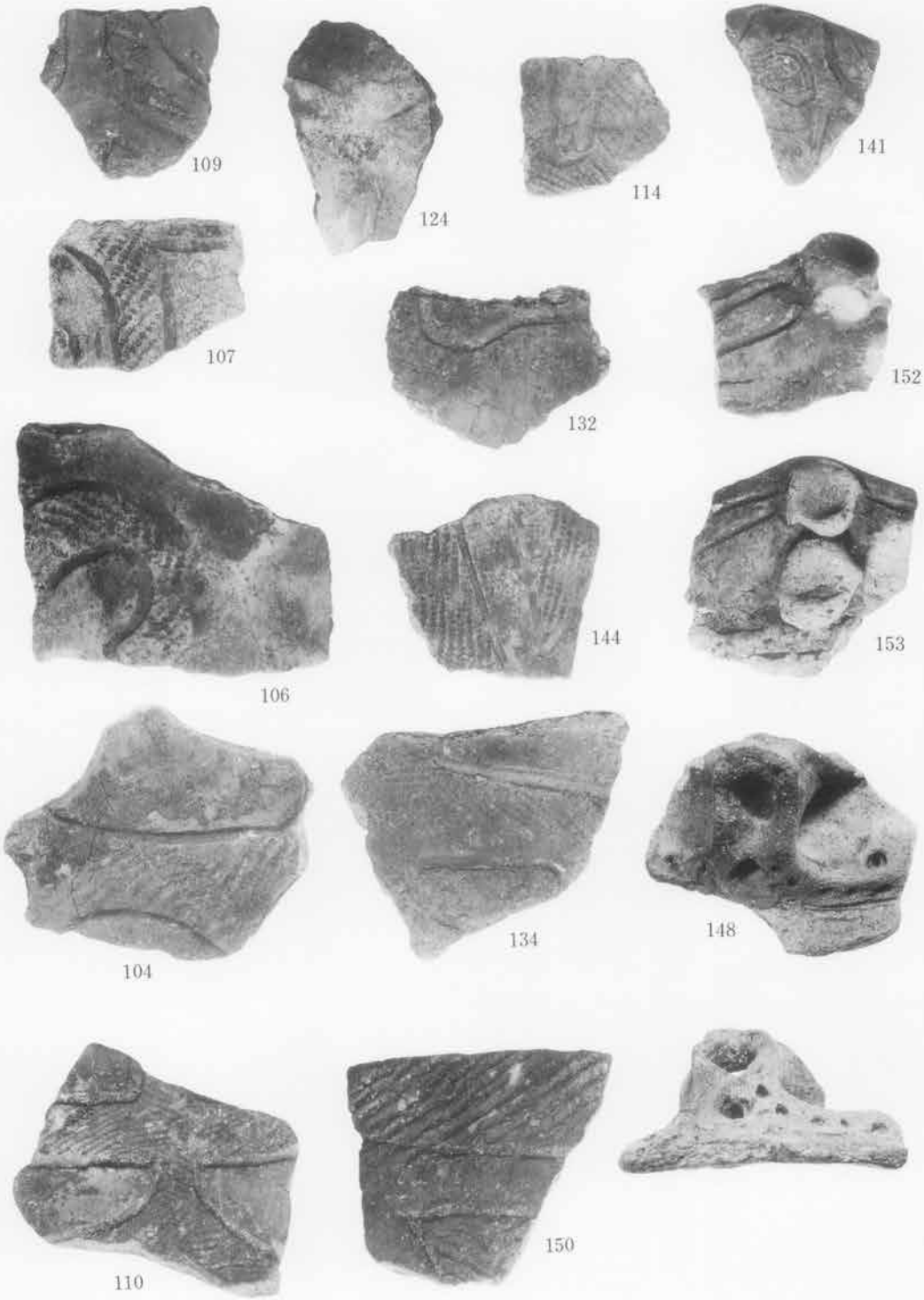
P-1　完　掘　状　況



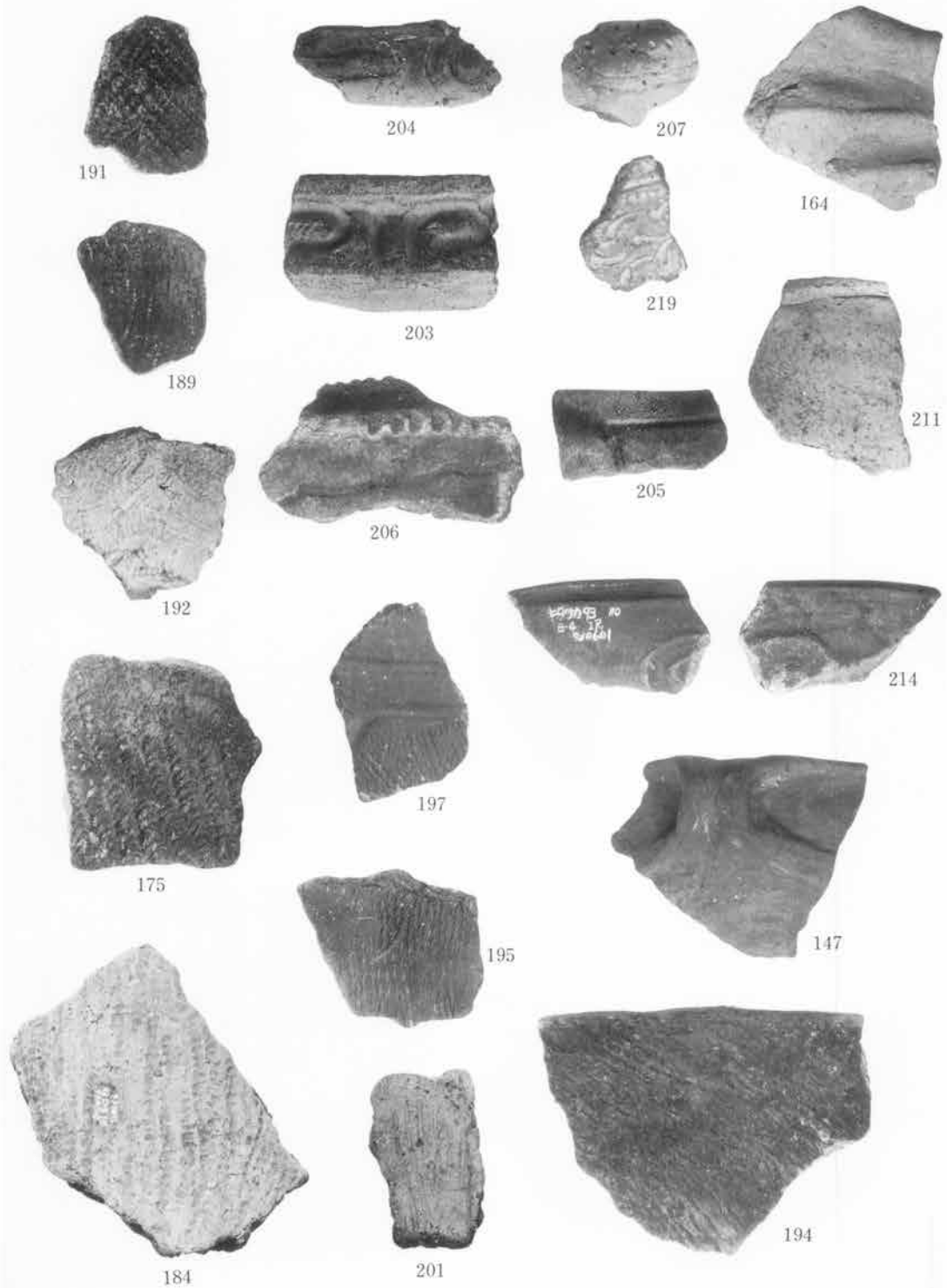
縄文　第1・2群土器



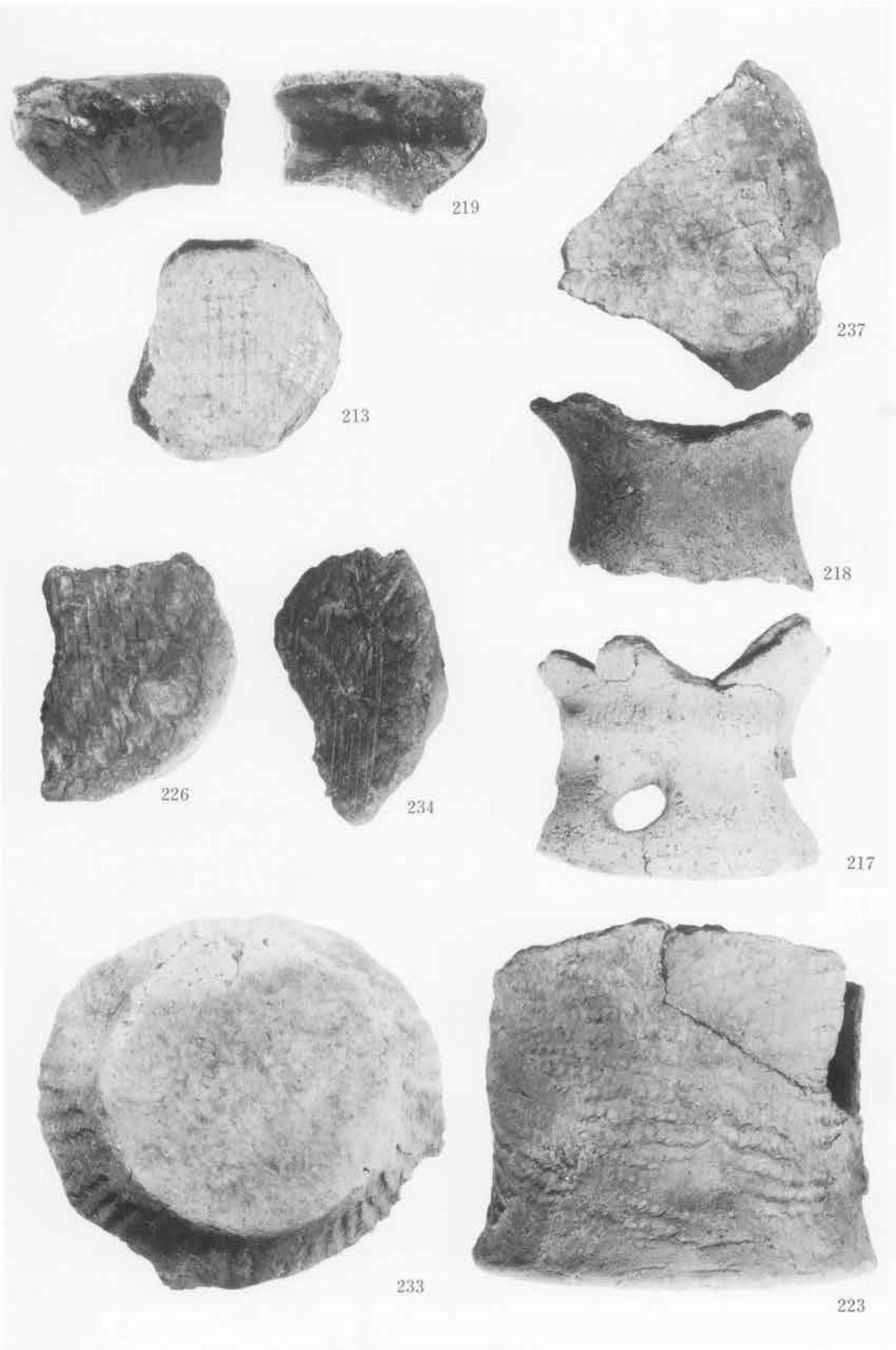
縄文　第3群土器



縄文　第3群土器



縄文第3群　粗製不明土器

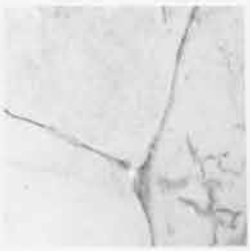


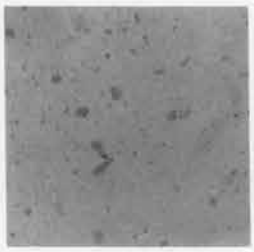
縄文底部および底部圧痕

石　　器

木　　器

胎土a類


胎土b類


胎土c類

胎土d類

247

248

249

252

253

255

266

267

272

273

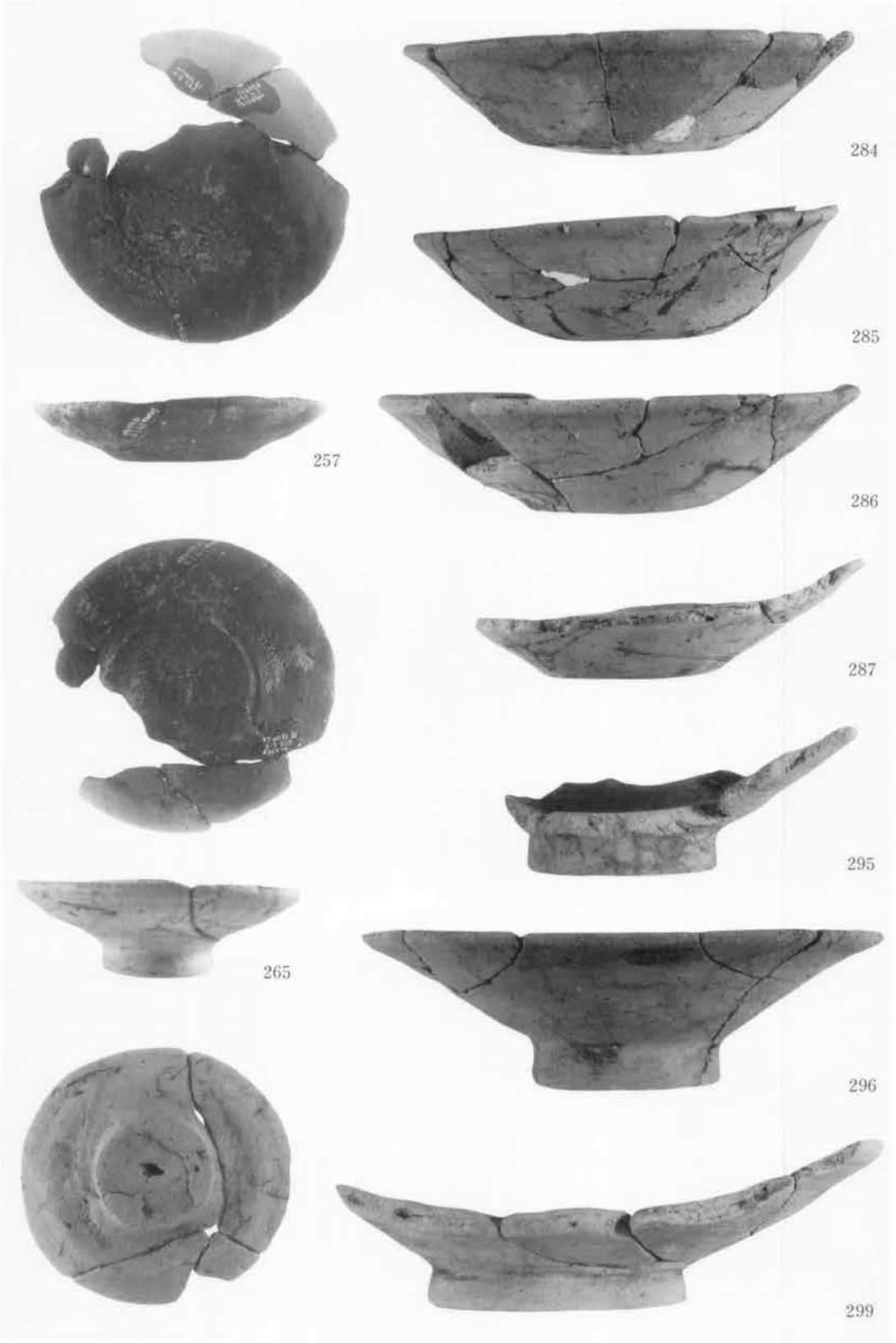
274

275

276

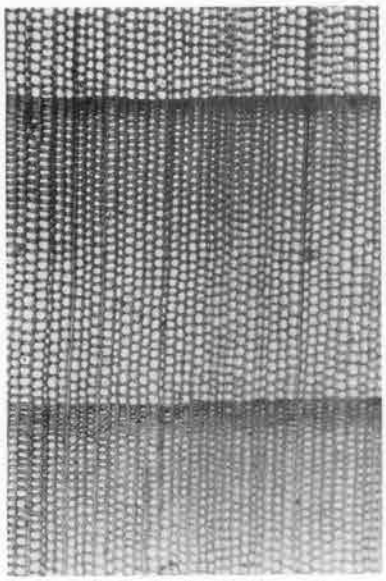
277

古代後半の遺物



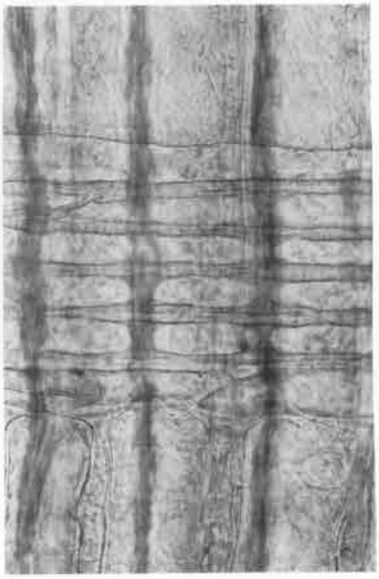
古代後半の遺物

図版12

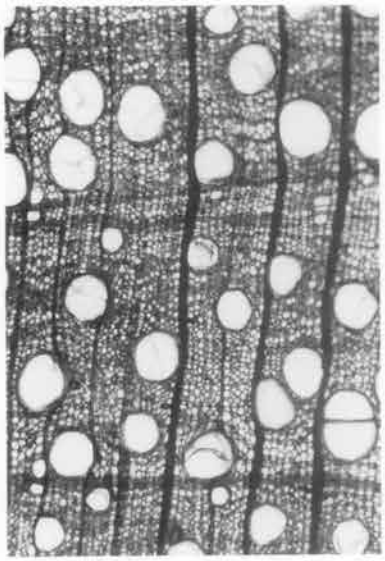


1 a.ヒノキ ISF- 1787 C×40.

1 b.　同　T×100.

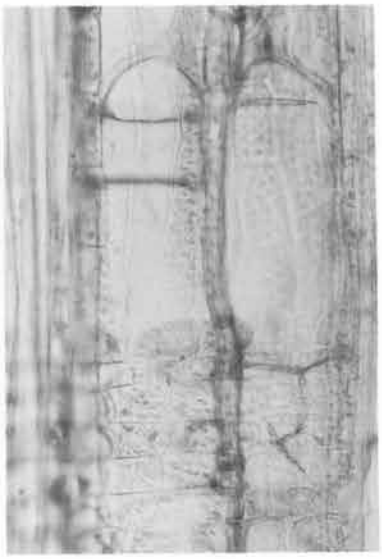


1 c.　同　R×400.

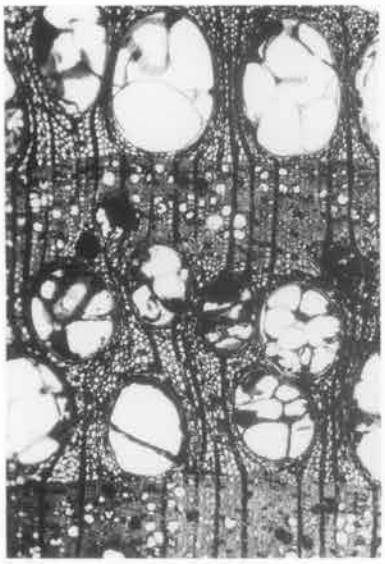


2a. オニグルミISF- 1790 C×40.

2 b.　同　T×100.

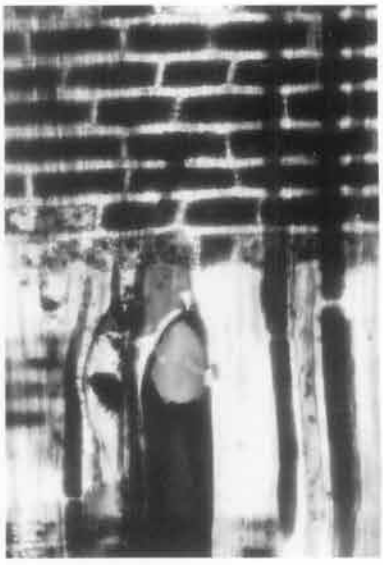


2 c.　同　R×200.

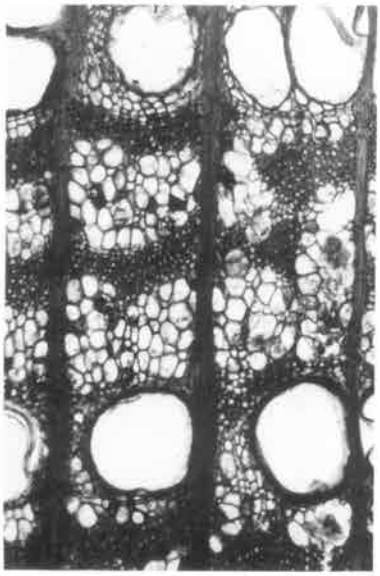


3a. クリISF- 1791 C×40.

3 b.　同　T×100.



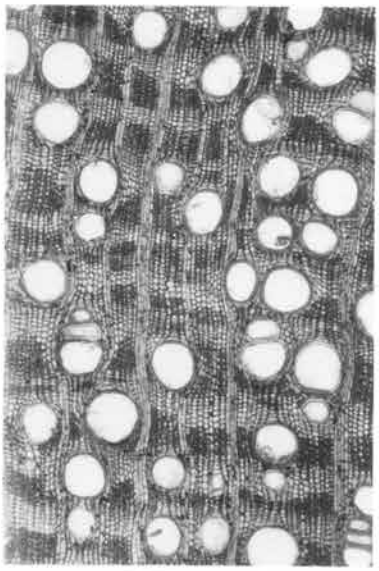
3 c.　同　R×200.



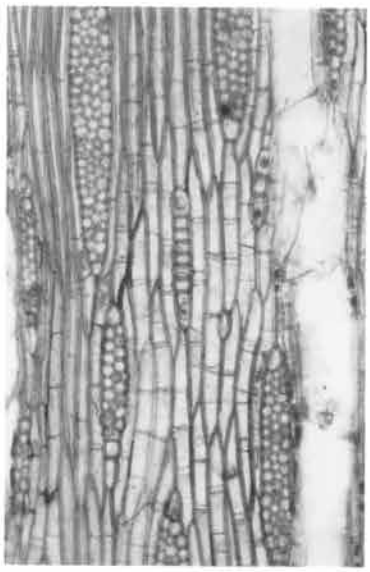
4a.ケヤキ ISF-1786 C×40.

4 b.　同　T×100.

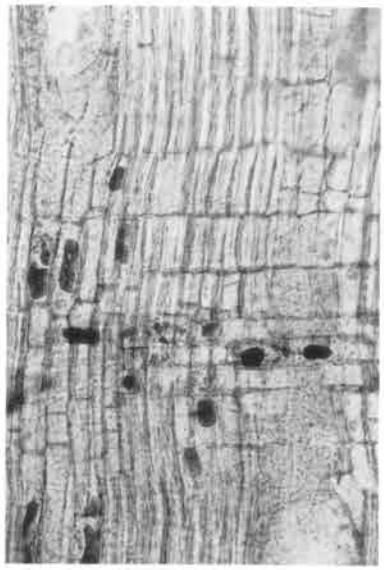
4 c.　同　R×200.



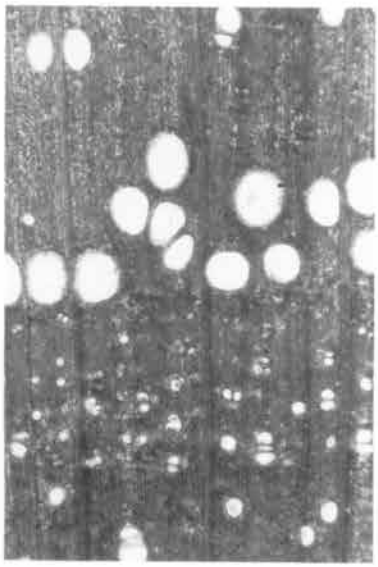
5a.イヌビワ ISF-1797 C×40.



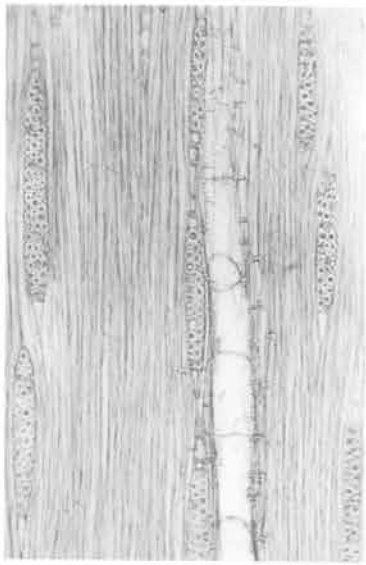
5 b.　同　T×100.



5 c.　同　R×200.

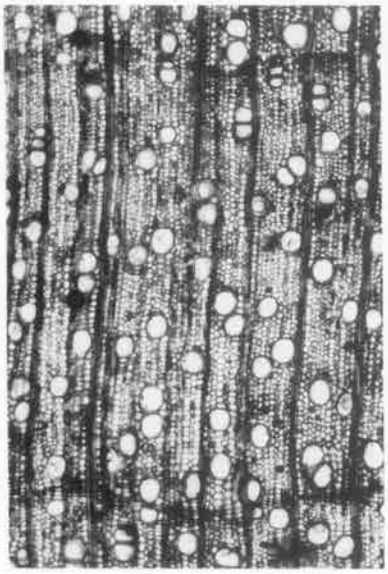


6a.ヤマグワ ISF-1789 C×40.

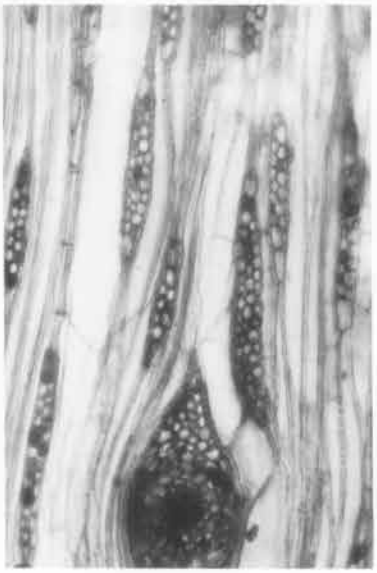


6 b.　同　T×100.

6 c.　同　R×200.

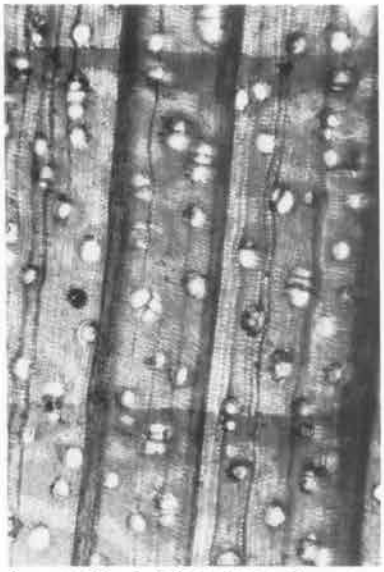


7a. シロダモ ISF-1793 C×40.

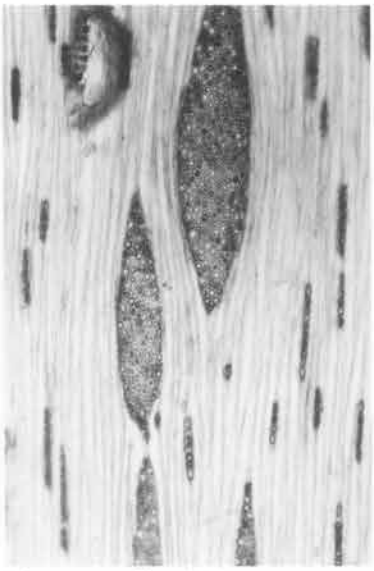


7 b. 同 T×100.

7 c. 同 R×200.

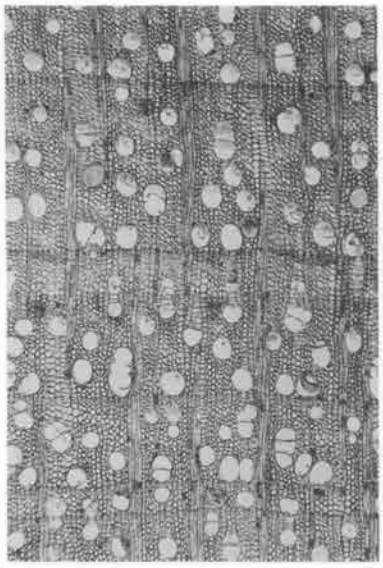


8a. チドリノキ ISF-1794 C×40.

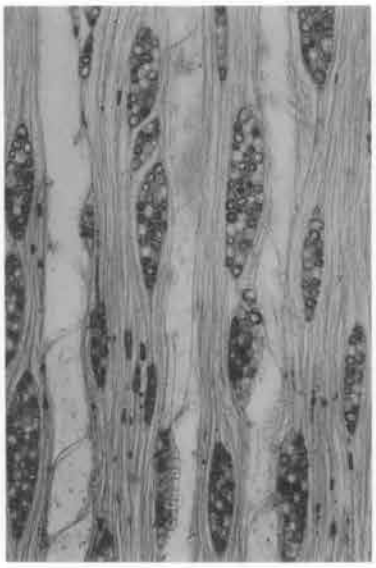


8 b. 同 T×100.

8 c. 同 R×200

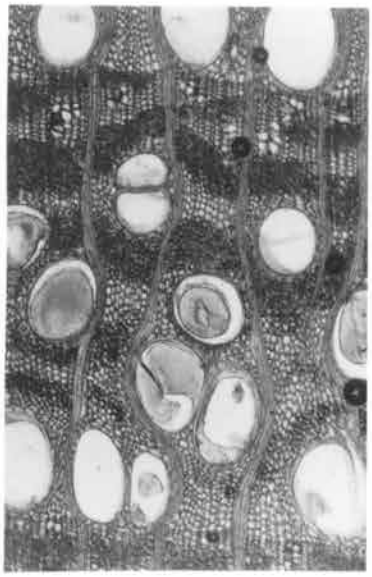


9a. カエデ属 ISF-1812 C×40.

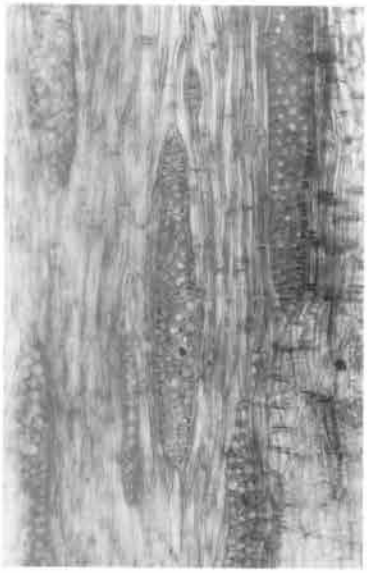


9 b. 同 T×100.

9 c. 同 R×200.

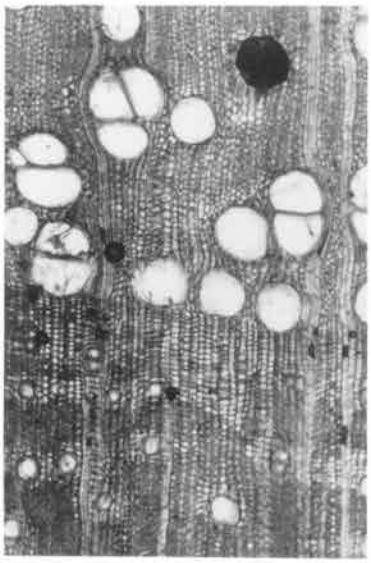


10a.ムクロジ ISF-1798 C×40.



10 b.　同　T×100.

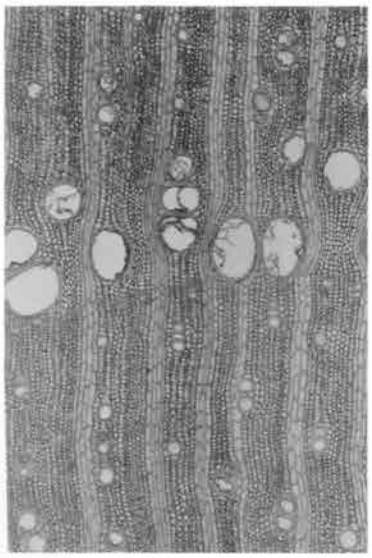
10 c.　同　R×200.



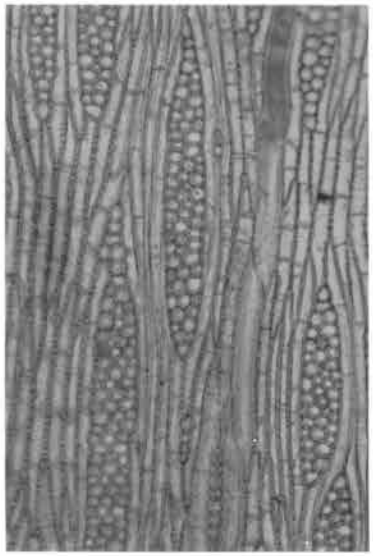
11a.クサギ ISF-1795 C×40.

11 b.　同　T×100.

11 c.　同　R×200.



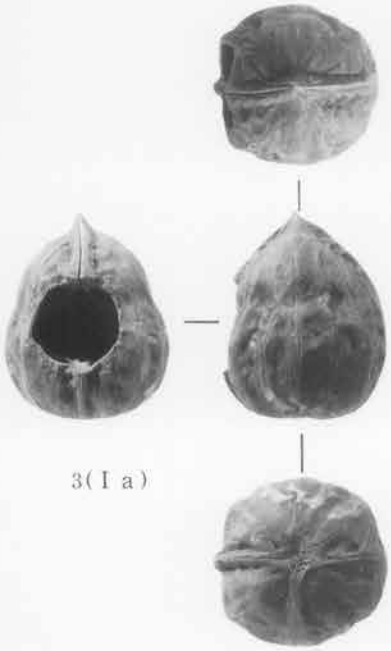
12a.トネリコ属 ISF-1818 C×40.



12 b.　同　T×100.

12 c.　同　R×200.

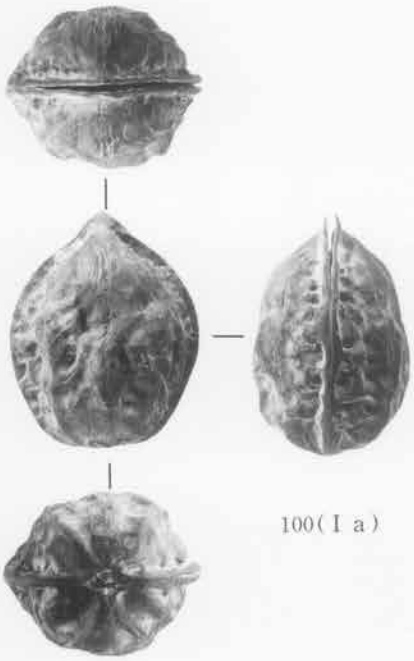
図版16



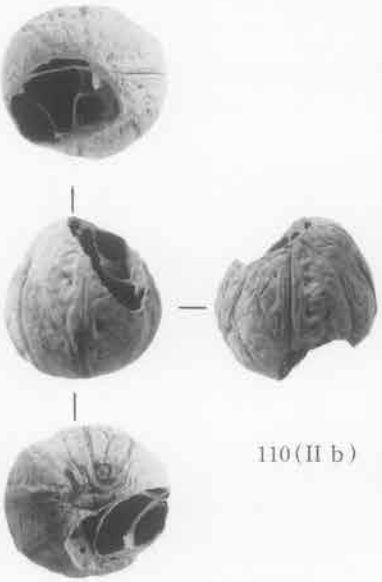
3(Ⅰa)

38(Ⅰc)

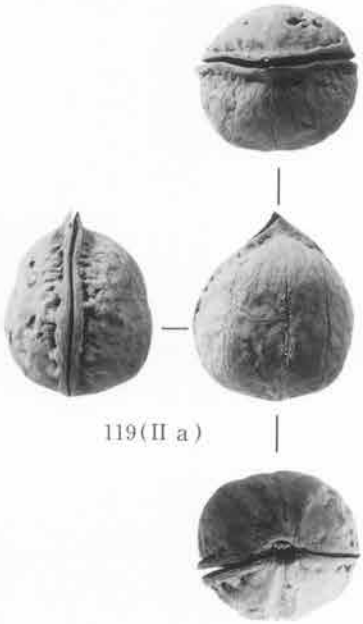
54(Ⅰa)



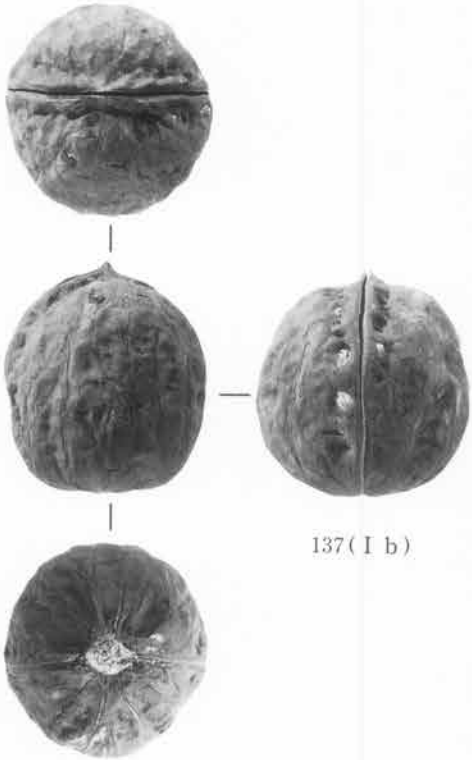
100(Ⅰa)



110(Ⅱb)

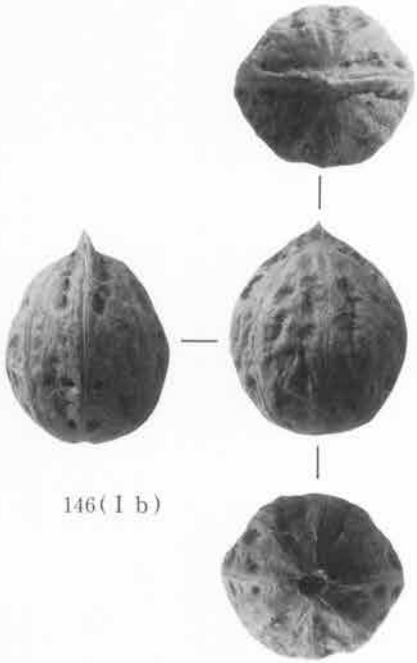


119(II a)

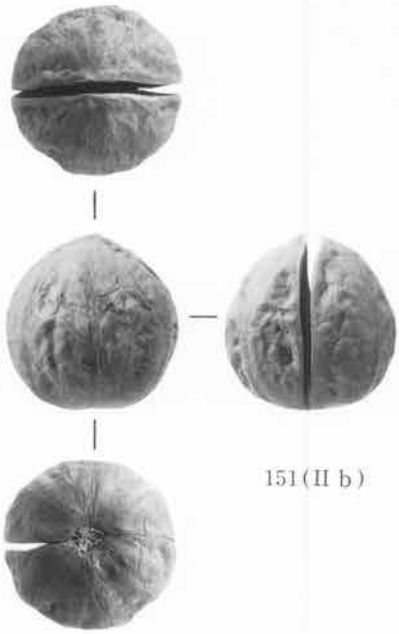


137(I b)

0 5cm



146(I b)



151(II b)

北　塚　遺　跡

—第13次発掘調査報告書—

金沢西警察署古府派出所建設工事
に係る緊急発掘調査報告書

発　行　日　1994（平成６）年３月31日

編集・発行　石川県立埋蔵文化財センター
〒921　石川県金沢市米泉町４丁目133番地
電　話（0762）43－7692（代）
ＦＡＸ（0762）43－8988

印　　刷　ヨシダ印刷株式会社
〒921　石川県金沢市御影町19－１